水野正次著

總力戰と宣傳戰

ナチス思想謀略の研究

水野正次著

總力戰と宣傳戰

（ナチス思想謀略の研究）

新民書房版

自序

今やわが國においても高度國防國家＝總力戰體制＝の理論と政策については、一應の理解と認識に到達しつゝある。すくなくともその原則的な方向と方法論の決定をみたかのやうである。ゆゑにわれ／＼はその理論と政策の實踐化——總力戰的全鬪爭の展開——のために、各鬪爭手段の技術的方法論の究明につき進まねばならない。

本書は總力戰的觀點にたちて、ナチスの思想戰・宣傳戰・謀略戰を、わが國現下の情勢と對照しつゝ研究し、ナチス的戰略・戰術が、いかなる教訓を齎らしつゝあるかを學びとるべく努力したもので、最近流行の傍觀的なナチス・ドイツの紹介でもなく、また、ヨーロッパ大戰のニュース的報道でもない。即ち、あくまで祖國日本の立場から、ナチスの全體主義戰爭の一分野たる思想戰・宣傳戰・謀略戰を、攻擊と防禦の戰鬪手段として究明せんとしたものである。

けれども、本書は嚴密な學問的領域における著作でなく、むしろより多く通俗の書であり、思想

・宣傳・謀略戰の理解を普及せしめんと願ふ常識の書であるが、學究的な良心は努めて失はざるやう心懸けたつもりである。

ナチスの思想・宣傳・謀略戰の眞髓を見極めずして、今次ヨーロッパ大戰の正體とナチス總力戰の實體を知ることは出來ない。ナチスの果敢なる思想・宣傳戰と第五部隊の暗中飛躍をもつてするナチス謀略戰の表裏に通じてこそ「復雜怪奇」な近代戰の假面をはぎとることが出來るであらう。

世界新秩序――大東亞共榮圈――の建設の前夜に立つ日本は、もはやいつまでも謙讓の美德を以て進むことは出來ない。ドイツの北歐作戰や獨ソ開戰の戰略・政略・謀略の水も洩らさぬチーム・ワークに徵しても解る如く、われ〳〵は常に新なる戰爭形態と戰爭手段を創造して、自己を主張し戰ひ取ることなくば、わが民族の生活する權利、民族發展の目的を放棄することになる。即ち、世界に冠絕する皇道主義の宣傳を斷念するに等しいことになるであらう。

大東亞共榮圈の確立といふ皇國の興廢を賭しての大事業が、單なる口舌の徒によつて出來るものでない、と同樣に、武力戰を本分とする軍人のみによつて出來上るものでもないことは、いまさら

發揮と伸張によつてのみ可能である。大東亞共榮圏の確立を前提とする世界新秩序の建設は、この困難な多角的總力戰の展開を通じてのみ戰ひとらるべきものである。

わが國の「思想・宣傳・謀略」に關する認識と理解は、人も知るごとく淺薄であり無智にひとしく、その活用と鬪爭の手段形式は、驚くほど拙劣である。

私はわが國のこの至らざる認識ど理解を深め、その活用と運營を鋭敏ならしめるべく努力したのであるが、私の微力と淺學は、折角の念願にも拘らず、本書におけるこのさゝやかな成果によつて滿足しなければならなかつた。

しかも、この貧しい成果すら、斯學に關する多くの先輩諸氏の不斷の援助と指導によつて、始めてなし得たもので、萬一本書にいささかなりとも、國家と讀者諸賢に益するところあるならば、その功績は、むしろ私を絶えず指導鞭撻して下さつた、多くの先輩諸氏に歸すべきものである。

本書の中には、多くの先輩の著書や英、獨の原書、あるひは内外の諸雜誌・諸新聞より引用した

箇所も隨分多いのであるが、煩雜を避けるために引用の著書を紹介してないものもあるので、卷末の附錄に、宣傳研究の參考書一覽表と共に、直接間接に著者に影響を與へた著書を、殆んど全部列擧することにした。

非禮ながら、先輩各位に、こゝに深甚なる感謝の意を表する次第である。

拙き本書における囑望は、總力戰における思想・宣傳・謀略戰の重要性について大方諸賢の更に深き、より高き研究の一礎石、一尖兵的役割に甘んずる以外になく、斯學の研究と理解のます〳〵助長されんことを切望してやまない。

本書の上梓にあたつて目下大政翼賛會にて活躍中の長友神谷茂、堤市則兩氏ならびに斯學の先輩新田宇一郎氏等のすくなからざる御盡力を賜はりしを特に記して謝意を表す。

昭和十六年七月

著者

總力戰と宣傳戰　目次

（了）

總力戰と宣傳戰

——ナチス思想謀略の研究——

第一章　緒論

第一節　二人の軍事專門家の教訓

近代戰の形態が、武力戰、政治外交戰、經濟戰、思想宣傳戰の綜合、統一せる國家總力戰であることは今更贅言を要しないであらう。しかも、近代戰の戰略上における思想・謀略・宣傳戰術がますます重要なる位置を占めんとしつゝある以上、われわれは國家總力戰に協力する文化技術者として、さらにその戰士の一人として、この問題――戰時謀略・宣傳の研究――をとりあげずにはゐられない。

私はこの意圖をもつて曩に「ドイツ的戰略とは」と題する拙著を出したが、それにたいする贊否の兩論とその後に讀んだ數册の書物は、私の獨善的な研究と結論とに深い反省と嚴重なる再檢討とを與へるとともに、この課題にたいする解答の困難さを痛感せしめたのである。

とくに近來稀なる名著と謳はれる「日本戰爭學」の著者たる陸軍大學教官、陸軍中佐多田督知氏が、「戰爭は國家の一大事である。それは民族の存亡・國家の興廢を岐ち、更に廣くは人類の安危禍福のよつて懸るところである。

戰爭に於いて、若しその撰ぶ道を一歩踏み誤らんか、忽ちにして國家は死滅の淵に突き落され、民族は永き暗黑・戰慄の苦界を彷徨はしめらるゝ。戰爭にして、若しも天地の公道より外れんか、人の世は悉く鬼畜の世界と化し、人々は擧げて悽慘なる生存を續けねばならぬであらう。

茲に於てか、勝利を目指す戰爭の理論も、またその意義と價値とに關する戰爭の哲學も、共に人類がそれぞれの歷史をもち始めて以來の重大なる課題である」云々、と。その書中（六三頁）に述べられたる貴重な教訓と、イギリスにおける現代最大の軍事評論家として令名あるリデル・ハート（Captain Liddell Hart）の「戰爭は國家の興廢といふ點から云つて一介の戰略家だけに依つて勝手に行はれるのには、餘りにも嚴肅な大業である。そこで、戰爭後の平和狀態をも含む大戰略に依る廣い視界が必要となつて來る。」といふ含蓄ある警告とは、いろいろな意味で不敏な私を再思三省せしめるに足る十分なものがあつた。

私は現代に活躍せるこの二人の軍事專門家の眞摯なる態度にすくなからず啓發され、激勵されつゝ、かつはその貴重なる敎訓を座右に銘記して、拙著「ドイツ的戰略とは」の改稿の筆をとるべく決意したのである。

第二節　我が國宣傳理論の批判

なほ、私に拙著の改稿を促したるいまひとつの重大なる理由と動機は、この貧しい著書にたいするきはめて懇切なる賛否兩論よりなるかずかずの批判と激勵と鞭撻であつた。

「新聞の現在及び將來」の著者にして、朝日新聞西部本社業務局長たる新田宇一郎氏は、拙著の公刊されるやいちはやく著者に懇切かぎりなき激勵と支援をよせられ「新聞の激務に從事しながらかくも廣汎な範圍から資料を集められた著者の努力には敬服に値するものがある。自分としては矢張り第一篇の「謀略宣傳」と第二篇の「新聞と宣傳」を面白く讀んだが、第一篇「謀略宣傳」は著者に更に時日を與へて、之だけを一本にまとめ上げてもらひたいと考へる。」と、過分な賞讃のうちにも、さらに突き込んだ研究を慫慂されてゐる。私は第一番に新田氏のこの親切なる激勵と聲援

に強く胸うたれるものがあつた。

新田氏のほかに「沈默の戰士」や「フランスより還る」の著者として聲名高き小松清氏や「國防國家と文化」「文化政策論」の論客として新體制の文化政策確立に活躍せられつゝある近藤春雄氏や、情報局の一員として宣傳政策を實踐されつゝ「戰爭と思想宣傳戰」の著述や飜譯に傾注されてゐる小松孝彰氏や、「宣傳技術論」を著はされ、わが國において始めて宣傳理論の學究的な研究とその新たなる分野とを開拓された小山榮三氏等の身にあまる賞讃と激勵と鞭撻とは（遺憾ながら、ここに引用を省略するが）不勉强な著者にすくなからぬ感激と發奮をあたへた。

わけて、大場彌平將軍の『「ドイツ的戰略」の戰略は、いふまでもなく國家總武力の運用であり、現象の國家機構では、それはまさに、武力と經濟と宣傳と國民精神昂揚の四要素のいはゆるチーム・ワークでありませう。

けれども、このうちで、最も戰略の最高目標とする戰勝の大焦點は武力の一點であります。ドイツが絢爛の外交宣傳戰略に新らしい一つの型を全世界に投げつけるほど戰略と結び付いたことは、吾々の學ぶべきことでありますが、しかし、宣傳謀略も或限度を越え得ないといふ現實を透視して

いたゞきたいと思ひます。ムッソリーニがエチオピア戰爭に際し宣傳謀略の大動員と、これが大運營によつて英海軍を地中海より退避せしめたなどは、この種戰略の典型的實効を收めたものであらうと思ひますが、最近におけるイタリーの戰績は、今後の宣傳・謀略をして手も足も出ない狀態に拋り込むことは見え透いてゐます。

ドイツがノールウエー進略に際し、知らざるものゝ如く、すべてを他に牽制し、深い濃霧の中に閉ぢ籠つてゐて、しかも、電光一閃の快戰略に出たのは、孫子の「兵は詭道なり。云々……」の詭道であつて、どちらかといへば企圖秘匿、作戰機密保持の方が焦點のやうに見えます。

ヒットラー總統が卒然獨ソ不可侵條約を結び、今日尙引摺つてゐるのは、ナチ百萬の軍隊がソ聯に備ふる所あるからです。空疎な宣傳の能くする所ではありません。

しかし、ヒットラー戰略の目にも鮮かなものとして、吾々に深く印象づけるものは、何んといつても仰せの通り、戰略・宣傳・謀略のチーム・ワークです。吾々はこれを學ばねばならぬと思ひます。過去の日本など夥しくバラバラです。この點に對して一大警鐘を亂打し、實際手に取るやうに國民に指敎をはつきり與へた貴君の著書は貴いものと存じます。

しかし、それと同時に、派手なビスマーク外交も、天馬空を征くヒットラー謀略も、之れみな老然たる大軍備と卓越嶄新の戰略が、大きく物を言ふてゐるといふことを、もつと突込んで說述されたなら更に錦上華を添へたことゝ存じます。それは書名が「ドイツ的戰略とは」とある點において殊にその感を深くする次第であります。』と、私の論說が、謀略・宣傳戰を重要視し、これを强調するのあまり、武力戰を過小評價せんとする傾向を、鋭くも警告された大場閣下の御批評は、流石に千軍萬馬の貴重な體驗から發せられた萬鈞の重みある教訓と戒告であつた。

第三節　謀略・宣傳は補助手段に非ず

拙著にたいしてやはり多大な御好意を寄せて下さつた石丸藤太氏も「大戰と日本の進路」と題する近刊の著書の中で、「戰爭は、なんといつても、血を流さずに勝負はつくものでないから、武力戰が本で、その他のものは畢竟するに、味方の武力を强大にし、相手の武力を弱め、かくして武力戰の勝利を確實ならしむる補助手段に過ぎない。武力を拔きにした戰爭はないのだ。これが戰爭本來の性質である。

この戰爭本來の性質を知らずに、外交戰とか經濟戰、乃至は宣傳戰、思想戰などに重きをおき、戰爭を神經の戰爭だとか、灰色の戰爭だとかいふ風に考へ過ぎると、そこに見當が外れ、豫想が裏切られることになる。神經戰爭や灰色の戰爭に憂身をやつすことに專念して、肝腎の武力戰を忘れたなら、戰爭はいつまで經つても勝負はつかない。結局は何のために戰ひつゝあるかの目的は朦朧となり、雙方共倒れになる結果になる。戰ふものは、この點に留意することが肝要である」（同書三三五頁）と。大場閣下と同樣、武力戰の過小評價に一矢を酬ひてゐられるのであるが、そして、私もまた、武力戰の優位と決定的攻擊力とを毫も疑はないのであるが、それと同時に、近代戰における謀略・宣傳戰の重要性を、決して輕視せんとするものではない。

いな、武力による相手國にたいする攻擊力が高まれば、高まるほど、また、その決定力が強まれば、強まるほど、謀略・宣傳の重要性も、その影響力も、相對的に高まり、かつ、綜合戰略上における謀略・宣傳戰術のすぐれたる威力は相當強く評價されてもよいと思つてゐる。

勿論、私はこの尊敬すべき二人の軍事專門家の警告と忠言を無駄にしようとは夢にも思はないが今次の大戰が民主主義國にたいする全體主義國の鬪爭であり、その限りにおいて武力戰を伴つたと

ころの廣汎なる思想戰、ないしは世界觀の爭鬪であり、リデル・ハートのいふ如く、戰爭後の平和狀態をも含む大戰略がはやくも準備されなければならず、また、フランス敗北の原因を、われわれは完全に頽廢せる國家組織、前世紀的遺物を模範とせる權謀術數の寧日なき舊式の政治的方法、しかして一ダースもの黨派に分裂せしめられた國民と愛國的精神の喪失などのなかに見出したる以上さらに、ドイツの西部戰線における赫々たる勝利が「狐疑に對して大膽が、打算に對して理想が、逡巡に對して確信が、防禦と女々しさに對して攻擊精神が、小心翼々たる動搖に對して熟慮斷行が山師根性に對して將帥的精神が、凡俗精神に對して天才が、洞穴と壘壁に對して生ける人間が鬪つた」ドイツ精神力の凱歌である以上、しかも、謀略・宣傳・思想戰が、單に武力戰、經濟戰の單なる補助手段たるにとゞまらず、高度國防國家の重要なる構成要素であり、それゆゑにこそ、攻擊對象としても、有力なる要素であり、近代戰の勝利が、結局において、武力・政治・經濟・思想謀略作戰の緊密なる綜合的戰果の上にこそ、はじめて輝くものたることを信ずること强き私は、謀略・宣傳・思想戰が武力戰・經濟戰にまさるものであり、これに代位するがのごとく考える誤謬とは、全然別な意味において、とくに今後の戰爭が、クラウゼウィッツの所謂「戰爭らしからざる戰爭」の展開

される可能性が充分にあり得ると思はれるにおいては、私はますます戰略上における謀略・宣傳戰の重要性と、その作戰計畫內への十分なるとりいれをあくまで勇敢に、また斷乎として强調したいのである。

すなはち、本書刊行の第二の理由と動機は、武力戰を過小評價せりとの印象をあたへるにいたつた既述の論說の不足と誤解とを補足し、拂拭するためであり、また、同時に、近代戰略における、とくに將來戰における謀略・宣傳・思想戰のあなどりえない威力と、重大性をさらに力强く主張し舊觀念による戰鬪形態にとらはれて、ともすれば謀略・宣傳・思想戰を輕視せんとする一派の風潮に深甚なる反省と考慮をわずらはさんがためである。

第四節　謀略・宣傳戰の評價と認識

陸軍省情報部陸軍中佐鈴木庫三氏監修の著書「世界再建と國防國家」のなかに、次のごとく論破せる一節がある。

「新興ドイツに著しく對立し何時かは相戰ふ時があらうと覺悟してゐたイギリスは、その民主主

義的な國家形態のために徵兵制度を布くことも出來ず、從つて十分に軍備を充實することが出來ぬために、他に對抗の道を發見しなければならなかつた。それは、イギリスの得意とする諜報網の充實であつた。單に軍事諜報だけでなしに經濟、政治、外交、思想の全面に亘る諜報網を用意した。

このことは、經濟、政治、外交等のこの諜報網の捕へた情報によつて、これらの分野に於いて直ちに敵國破壞の行動を起そうとする準備のあることを意味してゐる。經濟の面に於いて敵國が弱點を有するならば、直ちに、經濟界に混亂を惹き起させ、これを通じて敵を破壞しよう、政治的に缺點を有してゐるならば、直ちにこれを利用して內亂に至らずとするも經濟的紛糾を惹起させて敵を崩壞に導かう、思想界に些少なりとも不安があるならば、この點を衝いて厭戰反戰思想を誘發させようとの計畫のあることを意味してゐる。イギリスの所謂戰爭を武力戰に限らず、凡ゆる方面にまで及ぼそうとすることの作戰は功を奏した。

武力戰においては、ドイツは所期の戰果を擧げることが出來た。事實、東部戰線に於いても西部戰線に於いても斷乎敵を壓してゐた。しかしドイツは內面から打ち破られた。軍備擴張に重點を注いで食料品の確保に缺陷のあることを見てとつたイギリスは、直ちにその莫大な經濟力を動員して

經濟封鎖を行ひ食糧を買占めてドイツを飢餓に陷らしめようとした。これに氣のついたドイツはあわてゝ手を打たうとしたが時既に遲かつた。敗運は早くもここに根ざしてゐた。

また、イギリスはその充實した通信網を動員して盛んにドイツの軍國主義と非人道的なることを世界に宣傳した。ドイツが勝利するならば、世界は暗黑になるであらうと宣傳した。ドイツは物資缺乏の餘り、同胞の屍體から油を採つてゐるといふデマ宣傳さへ敢てした。かゝる宣傳は外國に對してのみでなく、ドイツ自體に開戰前から蠢動してゐた社會民主主義者がなほ不平を有してゐるのを見てとつて、ドイツ國內にまでこれを行つた。カイゼルの專制を倒して民主主義ドイツを建設せよ、我等はこの新ドイツと無條件にて講和締結の用意があるとか、早く革命を起して共和國ドイツを建設し永久平和のヨーロッパに參加せよとか、種々の手を用ひて宣傳した。ドイツの參謀本部はこれにも對策を講じたが遂には効果はなかつた。革命の烽火は遂に海軍部內にも上つた。

かうした第一次歐洲大戰は、武力戰のみの戰ではなくなつてゐたのである。また武器そのものも機關銃、航空機、戰車等の極めて消耗率の高いものが現れ、貯藏してあるもののみによつては不充分で生產しつゝ戰ふといふ新しい戰爭の形式が發生した。ここでは最早、純然と工業自體が戰爭に

參加してゐるのである。工場は戰場となつたのである。それは單に軍需工場のみではない。全產業がこのやうな意義をもつやうになつた。殊に鑛工業、原始產業たる農業とは違つて、一度破壞されるならば、それは直ちにこの生產しつゝ戰ふこの戰爭に致命的な打撃となつて現はれるからである。

このやうにして、第一次歐洲大戰に於いては國家機能の全體が戰爭に動員された。これは誠に國家總力戰といふことが出來る。單に國民全體が戰爭に參加してゐるのみでなく、國家機能の全體が戰爭の各要素となつたのである」云々………。

石丸藤太氏が「武力戰を拔きにした戰爭はない。これが戰爭の本質である。この戰爭本來の性質を知らずに、外交戰とか經濟戰、乃至は宣傳戰、思想戰などに重きをおき、戰爭を神經の戰爭だとか、灰色の戰爭だとかいふ風に考へ過ぎると、そこに見當が外れ、豫想が裏切られる。」云々といつてゐられるのは、武力戰、外交戰、經濟戰、宣傳戰、思想戰等をあくまで對立的に、また單一的に考へられてゐる證據であり、近代戰が單一武力戰的形態をすてゝ國家の總力をこれに動員する所謂國家總力戰の時代にうつたことを忘却されてゐるためである。

この點、鈴木中佐の見解はまつたく正しく、武力戰と同樣、經濟、政治、思想の活動そのものが戰爭であり、また、これらのもろ〳〵の要素を總力戰體制として編成し、國家機能の全體が、戰爭の各要素として、すなはち、攻擊力であり、また同時に防禦力として、有機的に戰爭全體に影響するやうな組織として、國家機構が編成されなければ、從つて、謀略・宣傳・思想戰もかゝる認識と運營において缺くところなきやう、强力なる戰鬪手段としての組織と體制を整へなければ、われわれはドイツの前大戰における敗北の苦杯をここに再び重ねゝばならない。

第五節　思想・宣傳戰の限界と武力戰

近代戰＝國家總力戰體制に「見えざる武器」として「精神的毒瓦斯」として、編成された思想的武器たる思想宣傳戰も、强力なる武力の背景と支援なくして、いな、武力による間接直接の援護なくして、これを成功的になし遂げしめることは出來ない。戰勝と武力による威嚇こそ、思想宣傳戰における最善の宣傳として作用するもので、武力による勝利こそ、むしろ最も高度の說得力（宣傳）である。

思想・宣傳戰が、かくのごとく武力的背景と武力による援護なくして、威大なる成果を収められないといふことは「宣傳思想」戰が戰爭の勝敗を決定する決定力でないことを意味し、ここに思想・宣傳戰のおのづからなる限界が横るのである。

しかし、思想宣傳戰が戰爭の勝敗を決定し得ないとしても、國家總力戰としての近代戰――とくに將來戰においては、武力戰のみによつて、戰爭の最後の勝利を確保し、決定することは出來ないのである。なぜなら、近代戰は、武力の停止が戰爭の終結を意味しないからである。戰爭は武力による爭闘の停止後においても續けられ、戰場の範圍が必ずしも武力戰場を意味せず、戰闘する各國家の全體戰となつた今日以後の戰爭においては、思想宣傳戰は、かつて戰闘を支援し、完成し、かつ成果を收めしめる準備であり、補助手段であつたところのものから、一躍上昇して武力以外の他の手段をもつてする立派な一つの戰闘手段となつたのである。だから、いかに強力なる武力が準備されてゐようとも、これと同等に、經濟と文化、外交と政治の體制と組織において戰闘手段としての用意と運營にかくるところあらば、戰爭はその一角から崩れ落ちるであらう。

しかし、この點に關する解釋こそ、私と他の軍事專門家との――論爭の重點であるから、さらに

具體的に、また詳細に、後章において論述することにしよう。

第六節　宣傳戰と謀略戰の定義

本書の目的とするところは、謀略・宣傳戰、あるひは思想戰と一般に稱せられてゐるものを、今次歐洲大戰におけるドイツ側（ドイツ軍、ドイツ啓蒙宣傳省）のなしたる實際と照らし合せて、謀略・宣傳・思想戰にたいする無防備と無統制がいかに恐るべき結果をまねくかを祖國を愛するひとびとにより深く認識していただき、さらに、これが防禦と積極的攻勢への確固たる方策の樹立を要望せんがためであつて、謀略・宣傳・思想戰にたいする學問的領域に於ける研究は、他に適當な學者もあるであらうし、私もいましばらくの時日をかりて、その研究を發表したいと思つてゐる。

ヒツトラー戰術といふか、ドイツ的戰略といふか、今次歐洲大戰におけるドイツ軍の作戰は、徹頭徹尾一種の政治的謀略戰であり、思想宣傳戰でもあつた。いな、すくなくとも「謀略・宣傳」がその戰略の上に、重要な位置を占めてゐたことは疑ひの餘地ないところである。私はある意味において今次大戰――歐洲大戰と支那事變――は武力戰の件つたところの一種の思想戰であると思つて

ゐる。それは民主主義と全體主義世界觀の對立鬪爭であり、また、對立する經濟觀の爭覇戰でもあるからである。

しかし、この種の議論は別として、本題をすゝめるにさきだち、ここに一應謀略戰とはなにか、宣傳戰とはなにか、思想戰とはなにか？　といふ概念をドイツの謀略・宣傳・思想戰の全貌を理解する上に必要なる豫備知識としてなるべく通俗的に說明しておくとしよう。

二月十一日のロンドンの各新聞は、突如として、しかも一齊に「極東に危機迫れり」との報道を滿載した。

デーリー・エキスプレス、デーリー・メール、デーリー・テレグラフの各紙をはじめ、英國內でルーター通信と契約ある各新聞は、いづれも同工異曲の「極東危機說」を掲載した。その報道を要約すれば、

「日本はドイツの春季攻擊に呼應して行動を起し、英國海軍力の分散に努めるであらう。かゝる情勢下にあつて、英領マレーおよび蘭印の危機はいよいよ切迫した。當然の歸結として、日米の正面衝突が豫想される」と、いふのである。

愼重をほこる「ロンドン・タイムス」までが「日本は傀儡か」と題するデマ社說を掲げ、所謂「極東危機說」なるものを宣傳したのであるが、この「極東危機說」は殆んど一瞬にして、濠洲、ニユージーランドに傳はり、更に蘭印からアメリカまで傳つて大きな衝激を與へたのである。

日本の新聞は、これを「根據なきイギリスの謀略・宣傳」と稱し、イギリスの陰謀を完膚なきまでに暴露すると同時に、折から開かれてゐたわが帝國議會において松岡外相も、このイギリスのデマ宣傳をコツピドク粉碎する演說をなし、さらにこれに關する抗議の覺書をイギリス外務當局に手交せしめたのであるが、われわれがこれをイギリスの謀略宣傳なりといふのは、なんのためであるか、また、イギリスがかゝる根據なき風說を世界に宣傳したのは、いかなる目的と意圖によるのであるか？

イギリスは泰佛印の停戰協定と東京會談を利用し、日本が南進政策を强化するとなし、早くもシンガポールに機雷の布設をなし、一萬二千の印度兵をマレーに增派したり、シンガポールにおける防備並びに空軍の增强をしたのであるが、イギリスの極東危機說の流布こそ、第一にこのイギリスの

極東の防備强化を合理化することであり、さらにあはよくば、アメリカの關心を極東に惹きつけ、日本の南進政策を事前に阻止せんとするにあり、また、アメリカに對する働きかけとしては「極東の危機切迫す」と呼びかけて、歐洲のみならず、極東においても、アメリカの對英援助を促進させ、極東より退却を餘儀なくされてゐるイギリスの地位を回復强化すると同時に、英、濠、蘭印の對日共同作戰へアメリカを引き入れよう、また、東京會談を決裂せしめて、東亞共榮圈に於ける日本の指導性を破壞しようといふ魂膽であつたのである。

だから、「極東危機說」の放送は、單純なる宣傳ではなく、イギリスの樞軸國、とくに時々刻々に迫りつゝあるドイツの對英作戰を極東に危機、即ち、戰爭を捏造せしめることによつて有利に打開せんがための牽制政策としての意圖が隱されてゐるのである。

そもそも「宣傳戰」とは、文化的技術をもつて、相手をして自己に有利なる衝動を與へる手段が、計畫的に行はれることをいふのであるが、「宣傳」に「謀略」なる文字をつけ加へたのは、「極東危機」が事實の報道にあらずして「極東危機」の捏造によつて、眞實の極東戰爭をデッチあげんとする政治的、軍事的な陰謀と意圖とがその宣傳の背後に隱されてゐるからである。

すなはち、「謀略戰」とは、自己の意圖を陰蔽しつゝ他の手段をもつて目的を達せんとする組織的な計畫であり、また、目的を祕匿された一種の軍事的な政策である。從つて諜報網との關聯において行はれ、相手になんらかの被害を與へるを常とする、といふことが出來るであらう。

支那事變勃發の最初、イギリスはわが國のマッチ製造能力を調査し、これを多量に買ひ込んだ。わが國の商人は外貨獲得なりとよろこんでこれを賣つたのであるが、忽ち、マッチは市場より姿を消して、國民の間からマッチの不足を告げる不滿の聲が發せられたが、これはイギリスの「經濟謀略」であり、日常必需品の買占めにより、わが國民の間に一種の厭戰氣分を起させるのが、その目的であつた。これも厭戰思想の流布といふ目的こそ隱されてゐるが、合法的な商取引を利用せるところのあきらかな經濟攪亂の「謀略戰」であつたのである。

第七節　思想戰の定義と三つの潮流

次に、思想戰であるが、これは多くの說明をせずとも、かつてのマルクス主義、共產主義思想の運動がいかなる國との密接不可分な關係においてなされてゐたかを思ひおこせば、あまりにも明瞭

で、ここに述べるまでもないと思はれるが、念のために一通りの解説をしておかう。

今日の世界の思想的潮流を大別するならば、およそ三つの主要勢力に分けることができる。この三つの思想の大きな潮流が、次期の世界秩序における主體性（指導性）を確保せんとして、文字通り三つ巴の爭覇戰を展開してゐるのである。

この第一の潮流に屬するものは、從來の舊き秩序をあくまでも擁護せんとする所謂リベラリズム―個人主義、自由主議の陣營であり、イギリス、アメリカがその代表的國家である。

第二の潮流は、このリベラリズムを本來の仇敵として起ち上り、萬國の勞働者、プロレタリアートを自己の主義の下に團結せしめ、それによつて全世界を暴力革命に導き、もつて赤い秩序を次の人類社會にもたらさうとする根本的な意圖をもつマルキシズムの陣營であり、これを代表する國家は、いふまでもなくソ聯である。

以上の二つの陣營に對して、さらに別箇のものが所謂フアシズムの潮流であつて、これに屬するものは個人主義・自由主義に反對し、階級鬪爭、共産主義を超克して、さらに新たなる全體主義（共同體理念）の世界觀にもとづき、それぞれの民族を基體とする新しい世界――廣域經濟圈――

の創造を企圖してゐる。この陣營に屬するものはドイツであり、イタリーであり、また日本でもあり、これを樞軸國と呼ばれてゐる。

この三つの潮流、即ち三陣營に屬する國々との爭覇戰はいはゞその世界觀の鬪爭であり、したがつて思想戰であるのだが、この思想戰は幸か不幸か、觀念世界の鬪爭として終るやうな生やさしいものでなく、國國の興廢を賭したはげしい武力戰さへみちづれにしてゐるのである。私が本書の序論において今次大戰の特徴として、武力戰の伴つた思想戰といふことが出來るといつたのは、この意味であり、思想戰は、しばしば武力戰を惹き起さしめると共に、武器がすでに收められた後にも繼續されるのである。

しかし、いづれの國を問はず、多かれ少かれ、自國內部にも、またこの三大陣營、三大思想潮流の對立抗爭を包藏してゐるのである。自國の存立を脅すところの不倶戴天の敵思想の抱懷者がゐるのである。

わが國內における現狀維持派（自由主義、民主主義陣營）マルクス主義に共鳴する（左翼派）も必ずしもいまだ絕無とはいへないが、ドイツに屈服されたノールウエイやオランダ、ベルギー、さ

ては、フランス內にさへ「第五列」と稱せられる親獨派のあつたことは不思議といへば不思議であらう。

ボルネオのある會社の常務理事津輕國雄氏は、この點に關して興味ある實感を（中央公論昭和十六年時局特大號）發表してゐられる。

「ナチス・ドイツの迫力や宣傳力には感心する。隣國のオランダにいつかナチス黨が出來る。否蘭印にまでナチズムが浸潤してゐるのである。ドイツのオランダ進攻當時、蘭印では電光石火的にドイツ人のみならず、オランダ人のナチス黨員を逮捕したが、その中には、役人や多數の會社重役なども含まれてをり、その數も數千に上り、ジャワの某島に抑留された。彼等の家財は競賣に附され、一日一ギルダーを與へられる。昨年八月國際監視團の巡回に、これらの人々は或る一定の個所に移されたが、ナチスのオランダ人が、その知己である或る日本人にニユースやいろ〳〵の物が欲しいと祕かに申し出たといふ事であるが、オランダ人にして、ドイツの盟邦日本にこのやうに賴るといふ事は並々ならぬことであり、この點でも、ナチス・ドイツの思想の强さと、迫力とは、今更の如く感慨させられるところである」

この一つの實例は、何よりも雄辯に武器なき思想戰の驚くべき力——思想宣傳によつて敵國人をも潜伏せしめるといふ——を證明してゐるではないか。

要するに、思想戰とは、自國の抱く同じ世界觀（思想）を相手國に植ゑつけることによつて、味方の陣營に引き入れることであり、共同の目的と理想に向つて協力せしめるために、武力以外の、即ち文化的技術を以てする鬪爭である。

以上は「謀略・宣傳・思想」戰に對する極めて簡單な定義であるが、大體これだけの概念を以てナチス思想謀略戰の全貌を判讀され、後章において更に明確なる理解に努められたい。

第二章　ナチス宣傳・謀略戰の全貌

第一節　謀略・宣傳戰の資料と觀察

謀略・宣傳戰の理論よりも、その實際――とくにドイツ宣傳戰の全貌――に興味をいだくひとびとにとつては、ながくしい謀略・宣傳戰の理論的追究は、むしろ退屈であるかも知れないし、また、讀者諸君の「謀略・宣傳」戰にたいするより深い理解をたすける上にも、ドイツ的戰略といふべき「謀略・宣傳・思想」戰の解剖からはじめることにしよう。

しかし、あらかじめ讀者の前に、とくに明白にお斷りしておかねばならぬことは、歐洲大戰は、現に繼續されつゝあり、世界的宣傳戰の渦中に蒐集されたる謀略戰と宣傳戰に關する資料は、資料そのものが極めて宣傳的要素を多分に含んでをり、その眞相をたしかめ得ないことであり、また、謀略・宣傳戰の技術や觀察や創案が、決して正確なる科學の部門に屬するものでなく、むしろ本能

の問題であり、獨自の才能の問題であつて、私の觀察と研究が同じ一つの資料に對して、かならずしも他の觀察者、または研究家と一致するものでないといふことである。

この點に關しては、ドイツ啓蒙宣傳省大臣ゲッベルスが「プロパガンダの技術は決して學び得られるものではなく、才能の問題である。故に、決して一種の熟練や手仕事にはなり得ない。プロパガンディストは人生のあらゆる領域に於て、出來るだけ廣汎な知識を所有しなければならない。」と妙味ある名言を述べてゐる。

この敎へて、敎へられず、學んで學び得られぬプロパガンダであればこそ、この種の問題に關心を有するものにとつて、無限の興味が湧くのであり、また盡きせぬ不思議な魅力ですらあり得るのである。

「宣傳技術論」の著者小山榮三氏は、最近私に一書をよせられ「貴著は戰爭に關する具體的な資料が豐富に取入れられてゐるので、我々は本書によつて生きた謀略・宣傳の實相に觸れることが出來ます。宣傳は哲學などゝは異り單なる理論ではなく、それは政治と同じやうに具體的な方法が、如何に相手方に反應したかと云ふことが問題であります。」と、申されてゐるが「宣傳・謀略」戰

術は、たしかに天才的な頭腦を必要とする一種の創作であり、その具體的資料の研究こそ最も大切なことである。私は小山氏ならびに讀者諸君にとつて（既刊の拙者に收錄せるもの以上に）さらに興味あり、さらに新鮮豐富なる資料を提供することに努力したいと思ふ。

第二節　ドイツの對ポーランド謀略戰

戰爭の決定的勝敗は、武力に先行する間諜戰によつて左右されることが多い。敵情をよく知つてをれば、戰はずして既に勝つたも同樣であり、また、敵國に關する情報は、政治、外交、軍事、經濟、產業、文化、思想のあらゆる部門に亘つて必要である。

武力戰にとつても同樣に、謀略・宣傳戰にとつて最も重大なる任務は、相手國に關するあらゆる情報の蒐集である。

一九三九年九月一日に戰端を開いたポーランド戰爭は、二ケ月で擊破してみせると豪語したヒットラー總統の豫想さへはるかに拔いて、僅に十八日といふ驚くべき短時日でポーランドは世界の地圖から姿を消してしまつた。

しかし、ひとびとはドイツ軍のこの大勝利の表面的な事實に眩惑されて、ドイツの水も洩らさぬ間諜工作と謀略・宣傳戰術の完璧であつたことを見のがしてはならない。

間諜科學の創始者スチベール（一八九二年沒）の昔より、ドイツは間諜工作に群を拔いてをるがドイツの空軍が、開戰後忽ち敵國ポーランドの要所々々に爆彈を投じ、波軍の連絡を斷つたのは、ドイツ間諜の風のやうな活動による結果であつた。

ドイツ軍の思ふにまかせた進擊と攪亂政策（謀略・宣傳）は隱れたる間諜組織に負ふところ最も大なるものがあらう。

AP通信員ロイド・レールバス氏は、當時ポーランド軍に從軍中であつたが、ポーランド南部の某所からニユーヨーク市AP本社に國際電話をもつて「獨空軍はポーランドの後方攪亂を目的として落下傘決死隊を組織して、ひそかに多數のスパイを落下傘で飛び降りさせ、ポーランド軍司令部所在地、同飛行隊基地、軍需工業地帶ならびに連絡線等を偵察させたことが判明した」と、ドイツ軍落下傘によるスパイ戰術を報告してをり、また他の報道においては「ドイツは百五十の機關銃と十八の輕野砲を有する千二百の兵を飛行機で百哩も運び、これを落下傘で降下し、八分内で地上で

集合、戰鬪態形を作つた。」と打電してゐる。故に、落下傘部隊による「奇襲戰術」は、このポーランドに於て、すでに實驗したのであるが、落下傘部隊については、オランダ、ベルギーの西部戰線における活躍まで、ドイツ軍は故意に堅く沈默を守つてゐた。

對波宣傳戰の幕は、九月三日における英佛の參戰を尻目に切つて落された。

「ポーランド人に告ぐ。諸君の政府は諸君を裏切つて、すでに首都を放棄せり。」と、いふビラが開戰後直ちにポーランド全土に亘つて撒布された。

また、九月八日の午後五時、早くも全世界に首都ワルシヤワの陷落のニユースが電波によつて送られた。この放送は明らかにドイツ的アクセントをもつたポーランド語であつたが、最初これをキヤツチしたアメリカのアマチユアーのラヂオ・ニユース・ハンターが、ドイツ軍のラヂオ宣傳隊がワルシヤワ放送局と同一波長で行つた謀略放送とは知らず、これを大袈裟に宣傳してしまつた。

しかし、事實はこれに反し、九月二十七日ワルシヤワの陷落まで、同放送局はポーランド軍と決死の局員に死守され「私共はもはやこのマイクを捨てなければならない時が來ました。しかし、最後まで踏み止つて死守します。」と、悲壯な女アンナウンサーの聲と共に、ワルシヤワ陷落の最後

の阿鼻叫喚が、ドイツ軍の機銃や砲聲と混つて電波に乘つて傳へられ、この決死的宣傳によつて少からず世界のポーランド同情者の胸を打つたのであるが、この間も矢張りドイツ的アクセントをもつた放送は續けられてゐた。

スペイン內亂に於けるラヂオ宣傳戰における成果の經驗は、將來の戰爭は放送局の爭奪が、勝敗を握る重要なる鍵となることを敎へたので、ドイツ軍は先づグライヴイッツの放送局爭奪に必死の努力を拂つたのである。

だから、ドイツ軍は先に行つたワルシャワ陷落のデマ放送を否認し、首都陷落の事實を否定し、九月十一日にワルシャワ市民に對して

「ドイツ軍の撤退要求に從はざるワルシャワ市民は峻嚴な法律によつて裁かるべし」と、市民撤退の要求を首都攻略を前にして、飛行機をもつてビラを撒布せしめてゐる。

ドイツ軍の對ポーランド宣傳中には、ドイツ國防軍總司令官フオン・フリッチ將軍の怪死事件ありこの將軍の死因を繞つて、英佛が「同將軍はドイツ政府によつて暗殺さる」とドイツ國內攪亂宣傳に利用するとか、これに反擊する「英陸相ホア・ベリシアの突如たる辭任」をめぐるイギリス內閣

の對立を捉へての辛辣な批評的な宣傳戰が相互に演じられたが、ドイツがこのポーランド戰爭の前後において狙つたところの宣傳の山は、ヒットラー總統の隱忍自重にも拘らず、これに挑戰したのはポーランドであり、ドイツのポーランドへの武力進擊は勘忍袋の緒を切つた止むにやまれぬ正義の進擊なり、との合理化であり、また、他面において、今次大戰勃發の責任と對波進擊を「合理化」すことによつて、これに干涉せんとするイギリスに轉嫁し、全世界にイギリスこそ、今次大戰の挑發元兇なり、との印象を出來得るかぎり强く印象づけんとすることであつた。

そのことは、英國が「靑書（ブルーブック）」と呼び「ドイツ、ポーランド兩國關係並に一九三九年九月三日のドイツ、イギリス兩國戰爭勃發に關する外交書類皇帝陛下の命により外務大臣より議會に提出されしもの」といふ長々しい表題をもつ、イギリスの戰爭挑發者はドイツなり、との辛辣な告發に答へて、早くも九月四日に發表したドイツ政府の「白書」にハッキリ讀み取ることが出來る。

私はむしろドイツ側が英國よりも「戰爭挑發者」の暴露文書を先に用意してゐたにも拘らず、英國側に一日先手を打たれたのではないかと想像してゐる。

ドイツ側の主張は、結局ポーランドは英國の戰爭意志の道具であり、穩健公正なるドイツの提案

に、ポーランドが應ずる意志のないのは、英國の援助を期待してゐたからだと、戰爭勃發に到る史的文獻を細目に亘つて提出し、これを實證せんとしてゐるのであるが、われわれにとつて遙に興味を喚び起すものは、いつの戰爭にも行はれる紋切型のこんな「文書宣傳」戰でなくて、ドイツがラヂオや寫眞(スチール)や映畵等あらゆる近代的文化技術を動員しポーランド人がいかに「非人道的殘虐性」に富んでをり、また、いかに「低級」な民族であるかを極めて煽情的に、異常な熱意と努力を傾けて訴へたことであつた。

由來ドイツ軍の宣傳は前大戰の場合もあまりにも理性的であり、從つて、また、あまりにも理屈に勝ち過ぎ、人間の感情的センスに訴へる力が弱かつた。

ドイツ政府は、「ポーランド人の「非人道的殘虐性」や「低級さ」の證據として、毎週手足を切斷されたドイツ人の新しい死骸が、ブロンムベルクやポーゼンで發見される。」との放送を行ふと共に、ポーランドの嚴重なる國境封鎖にも拘らず、國境を脫出せんとする在波ドイツ人の大衆逃亡の有樣や國境の避難所に於けるヒットラー女子靑年隊の救助作業の慘憺たる情景をカメラに捉へ、これを映畵とズチールを以て、特にドイツ國民に訴へたのである。

「撲殺、拷門によるドイツ人威嚇は日常茶飯事となつた」といふポーランドに於ける殘虐無道の違法行爲、流血行爲の暴露は、ドイツ國民に「ポーランドに於ける五萬八千餘名の殺戮の犧牲者」こそ、ヴエルサイユ條約とイギリスの保證によつて何等妨げられることなく敢行された犯罪行爲であり、イギリスこそ最後の流血的證人であるといふことを感じさせるに十分役立つたのである。

しかも、ドイツ側は、波蘭新聞の組織的煽動に對抗して、國民の敵愾心を奮起せしめるに、また極めて組織的で、當初（一九三九年一月頃）は波蘭措置に關する報道も論説も出來る限り差控へてをり、その間資料を十二分に準備して、ポーランド進擊にさきだち實に鮮な計畫的な國內宣傳の嵐をまき起したのである。

ドイツ國內の新聞雜誌に掲載された寫眞より復寫したものが、筆者の手許に十數葉あるが、この寫眞はボーゼン、ブロンベルク、ロヅ、東部オーバーシユレージエン等の地方にて行はれた殘酷なポーランド人のテロ行爲で、一九三九年六月頃からいよ〳〵熾烈となりドイツ人の死の行進――脅威の夏――が始まつたのである。この寫眞は丁度わが東京大震火災當時の被服廠跡の慘憺たる死體の光景を思ひ出させるもので、これを一目みて憤激の情と復讐の念を起さぬものはないであらう。

ドイツは自國民に對する團結、今次戰爭の正義化をポーランドの獨逸人排擊政策の全貌を生々しい事實によつて暴露し自國民の敵愾心を煽動することによつて至極簡單に手際よくやつてのけたのであつた。戰時における敵愾心こそ、團結のために最も必要な國民的感情の紐帶であり、敵愾心、憎惡、復讐心のごとき感情は、最も原始的、したがつて單純な感情であつて、しかも相當に根强いもので、ドイツ宣傳省が、今次大戰に先だちいち早く國民の敵に對する憎惡の念を起させ、一切を敵の責任に歸する「戰爭合理化」に成功したのは非常な强味である。

かくて、今次大戰こそドイツ國民にとつて、侵入する虐殺者――ポーランド、これを支持する英佛――に反抗する防禦のための戰爭といふ定石通りの信念を植ゑつけ、勝利にとつて必要なる國民の團結を確保したのである。

この點、一九四〇年四月廿七日ベルリンに於て外交使節團並に新聞記者團に對して行うた外相リッペントロップの演說の中に自信に滿ち〱た句調で語られてゐる。

「獨逸國民は英佛今次の挑戰に敢然として應じたのである。ドイツ國民を滅ぼしその權利を破壞せんとする英佛兩國政府の目的は獨逸國民の統一戰線によつて實現不可能となつた。」と。

第三節　ドイツの對ノールウエー謀略戰

北歐作戰におけるドイツの宣傳分野における活動と政策は、最初に先づこの北歐作戰の秘密嚴守とそのカムフラージュといふことに向けられたのである。そして、この仕事は主に内外の新聞を極度に利用する一種の謀略宣傳によつて行はれたのであるが、このことに就いて後章――ドイツの新聞政策、外交宣傳戰――において述べることにする。

謀略的な宣傳によつてバルカンへ進擊するかの如き態勢を示してゐたドイツ軍は、自爆したシュペー號の補助船アルトマルク號が、英人の捕虜を乘せて本國歸還の途中、英驅逐艦にノールウエー領海に逐ひ込まれ、英人捕虜三百名を奪ひ返された二月十六日の事件と、英艦の機雷施設を口實として、四月九日、突如ノールウエーに進攻した。ドイツ側では「イギリスが軍隊をノールウエー揚陸のために、水も洩さぬ準備をしてゐたことが、ノールウエー進駐ドイツ軍がナルヴイクに押收した文書によつて明白になつた。英佛が早くも北歐干涉のために講じてゐた準備が、如何に大規模なるかを證するその他の動かぬ證據が發見された。」と、所謂英佛の陰謀と稱せられる「眞相曝露」の

宣傳戰を行つたが、私はノールウエー進攻は「アルトルマルク號事件、英佛兵揚陸」の如何に拘らずスウエーデンの鐵鋼を確保せんとするドイツ軍既定の作戰計畫と睨んでゐる。

ドイツ軍は攻略せんとする國に對しては、常にあらかじめナチス的な政治工作を丹念にほどこしてゐることを注意しなければならない。最近數年間におけるラインランド、オーストリー、ズデーテン、チエツコ、メーメル等失地回復と所謂「無血の勝利」こそ、その蔭には、いつも完璧に近い間諜網が張りめぐらされ、この諜報組織の政治的工作――謀略――によつて無血の戰果をかち得たものゝである。

オーストリーの合併におけるナチス政治工作の例をとつてみれば、オーストリーにナチス運動が擡頭したのは一九三三年のヒツトラー政權獲得後であつて、首相ドルフス博士は徹底的にナチスを彈壓したが、一九三四年七月廿五日のナチス反亂によりドルフス首相は暗殺され、オーストリーには「内部から墺國を奪取する」政治工作が緻密な計畫のもとに着々行はれてゐた。オーストリーにおけるナチスの政治的謀略をみると、

一、墺國内に一種の「工作隊」を組織し、間諜網を張り、墺國ナチスの運動を操縦指導してゐた

二、外國の干渉を避けるため内部より墺國を奪取する策を採つた。
三、目的貫徹のため極力墺國ナチスを援助し、資金の供給、幹部人材の訓練に當つてゐた。
四、獨逸の墺國における經濟的政治的勢力を利用した。

眼にもとまらぬあざやかなノールウエー進擊の蔭には、占領後直ちに親獨政府の首班となつたキスリング少佐に對して、オーストリーの場合と同樣な政治的謀略が、既に潛行的に工作されてゐたことは疑ひの餘地がない。

シカゴ・デーリー・ニユースの特派員リーランド・ストウ氏は、「エデイター・エンド・パツブリシヤー」誌に、ノールウエーに對するドイツの謀略工作の曝露記事を書いたが、右によれば、ドイツのこの謀略戰こそ、「二十世紀最大の怪奇な陰謀」と稱せられるものであつた。

ドイツ軍のノールウエー上陸は、一九四〇年四月九日であつたが、その數日前の五日ノールウエー政府の高官連に、ドイツ公使館より一通の招待狀が屆けられた。その招待狀には、たゞ非常に珍らしい映畫を御覽に入れるとだけしか書いてなかつた。

それが會期の二日前だつたので、閣僚は出席できなかつたが、二百名以上の名士が集合した。

その夜、どんな映畫が上映されたかといふと、ドイツ空軍がポーランド市を爆撃して、恐るべき猛威を揮つてゐるところで、映畫が終つた時、親獨派として有名な某氏が一人だけ拍手した丈けで他の人々はしばらく一言も發しなかつた。

やがてシヤンパンとサンドウイッチが運ばれた頃、ドイツ公使クルト・ブラウエル博士は客席の間を來會者の感想をきゝながら歩いてゐたが、彼は誰にでも一樣に「これは戰爭映畫ではありません平和の道を選ぶ者の避けることが出來る災害を示した反戰映畫です」と說明した。

しかし、その映畫を見た人々の恐怖はどんなだつたであらうか、ドイツ公使館はなんの目的で、ポーランド都市爆擊の猛威をスクリンに再現して、人々の恐怖を喚び覺ましたのであるか。いふまでもなく、この映畫の上映は、恐怖の映像をハッキリとノールウエーの大官連にきざみこむことによつて、ドイツ公使が說明したごとくノールウエー國民に反戰厭戰思想を鼓吹したのであつた。同國民のドイツへの戰鬪的精神を喪失せしめるのがあきらかにその目的であつた。

この映畫會が催された數日後、四月九日ノールウエーの首府オスローは、突如千五百名以下のドイツ軍に占領され、市内では一個の爆彈も落下せず、一發の銃聲も聞えず、何等の反抗も試みられ

ず、二十四時間に堂々占據され、第五部長キスリング氏の親獨派との連絡と上陸作戰の齟齬のため「ブリュッヘル」號が、オスカーボルグの要塞地で擊沈せしめられた不祥事件を他にしては、ナルヴイック、ベルゲン、トロントハイムの陷落も、オスローと同巧異曲の經過を示し、全諾威海港は、緻密なナチス第五部隊の工作と、諾威の內通者とに依り、十二時間の白日夢の中に、完全にドイツ軍の制壓するところとなつた。と、ストウ氏は報道してゐる。

ストウ氏は、ドイツ軍のあまりにも巧妙な謀略作戰に驚嘆して、オスローは別として、ナルヴイツク、ベルゲンその他におけるノールウエー軍とイギリス救援軍との激烈なる戰鬪の報道を二十世紀における最大の怪奇な陰謀を誇張せんがために、故意に忘れてゐるやうである。

獨軍當局の公表によつても、ドイツ國防軍の損害は、將校、下士および兵を合せて戰死一、三一七名、負傷一、六〇四名、海上輸送中その他の行方不明二、三七五名、計五二九六名。

海軍においては、巡洋艦三隻、驅逐艦一〇隻、潜水艦六隻。

外に小艦艇および補助艦艇十五隻を喪失した。

空軍は戰鬪により又海上への不時着により飛行機九十機を失ひ、又陸上に不時着及び敵襲により

地上において二十七機を失つた、といつてゐる。獨軍當局みづから語るこの數字が最小限度の被害を意味するものとすれば、なほさら北歐作戰におけるドイツの陸海空軍の犧牲によつてもわかるやうに「二十世紀における最大の怪奇な陰謀」のみによつて、一發の爆彈を見舞はれず、一發の銃聲も聞かれずに行はれたオーストリーやチエッコその他におけるがごとき決して「無血の勝利」でなかつたのである。

しかし、ストウ氏の報道がジャーナリステイクな興味をそゝらんがために、すくなからず誇大に報道されたとはいへ、ドイツ軍のオスロー占據の九日の晩、オスロー放送局がキスリング國民政府の成立を告げ、事實假政府の首相にキスリング少佐が就任し、コンチネンタル・ホテルに新内閣の事務所を置いて活動を開始したこと、キスリング政府事務所がナチスの鐵衛部隊の指揮と保護のもとにあつた等のあまりにも手際のよい「キスリング親獨政府」の成立によつても、キスリング一派の第五列的存在と、同一派の所謂「怪奇な陰謀」であつたことは最早や疑ひの餘地ないところである。

キスリング少佐は、一九三二年より三三年までノールウェーの國防相を勤めてゐたが、在任當時

陸軍將校の大量進級と任命を行ひ軍部に相當の勢力を扶植してゐた。

コングスヴインゲルやザルプスボルグの堅固な要塞の司令官達が、武器を抛棄して劣勢なドイツ軍に降伏したことや、キスリングの親獨政黨がいまだ一箇の議席すら獲得してゐないのに、また、その機關紙「自由の民(フリー・ピープル)」が、僅か三千位の發行部數しかなかつたにも拘らず、その讀者の多くは殆んど陸海軍の樞要地位にある將校連であつたといはれる事實よりみて、キスリング氏が、陸海軍にいかに牢固たる潜勢力を持つてゐたかを想像するに難くないのである。

オスロにおけるキスリング一派の活躍以外に、ノールウエー全土に亘つて、いかに物凄い第五列の暗躍がなされてゐたかを「ナルヴイクを脱出したテオドル・ブロツク市長の手記」によつて語らしめよう。

「ドイツ軍が進出して來るといふことについて、わたしはこれまで一度も警告めいたものをうけたことはなかつた。しかし、幾分その疑ひをもつてゐないわけではなかつたのだ。ドイツのスパイが相當ナルヴイクで活躍してゐたし、二月（一九四〇年）にはクルツプ會社の社員ミユーラーといふ兵隊上りの男をわたし達は逮捕した。

このミューラーといふ男は、ナルヴイクから積み出されるドイツ向けの鐵鑛の帳附けをやつてゐた。そのころイギリスの鐵鑛船が、次から次へとナルヴイクの沖で沈められてゐたが、わたし達はそれをてつきりこの男の仕業と睨んだのだ。果してその通りで、この男はイギリス船の動靜を逐一ストツクホルムへ暗號で打電し、そこからベルリンの情報局へ知らせてゐたのだ。

ドイツ軍がナルヴイクへ上陸したとき、彼らは一目散にこのミューラーが住んでゐた家の近くへ押かけた。そこにはいつの間にか澤山の武器が隱されてゐたからだつた。

ドイツ兵がナルヴイクへ上陸する直前にも、わたし達はケールンといふドイツの漁業會社の社員を逮捕しようと思つてゐた。彼はナルヴイク郊外のある小屋から頻りに本國へ秘密の無電で情報を送つてゐたのだが、わたし達が彼の情婦であるノールウエー女を捕へようとしてゐることを知つて逮捕事前に自殺してしまつた。

このほかオスローの關係當局から行動を監視するように注意されてゐた人物がナルヴイクには二名あつた。

それはノールウエーのアスキム海軍準尉とスンドロ陸軍大佐の二人だつた。

アスキム準尉は、今ワシントンのソールウエー公使館付武官を勤めてをり、格別の裏切り行爲はなかつたやうだが、スンドロ大佐はドイツ軍の手先として有名だつた巨魁キスリング少佐の親友で、ノールウエーに對する第五列の急先鋒とし全世界にその名を轟かせた。

わたしはスンドロ大佐と知合ひになつてから七年になる。彼は上べだけ快濶を裝つた赫ら顔の小柄な男だ。政治問題に興味をもち、ナチズムの熱烈な信奉者だつた。

五月末から六月はじめにかけて、一時ドイツ軍がナルヴイクから撤退し、聯合軍が上陸して來たとき、わたし達はドイツ兵が本部に使つてゐたあるレストランを搜索したが、そのときキスリングの率ゆるフアッショ黨の一メンバーからスンドロ大佐にあてた五年前の手紙を發見した。

その手紙はナルヴイクを訪れる豫定になつてゐたあるドイツ新聞記者への歡迎を依賴したものだつたが、これから五年後スンドロ大佐はナルヴイクへ攻めて來たドイツ軍に對して同じやうな歡迎ぶりを示したのだつた。

彼はドイツ軍が上陸すると間もなく、ドイツ軍本部に近いナルヴイク北郊に住居を與へられてゐたが、ノールウエー軍降伏後は專らオスローにあり、ラヂオで頻りにドイツ側の宣傳を放送した。」

……………中　略……………

一落下傘部隊が應援に降下したり、スウエーデン方面から五百名ほどの增援部隊が到着したこともある。

なかにはノールウエー軍の制服を着て巧に扮裝してゐるものもあつた。スウエーデンから入つて來た部隊の中にカント博士と稱する人物がゐた。

彼はストツクホルムの醫者で、赤十字に所屬すると自稱してゐた。だが、わたしはそれから數週間後、ストツクホルムで彼の姿を再び見かけたのだが、そのとき彼はミユラーと稱してをり、ドイツの實業家といふ肩書を宣傳してゐた。本當はドイツ秘密警察の大立物だつたのだ。」

ノールウエーにおける第五列部隊の物凄い暗躍は、およそかくの如きものであつた。巧妙極まる獨軍の北歐作戰が、遠隔の地にあるわれわれの目には、はじめ英獨いづれが優勢なるか判別がつかなかつたほどであるが、それはイギリス側の擊沈宣傳戰――獨海軍全滅のイギリス躍起の宣傳のお蔭であつて、ノールウエーは果して獨軍の占據するところとなるか、見當がとれなかつたが、イギリス側の無責任な戰勝の放送は、世界の物笑ひの種となり、イギリスの宣傳は、極端に信用を失墜

して、今次大戰における英國宣傳戰の敗北を決定的なものにしてしまつたのである。

いまだ眞僞のほどもわからず、公式的な確認もされてゐないが、ドイツ軍がノールウェーの經濟攪亂のためにオスローの上空からノールウェー紙幣をバラ撒いたといふニュースは、イギリス側のデマ宣傳であらうか？……もしも、精巧なる僞造紙幣を經濟謀略のために使つたとしたならば、これこそ嶄新奇拔な人心攪亂政策といはざるを得ない。しかし、ここに注意しなければならぬのは、非常に精巧な僞造紙幣でなくば、功果がないことになるし、どちらが僞造かわからぬほど精緻な僞造紙幣の撒布に成功したとしたら、それを後日にいたり回收するに困難になり、占領後の治安維持——とくに經濟生活の安定にみづから苦しまねばならなくなるだらう。この點を考へると「僞造紙幣がバラ撒かれた」といふのは第五列（ドイツ）自身の發した反感苦肉の人心攪亂のデマ宣傳ではなかつたらうか、それとも少量な僞造紙幣——それも少しく注意してみれば、すぐ判別出來るものを故意に撒布して、人心ならびに經濟の動搖と攪亂をねらつたのでもあらうかと、私はこの僞造紙幣による攪亂政策に興味ある多くの疑問符を殘してゐるわけである。

なほ、落下傘部隊の活躍も、ポーランドに次いで、このノールウェー作戰中に行はれてをり、ド

ンバスを奇襲占領——二名の將校に率ゐられて六十一名が降下——し必死の奮戰をなしたが、ドイツ軍の公式的な發表によれば、ドイツ軍の落下傘部隊の活躍は、これが最初であるとされてゐる。また、この北歐作戰には、ナルヴイクにおける孤立無援のドイツ軍に決死の落下傘部隊の空輸がなされ大成功を收めたことは有名な話である。

第四節　ドイツの對オランダ・ベルギー謀略戰

ドイツ側では、佛軍事會議の極祕報告文書（第三十二號）なるものを入手したるところ、その文書には、

一、ベルギーの占領。　二、各河川への浮游水雷敷設。　三、フランス北東前線の局地攻勢の三點が强調されてあり、佛軍事會議に於て、すでにこれを採擇され、ガムラン將軍がベルギー占領に着手せんとし、ベルギー及びオランダを通過してドイツのルール地方に進擊する事は、白蘭兩國政府の諒解のもとに五月作戰として決定してゐた。また、イギリス情報省がベルギーおよびオランダに作り上げた組織は、白蘭兩國政府の最高地位にある官吏や參謀本部員の人をも含む廣汎な支

持を獲てゐるが、この組織の目的とするところは、あらゆる手段を講して、總統ならびにドイツ政府を轉覆し、これに代つてドイツ國家の統一を解體して、これに代る無力な聯邦制國家組織の採用に同意する一政府を設立することにあつた。この確證を得たのでヒットラー總統は、英佛の侵略に對し先手を打つて、これに反擊を加へたのだと、蘭白進擊——即ち、中立國侵略の理由を釋明宣傳した。

蘭白進擊の理由が、いづれにあるにせよ、前大戰にイギリスの巧妙なる宣傳によつて中立國侵犯の責任をおしつけられたドイツが、今次大戰には蘭白進擊の理由を根據づけるなにものかを十分用意してかゝり、しかも、英佛の宣傳の乘ずる一瞬の隙も與へぬ神速さを以て、この作戰に成功したのは、實に戰史における未曾有の奇襲的謀略戰術の大膽なる採用に歸さねばならない。

史上赫々たるこの勝利は、ヒットラーの天才的な着想になる、獨特の「奇襲」と「謀略」に基礎をおいた新戰術の軍事的成果の偉大さを證明して餘りあるであらう。

今次大戰において、一躍戰爭の花形となつた落下傘部隊と第五列部隊との緊密なる連絡を以てする後方攪亂戰術は、その最も優秀なるもので、ドイツ軍は、五月十日の午前二時、落下傘部隊が、

オランダ・ベルギーに着陸せる頃を見計つて、オランダやベルギー放送局と同一波長を以て、兩國國民に向つて「ドイツのデザント部隊が、わがオランダ（ベルギー）各地に降下したが、彼は蘭白軍と同様な服装をしてゐるから嚴重なる警戒を要す」との苦心の謀略放送を行つたといはれてゐるが、この謀略戰術は、先にも述べたる如く、ワルソー陥落に先立つて、ワルソー放送局と同一の波長で、ポーランド語を以て「ワルソー陥落」を放送し、後方攪亂の機略を用ひ成功したといふ試驗濟みのもので、落下傘部隊の主要なる任務が、戰車隊の進撃の要地——マース河およびワール河の鐵橋を守るとか、ロツテルダム飛行場を占據する——といふ直接の軍事的目的にあることは勿論であるが、それと同時に、奇襲による後方攪亂といふ効果を狙つてゐることは、落下傘部隊と共に、謀略班が加つて落下した事實より見て想像に難からぬところである。

落下傘部隊降下の新戰術は、オランダ・ベルギー兩軍に全くの混亂を與へ、夜明けと共にデザント隊に對する警戒は極端に强まり、その結果は、自國民の軍隊を見ても獨軍の變装した大部隊ではないかと疑ひを抱き、同士討さへ隨所に演じ、流言は亂れ飛び、ドイツ軍がいまだ近づかない先に、避難民は雲崩を打つて西に東に殺到し來る。軍用道路は避難民のために杜絶する。經濟生活は波綻

を來す等、拾收すべからざる混亂狀態となつてしまつた。

ドイツ軍のこの後方攪亂――謀略・宣傳・奇襲――が、いかに巧妙であり、また、いかに効果的であつたかを證明するために、英國陸軍參謀本部附のフランス公式連絡觀戰武官たるアンドレ・モーロア大尉の敗戰手記を、ここに紹介しておくとしよう。

「村に爆彈が落ちると、何處の村にもドイツ人やベルギー人の第五列がゐて「時間のあるうちに避難せよ。この村は間もなく全村破壞されるに違ひない。飛行機の後から來るのはゲシュタポである。ポーランドがどんな酷い目にあつたかを、われわれはよく知つてゐるはずではないか！」

住民は第五列と知らず、この言葉に耳を傾けて、村長、敎區牧師、町役人とともに村を立退くのであるが、それは驚くべき光景であつた、道路といふ道路は避難民で溢れてゐた。潰走といふことほど傳染し易いものはない。われわれの機械化部隊はあのやうな美事な編隊で第一日を出發したものだが、間もなく避難民のために跪がとれなくなつたのである。一八一九年にアミアンの前線が破れた時でも、このやうな潰走狀態は見られなかつた。なぜか？　それは綿密に繰り廣げられたに相違ない恐怖の言葉に、その土地に深い愛着をもつ人々までが、測り知れない危險から逃れようと欲

したからである。前大戰には何の情報も知らされず、自若としてゐた農夫達も、こんどはラヂオといふものが怖ろしいニユースを傳へる。その上、ドイツの飛行機は數において斷然われわれに優つてゐたから、この不幸なる人々は自分達に、なんの防備もないといふ印象を受けたからである。絕望的恐怖に囚はれた人々は、われ先きにと潰走した。……ドイツ軍の突破は直接的かつ完全であつた。どうしてこんなことになつたのか？　それは集團と恐怖との結果である。數千の火焰放射タンクとサイレン附の飛行機が、コラップ將軍の軍隊に襲ひかかつたのだ。豫期せぬ脅威に晒されて、勇敢なる彼らも陣地を守備する何の術も機會もなかつたのである。……セダンの慘劇の後、私の屬してゐた英軍參謀本部は、敵の鋭鋒を避けようとしてアラスへ向つた。アラスの町は流言飛語でわきかへり「ドイツ軍はすでにドウエに達した」「もうカムブレまで來た」といつた風で、つひには軍首腦部までその虛報を信じ、分遣隊に海岸線へ退却するやうに命令した。海岸線に達したその分遣隊は勿論、まんまと敵の捕虜となつたのである。第五列の流言飛語が機械化兵團の進む地ならしをしたのだ。

ドイツのパラシユート兵が相當の役割をしたことは確かであるが、彼等に對する恐怖といふもの

が彼等の効果を十倍にもした。農夫や兵士達の眼には、すべての服裝が變裝としか見えない。制服の將校でも、いつ贋物になるかも知れない。公式の電話さへ疑ひをもつて聞かれるやうになつた」

アンドレ・モーロアのこの手記によつて、ドイツ軍の謀謀戰が、實に驚くべき緻密な計畫のもとに、いかに有効適切にその作戰中に織り込まれてゐたかを窺ひ知るに十分である、と同時に、私がどうして落下傘部隊を單なる奇襲戰術とみず、後方攪亂の心理作用を狙つた謀略戰として取扱はんとしてゐるかがわかるであらう。

ドイツ的戰略の樞軸たるものは、急降下爆擊機、戰車部隊、砲兵隊等の破壞的威力によつて敵の抵抗力を痲痺せしめ、恐怖と戰慄を與へると同時に、落下傘部隊と第五列部隊並びにラヂオ宣傳等に依り、一般國民の神經戰線に對する直接的攻擊によつて、戰意を喪失せしめ、混亂と恐怖の眞只中に叩き込むといふ一種の一大謀略戰——戰鬪意識の解體戰術——であつた。

この點、ベルギー一捕虜の語つたといふ談話と、木暮浪夫氏纂述による「落下傘部隊と空中步兵」の一節に、なによりも雄辯にその事實が裏書されてゐる。

「從來の戰法をもつてしては、この強力なる要塞は容易に拔けるものではない。そこで考へ出さ

れたのが、落下傘部隊、急降下爆撃機、高射砲隊、突撃工兵隊、機械化歩兵部隊の協力作戰であつた。そして、エベン・エマールでは、この協力戰の先頭を切つたものが實に落下傘部隊であつたのだ。

五月十日の未だ完全に明け切らないベルギーの空から、總勢百名に滿たない兵隊が、手に手に自動小銃を握りしめて、雨のやうにエベン・エマールの堡壘の壕内に降つてきたのである。敵は、地上から現れるか、或は爆撃機をもつて攻擊して來るものとのみ思つてゐたベルギーの兵隊達は完全に不意をつかれてしまつたのである。

「自分達（ベルギー捕虜）はこの要塞の守備についてゐた者で、指揮官ボヴイ少佐以下七百名であつた。戰鬪開始するや不幸にも敵爆彈のために司令塔を破壞され、ボヴイ司令官もその時重傷を負ふて、近くの病院に入るを餘儀なくせられた。人望殊に篤かつた司令官を要塞から失つたことは先づ我々の第一のいたでゞあつた。それに恐ろしい唸を生じて急降下爆擊機のねらひ落す爆彈の臭ひ、地下約十米まで不氣味に傳つて來るすさまじい炸裂の震動、隣接の要塞のつぎ〳〵の陷落の知らせ、特にフロレン要塞司令官が萬事窮して自殺し果てたことなど聞傳へて、食料や彈藥こそまだ

〳〵餘裕もあつたが、我々もここでまご〳〵してゐては全滅してしまふのではないかといふ恐怖心又如何に文化設備がとゝのつてゐるとはいへ、この地下三十五米の明けても暮れても灰色の穴居生活は決して樂しいものではなく、これ等のあれやこれやが集つて要塞内の兵士等の心を動搖せしめかくあつ氣なく自分達を降伏に導いたのである。全くパニック狀態にあり、誰いふとなく降伏してしまつたのである」（海音寺三四郎「西部戰線從軍記」）

奇襲兵器ともいふべき落下傘部隊について、イギリスの軍事評論家リデル・ハアトはこの點について興味ある見解を述べてゐる。

彼に從へば「どんな奇襲兵器でも、戰爭では最初から大きな有利性を持つものである。その行動範圍の變化性のために、パラシュート攻撃法は輕視してはならない發展性を有つてゐる。その戰略上の間接的威力はその實際上の成果に比して、遙に大なるものであるかも知れない。

どんな軍隊でも、指揮官でも、殆んど皆、背後攻撃の脅威と連絡妨害とには極めて動搖し易い。敵には落下傘部隊があり、自己の後方における重要な橋梁乃至緊密な地點近くに、それが降下出來るといふ心配は、この脅威を增大するやうに感じられる。この危險性のために高級統帥部は、兵站線

上のすべての分遣隊及び駐屯地を增强するに至るであらう。その結果、敵の有する落下傘部隊よりも幾層倍も多い兵力を自軍の主力部隊から割くことになるであらう。その上心理的な負擔がある。故に、このやうな部隊が存在するといふ脅威だけでも、それが實際に與へる損害よりも遙に大きな成果を得る可能性があるのである。」

しかし、落下傘部隊のかゝる任務は、やはり單なる奇襲戰術に過ぎず、これを純粋謀略戰と呼ぶことはできないが、私は落下傘部隊の降下の前後には必ず第五列部隊（諜報網）との緊密なる連絡があるものと推察してゐる。

五月十二日ブルツセル發の（フランス新聞紙上に掲載された）特電には、政府が、ラヂオを通じて、次のやうなコンミニュケを出したことが報道されてゐる。

「保安局では、市内及び市外の電柱その他に貼布されたパツシヤ印コーヒー飲料の廣告ビラを即時ひき剝すやう指令を發したが、その理由は、該廣告ビラの裏面には、敵軍にとつて貴重な手引となる地圖が刷りこまれてあることを發見したからである」（小松清氏著「沈默の戰士」による）と、パラシユート部隊にさき立つてなされる諜報網（第五列）の活躍をみとめてゐるが、海音寺氏の西部戰

線從軍記は第五列のさらに猛烈なる活躍を、次のごとく報道されてゐる。

「當時ベルギー軍の中に、旣に獨逸軍に内通する者が、かなり居たさうだ。例へばベルギーのフランーメン人部隊（これは低部獨逸語を用ひるゲルマン族である）などの中に親獨的なベルギー軍がいざ砲擊開始の時など、砲口とそこへ運ばれた砲彈が全く一致しない別のものがあつたり、アルベルト運河の要塞など破壞しないで逃げ去つたり、獨逸軍の爆擊を誘導したり、又一般の街角に張り出された野菜ポスター廣告の裏を引きはがすと、市の詳細な地圖が書かれてあつて、落下傘部隊や先着部隊はすぐさまこれを利用して活躍したといふ事實もあるとのことだ。」

落下傘部隊の降下と、その奇襲戰術は、かくのごとく第五列部隊との協力を得ることに成功すれば、奇襲は、後方攪亂、破壞の謀略的戰鬪に變轉し、その軍事的成果は一層擴大されるであらう。

リデル・ハアトは、流石にこの點についても言及してゐる。

「眞の危機は、我々の氣付かぬところに潛んでゐる。それは個人的に或は團體的に降下される後方攪亂策動者といふものがあり得ることである。彼等は空爆によつて生じた損害を甚しく擴大し、大いに利用する。我々は、最近アイルランド共和軍別動隊の少數の厄介な連中が惹き起したこの種

の妨害について經驗がある。彼等の場合は比較的幼稚な裝備と組織であつたが、これが戰時で、警察が他の事件で多忙である場合、强大國の無限の軍事資材と戰時下の好都合條件下で實行されることの空輸による後方攪亂破壞戰術なるものゝ惹き起す困難さが、如何なるものであるかは窺ひ知ることが出來よう。熾烈な且つ廣範圍に及ぶ空襲によつて生ずる大混亂に乘じて、攪亂破壞團は、破壞と混亂を增加させ—爆彈が落ちてゐる間に事を爲せ—と許りに活動するであらう。電信、電話線は切斷されるであらう。道路と鐵道線路は爆破され、被空爆地域からの避難者の撤退ばかりではなく又軍隊と食糧の輸送も混亂狀態に陷るであらう。かくて生ずる交通機關の混亂は、廣範圍の機能停止へと擴大するであらう。」

イギリスの最大の軍事評論家リデル・ハアトの落下傘部隊についての觀察は美事に的中し、戰史上いまだかつてみざる赫々たる勝利によつて結ばれた。

オランダ、ベルギー、ルクセンブルグにおけるこの驚異的なる成果は、空陸一體となつた機械化部隊の協力作戰および疾風のごとき果敢なる機動戰によるところ多大であるが、それと同時に、あるひはそれ以上に、ヒツトラー總統の天才的着想になる謀略的攪亂政策の成功といふことが、オラ

ンダ、ベルギー戰爭における勝利の内面的理由なのである。

第五節　ドイツの對フランス謀略戰

今次大戰においてイギリスの諜報機關（シークレット・サービス）が、その得意の活躍をほしいまゝにしてゐたのは、獨軍進攻以前のオランダ、ベルギーにおいてゞあつた。

イギリス諜報機關の蘭白兩國内における活動は、あらゆる手段を講じて、ヒツトラー政權を打倒することにあり、十一月八日の夜ミユーヘンで起きた爆彈事件のごときは現ドイツ政府の轉覆を企圖するイギリス諜報網の陰謀とみるべきであるかも知れない。

しかし、今次大戰における英佛の諜報機關の猛烈陰險なる暗躍も用意周到なるドイツの第五列と諜報機關の猛烈なる活動に完全に封鎖され、あるひは買收されて、手も足も出ない格恰であつた。まことに、ドイツの第五列乃至スパイの情報と活動の神速さは、殆んど奇蹟といつてよいくらゐであつて、流石に諜報組織の怪傑スチーベルの光輝ある傳統を有するドイツの間諜戰の勝利であつた。

スチーベルの殘した尨大なる間諜組織は、ナチス的な訓練に養成されて世界無比の驚くべき威力を有する組織となつて、今次大戰に稀有な戰果を獲得したが、これも各個人の獨創的な天才と特殊技能の發揮に注意を拂ひ、たとへ發覺して捕へられても自らその責任を負ひ、國家に累を及びさぬといふドイツ魂のあらはれである。

ドイツの現在の間諜組織は、ゲスターポ（祕密警察）以外に、突擊隊、親衛隊、宣傳省管轄下にある第七部の外國部（所謂第五列部隊）を擁し、間諜工作においては恐らく完璧に近い陣容を備へてゐる。英國間諜のモットーが「迷はし、誤まらしめる」にあるとするならば、ドイツ間諜のそれは「暴力と奸計」即ち破壞と謀略にあるといふことができ、ドイツ間諜の活動は英國流のそれよりも遙に攻擊的で積極的であることが傳統的な特徴とされてゐる。

ドイツのフランスへの間諜工作は、まづオランダにおけるフランス特務機關の買收から始められた。この買收によつて、英佛特務機關がその本部に齎らしたところのドイツ側作戰計畫と稱せられたるものは、ヒットラー總統は、對英攻擊を行はない間は、對佛進擊を開始することとなし、一九四〇年中にはヒットラーは、西部戰線を攻擊せず、また、バルカン方面に全力集中しつゝあり、とい

ふ極めて出鱈目な報告であつたといはれてゐる。

ドイツのオランダにおけるフランス特務機關の買收とその活躍、ならびにドイツの巧妙なる宣傳が、フランス國内に、いかに反映したか、謀略はいかなる成果を獲得したか、朝日新聞特派員鈴木文史郎氏の「賴り過ぎた奇蹟」と題する「フランスの倒れるまで」の滯佛所感は、この間の消息を如實に物語つてゐる。

「何れにせよ、今年の四月から五月上旬に入つても、フランスには國民總動員といふ形に比例する自然的な戰爭意識に缺けてゐるやうに見えた。それは、昨年九月戰爭開始と同時に、ドイツの飛行機は大擧してパリを空襲して來ると思ひ、一時は周章もし決心もしたが、それもなく……反對に、ドイツは決してフランスを攻めないといふ念の入つた宣傳を、宣傳だ、宣傳だ、といひながらいつか信じ始めてゐた形である。これが一般普通人許りでなく、軍や政府の首腦者の心の隅にも巢食ひ出してゐなかつたとはいひきれまい。

だから、ドイツ軍がスカンヂナヴイヤへ進入したのを見ても、成程彼らが反復して叫んで來たやうに目指す敵はイギリス一國で、ノルウエーの南端からイギリス攻擊を始めるのだらうとも思つた

つまり、大段平を引つこ抜いた男が、自分の門口を通り過ぎて向ふの方へ素飛んで行つた――まあ良かつた、といふ一安心があつた。パリでは、オペラをはじめ劇場その他は平常通り續けられてゐた。」

また、當時のフランスの狀態を、次の如く述べてゐる特派員もある。

「英佛同盟さへあれば、獨伊の如き貧乏國の樞軸何かあらんといふ印象をフランス國民に與へてゐた政府の宣傳も「今度の戰爭は樂だ、長期持久戰になるのだから、やがてドイツは戰はずして、內側から崩れる」といひ、フランス人は今度の戰爭では立つ必要はない、マジノ線にへばりついて番をしてゐる。そのうちイギリスの再軍備もなり、やがてアメリカも味方に加はるだらうと信じ、萬事他力本願であつた、政府もいたつて呑氣なら國民も呑氣であつた。何事もイギリス委せ、ポーランド問題でイギリスがたつと、フランスもそれに倣つて宣傳した。ポーランド戰爭は瞬く間に濟んでしまつたが、その後は戰爭をしてゐるのかしてゐないのか判らない、妙な戰爭だとみんないつてゐた。兵隊はマジノの蔭に無聊に、銃後の國民も戰爭のあるのを忘れたかのやうであつた。

人民戰線時代の赤化思想は、牢乎として拔く能はず、これではならぬと政府は「ドイツはなかな

か參らぬ、樂な戰爭ではない」といひ直して、奮起させようとしたがおそかつた。戰爭反對の聲が方々で起り始めた。「われ〳〵はなんだつてこんな束縛された生活をつゞける必要があるのか、ドイツは攻めて來ないではないか、戰爭のないのに不自由するのは馬鹿々々しい」その答として「フランスはイギリスのダシに使はれてゐるのだ」といふ考へが一般に行はれ出した。敵愾心とか、戰鬪精神といふものは全然みられなかつた。そこを狙つてドイツは、英佛離間の宣傳を行ひ、それが確かに効果があつた。ドイツ飛行機は爆彈は投げずに「チヤーチルは最後のフランス兵一人にいたるまで戰はそうとしてゐる」といふやうな反英ビラをしきりに撒いた。

また、イギリス兵はいくらもフランスに送られなかつた。シヤンゼリゼーのカフエーで、イギリス兵が十二、三人かたまつてゐると、フランス人はかういつた「見ろイギリス派遣軍が全部集つてゐるよ」それにイギリス兵はフランス兵の手當の十倍も貰ひ、夜は遲くまで外出を許されてゐる。例の商賣女などは、イギリス兵に占領されてゐた。この恨みは相當深刻だつたと思はれる。そこへまたドイツのラヂオがフランス語で放送してくる。例の「ジークフリード線へ洗濯物を乾しに行く」といふイギリス兵の歌をもぢつて「ジークフリード線には、フランス兵を差向け、おれたちは

あとに殘つてフランス女と遊ばうよ」といふ唄が流行だし、ドイツの英佛離間策は完全に成功したノールウエー戰爭の如き「あれはイギリスの受持だから」と、フランス人は他人事のやうにいひ、フランス兵はマジノ線の內で、インターナショナルの歌を高唱する始末であつた。

以上は二人の日本人ジャーナリストによる觀察とその情報であるが、次に紹介するフランス人によつてなされたフランス敗北原因の探求とその結論とが、期せずし前述の日本ジャーナリストの觀察と大同小異であり、むしろその事實の殆んどすべてを裏書きし、是認しつゝあるのは、これら一聯の報道が、ドイツ側の謀略・宣傳に踊らされたフランスの敗戰の眞因を衝くものといひ得るであらう。

「戰爭にあたつてフランスは純然たる防衛戰術を取つた。このために人民の平和主義敗北主義の感情はいよ〳〵裏書される結果となつた。今度戰爭になつてから筆者が逢つた人々は商人、郵便配達、鐵道從業員、農民などすべてが同じやうな事を口にしてゐた。即ち、「今度の戰爭は決して本當の戰爭でなく、單なる外交上の駈引に過ぎない、だから幾百萬人を動員したり、全國を混亂に陷入れないでも解決はできた筈だつた」と云ふのだ。婦人連は、特にこの意見を强調した。若しも、

戰爭開始と同時に、佛軍がモーゼル河に沿ふて勇敢に攻擊的に出てゐたなら、一般の平和主義は無論消失させた事と思はれる。が佛軍は何等の行動も取らなかつた。

そこでフランス國內の步調は全く混亂して來たし、そして、一般に人民が無關心な態度を取りこんな無意義な戰爭をする位なら、一日も早く兵隊を歸してくれればよいと云ふ氣持になつた。軍隊の將校までも一同こんな氣分であつた。筆者が拘束されてゐたキャンプの一指揮官は、新聞を讀んでこんな事を云つてゐた。――「自分には、今度の戰爭の譯が判らない。フランスは攻擊しないし、ヒツトラーも亦攻めて來ない。これは戰爭ではない。いつそ自分等は家に歸つて何か有益な仕事でもする方がましだ。そして外交の方は外交家にやらしておけばそれでよいのだ。」

宣傳省即ち政府自身が西部戰爭に於ては、本當の戰爭はあるまいといふ風の考へをば國民に吹込んだのだつた。九月一杯を通じて新聞でもラヂオでも獨ソ協定の結果、ドイツは將に自己崩壞に瀕してゐるとか、部下將軍連の陰謀によつて、ヒツトラー失墜は不日に起るなどと報告した。

然も、この陰謀が實現せざるや、今度はヒツトラーの進略は、近東及び東南に限られる旨を報道した。

これらの報道に反して、いよ〱ヒットラーが西部に於て眞劍に戰爭を始むるや、今まで反戰感情に支配されてゐたフランス人は完全なる混亂に陷入つた。今年の四月、五月中、フランス政府は幾十萬の兵士を農村に歸して耕作に從事させたが、國民はこれを見て近き將來に戰爭がない證據だと思つた。また古い兵隊を復員させた。現に私のゐたキャンプの守衞兵は大抵やがて復員される連中ばかりであつたが、この時こそヒットラーが攻勢に出んとする時機だつた。

かくて、五月にドイツ軍のフランス攻擊が始まつた時に、彼等フランス兵は旣に精神的に敗北してゐたのだ。」（ハインツ・ポル「裏切つたのは誰だ」）

しかし、何故にフランスは精神的に敗北してゐたか？　ドイツのいかなる宣傳と謀略によつて、英佛は離間され、戰爭らしい戰爭はないと思ひ、反戰思想が瀰漫したのであるか？　また、フランス國民のいかなる感情がドイツ宣傳の乘ずるところとなつたのであるか？　以上の報道は、その間の事情を語り盡してゐないので、われわれはさらに進んで、ドイツ宣傳・謀略戰の實相を具體的に觸れてみなければならない。

英佛が、ドイツのいかなる宣傳によつて離間せしめられ、またフランス國民のいかなる感情がこ

れをうけ入れしめたか、といふ點に關して、「フランス敗れたり」の著者アンドレ・モーロアのいふところを聽かう。

「一九三九年九月の開戰當初から、ドイツの宣傳目標は、主として、英佛離間といふ點に向けられた。戰線膠着の八ケ月間、ドイツの宣傳戰は、驚くべき巧妙さと執拗さをもつてこの目的を追求したのである。

「フランスを戰爭に捲き込んだのはイギリスだ」

「英國自身は戰つてはゐない。それどころか、一度だつて鐵砲も撃つてやしない」

「英國は飛行機を供給し、フランスは大砲の餌食になる」

かうしたドイツの宣傳をフランス人は毎日聽かされたのである。この他に漫畫による宣傳が撒き散らされた。例へば、英兵が無理やり血の風呂に入れようとしてゐるところとか、或はイギリス將校がパリで半裸の女に戯れてゐるかと思ふと、佛兵はマヂノ・ラインで熱心に警備についてゐるといふ漫畫である。一九四〇年の六月には、ドイツのこの宣傳は英佛二國の離間に成功したばかりでなく、この同盟を相互に反目せしめるに至つたのである。何故かくも完全にこの宣傳は成功したで

あらうか？

理由の第一に考へられることは、ドイツの宣傳は、多くのフランス人にかつての偏見を甦らせ増大させたといふ事である。英國はドイツ以前に、遙かの昔、フランスにとつては傳統的の敵國であつた。この考へは佛國民の腦裡に强く燒きついて離れないのである。………中略…………

フランスの多くの地方で私は講演をして、英國の友情が如何に確實なものであるかを語つたのであるが、その折に必ず、私が感じたことは、人々があの百年戰爭（ナポレオン）の微かながらどうすることも出來ない根强い記憶をもつてゐるといふことであつた。

デルカッセが一九〇四年に英佛を和解せしめて親睦協商せしめたことは眞實である。一九一四年から一九一八年にかけて、英國がわれわれの味方として忠實に戰つたことも眞實である。北佛のあの墓地に英兵百萬の靈が眠つてゐることも眞實である。しかも前大戰の後、英佛二國の間には再び新たなる誤解が生じた。英國はフランスが餘りにも强大なることを怖れて、臆面もなくドイツの再軍備を援助したのである。」（同書邦譯一九一――一九四頁）

アンドレ・モーロアは、ドイツの巧妙なる宣傳は、フランス國民の百年戰爭における英國に對す

る不快な喚び起さしめた、といつてゐるが、ドイツの宣傳は、心憎きほどに微妙な心理解剖家であり、また、皮肉な歴史家であつた。即ち、ドイツはモーロアが「前大戰にはフランスの忠實なる味方として戰ひ、百萬の英靈は北佛の墓地に眠つてゐる」といつた「イギリスの忠實さ」を實に曝露し、紛碎する宣傳戰を行つたのである。

一九三九年十二月十三日午前四時パリに撒かれたドイツの宣傳パンフレットによつて、その最もよき實例をみることが出來る。

「沈默の戰士」の著者小松清氏によれば、このパンフレットは、掌にかくれるほどの小型の手帖といつたもので、細かい活字でくんだ十數頁からなるもの、色は桃色、紙は上等のアート・ペエパア、文章の合間合間に、寫眞やデッサンが入つており、書かれてある文句は、次のやうな意味の內容であつた。

「こんどの戰爭は英國の魂膽でもちあがつた。ヨーロッパに英帝國があるかぎり戰爭は絕えまいこの憎むべき仇敵英國をぶつ叩くためには、ドイツはあらゆる犧牲をはらつて戰ふ覺悟である。しかし吾々は貴下たちフランス人にはこれぽちの怨恨もない。吾々二大强國が互に理解しあひ、援け

合へばヨーロッパの平和は容易に實現する。しかるに、その獨佛提携を望まぬのが、英國なんだ。英國はヨーロッパに平和がくるのが嫌なんだ。したがつて英帝國はヨーロッパの敵、平和の敵だ、諸君はさう思はぬか！　吾々は御互に殺戮し合ふことの愚を止さうぢやないか。この前の大戰でドイツやフランスが失つた人間の數を英國側の戰死者と比べてみるがいゝ。まるで比較にならぬぢやないか。（その統計の圖表がちやんと載つてゐる）その愚劣さを吾々はもう一度繰り返さうとしてゐるのだ！」

なんと巧妙なフランス國民の心理と弱點を握つた宣傳であらうか！　ドイツはこの種の宣傳を、モーロアをして思はず驚歎の言葉を發せしめたほどに「驚くべき巧妙さと執拗さ」をもつて繰返してゐる。

ナチス黨の中央出版部から發行された數々の反英宣傳シリーズは、痛烈なる諷刺と批判によつて英佛の離間はもとより、英國を世界各國より離脫せしめ、しかもドイツ國民の抗戰的士氣を養ふに足るものとして書かれてをり、武器によらずして、ペンによる英國への挑戰がなされてをる。

ドクター・フランツ・グローセ著「イギリス人は最後のフランス人に至るまで戰はす」邦譯「ヨ

ーロッパの悲劇」

ワルター・トラウトマン博士著神戸政彌氏譯「世界經濟と英國の顚落」等のごときを讀まれるならば、世界の知識階級を英國より離間せしめることによつて、わが陣營に引き入れるために、いかに細心な注意と努力とを拂つてゐるかを十分理解することが出來る。

かうした排英パンフレットによつて理論的に堂々たる論陣を張るほかに、ドイツの宣傳は、すぐれた心理分析家なることを證明する、巧緻を極めた宣傳を行ひ、また美事な成功を收めてゐる。

フランダースの敗戰の結果、逃亡するイギリス、降伏するベルギーに依つて、戰爭の全壓力をフランスが獨力で背負つて立つてゐる苦惱の時を利用して、ドイツの放つた英佛離間のラヂオ宣傳は、

「イギリス軍はたつたひとつの軍事行動しか知らないんだ。——撤退といふことしか知らないのだ。諸君！　フランス人は、間もなく、イギリスの新聞に勝ち誇つたコムミュニケが掲載されるのを見るだらう。曰く。大英帝國海軍は、英軍の最後の一兵までも、秩序整然、一滴の血も流すこと無く、大成功裡に撤退を完了せしめたり——」

このラヂオ宣傳は、四圍の狀勢からみて極めて適切なる攪亂作用を及ぼすことに成功した。フランダース敗戰に自信を失つた英國の將軍連は、海岸線を背後にしようとあせり出した。佛軍司令部はこの英軍の行動に不安を感じ、その結果がどうなるかといふことを怖れた。この時、信賴に滿ちてゐた英佛の相互合作の期間が終りを告げるとともに、ドイツが豫言的に放送せしごときコムミユニケを發表してイギリスは世界に物笑ひの種をまいたのであつた。ドイツは相手國の心理を理解せずして失敗した前大戰の不名譽をこんどは大いに挽回したことを示してゐる。

フランス政府の國內宣傳政策の失敗による國論の不統一は、フランス共產黨の敗北主義宣傳に溫床を提供した。國內においても、戰線においても共產黨の宣傳や策動は、相當根強く行はれた。共產黨の行つた宣傳の大要は、

「英國の資本主義のために戰場に屍をさらすことの愚は、もうこの前の大戰でこりこりしてゐる筈だ。こんどの戰爭だつて、早く敗けた者が、結局の勝利者となる。何故なら、勞働階級の立場から考へると戰爭後ヨーロツパにいざ革命が起つたとき、一人でも多く戰士を殘してゐることになるからだ。」(小松淸氏著「沈默の戰士」二二三頁)

といつた調子のパンフレツトや秘密に印刷された「リユマニテ」が洪水のやうに都會の工場に氾濫したが、それはとくに動員された壯丁をめざして旺んにバラ撒かれ、その上、フランス共產黨の宣傳ラヂオ放送は、每夜十時頃から三十分間、每晚行はれ、その放送局は南ドイツにあるといはれまた他の一說にはベルギーにあるとも專ら風評されてゐたが、そのニユースはフランスにとつて常に不利なものが多く、その戰術はフランス銃後にたいする敗北主義の增大をはかるものであつた。かゝる敗戰思想の瀰漫するフランス國內は第五列部隊には、實に絕好の活躍の舞臺である。ドイツはすでに潛入せしめておいた第五列との緊密なる連絡のもとに、相當數のスパイを落下傘によつて降下せしめて、その活動に拍車をかけさせた。その上、フランス國內のナチス第五部隊內應者も驚くほど多數にのぼつてゐた。

フランスの敗北をまざ〳〵目擊したハインツ・ポルは、ジヤーナリスト特有の敏感さを以つてフランス內の第五列の驚くべき活躍の眞相を、次のごとく曝露してゐる。

「ラヴアルやボンネの如き政治家は獨逸贔屓であつた。そして、現役軍人の錚々たる連中が相當味方に引き込まれたと云はれてゐる。その話を知るには一九三七年及び三八年に起つたカグーラー

ル運動のことに一言せねばならぬ。

この運動は強力に訴へてフランスに獨裁政治を布き、そして全體主義諸國と提携しようといふ秘密運動であつたが、その噂が餘り高かつたので、警察でもまんざら棄て置く譯に往かず、といふのは警視總監のベルトアン其人が運動の味方だつたから申譯ばかりに手を入れた。

が、本當の張本人には手を觸れなかつたし、また有力な賛成者を不問に附した。この運動本部には獨逸製の鐵砲や機關銃が發見されたと云はれるが、一人として裁判に附せられず、半數は開戰當時に他の半數もその後暫くたつて、いづれも釋放された。その中には現役や豫備の將校が多勢ゐたさうだ。戰爭になつてからも、此のカグーラール運動は相變らず行はれてゐた。例へば、フランス最大の自動車タイヤの製造會社ミシユラン工場の最大なるものは、カグーラール運動の中心たるクレルモン・フエランにあつた。そしてミシユラン工場の持主たるミシユラン將軍は運動の軍事教官であり、同時に本部を有する第五軍管區の司令官であつた。この地方は多くの工場もあり、また鐵道の中心として重要な地域だ。

ところで去年九月モーゼル河に沿ふたフランスの攻擊作戰が中止を餘儀なくされたことがあるが

それは必要な重砲が到着しなかつた爲であつて、この事實はル・タン紙によつて報道されて讀者を驚かした。

然も、オルレアン、ブールジュ及びヴイールゾン等の鐵道驛には重砲を積込んだ數十臺の貨車がどういふのか十月中頃まで其儘置いてあつた。筆者はヴイールゾンの鐵道驛員から聞いたが、何故か貨車運轉の命令が來なかつたといふことである。また同じくミシユラン將軍の管理區域には奇蹟と云はれるほどの戰車工場が三箇所あつた。その七十噸戰車は速力も早く操縱も容易で、獨逸軍が要塞突破に使つた八十噸戰車よりも强力であつた。

然るに此の大戰車は遂に戰線に姿を見せずに、第五軍管區内の貨車驛に其儘殘されてゐた。現に筆者はヴイルゾン驛には實地にその戰車を見た。六月初旬、ドイツ軍がオルデアン地方を占領するや、彼等は右の戰車を見出して之を佛兵攻擊に用ひた。かうしたサボタージユの事實は、その他にも種々ある。例へば、モンクジス附近の飛行機發着場は、四月一日までに完成する原案であつたにも拘らず、地ならし作業をはじめて二週間すると中止になつてしまつた。」

パリー陷落の後、アメリカへ亡命して「余は糺彈す」なる一書を著し、アメリカの朝野に異常

なセンセーションを捲き起したフランスの新聞記者アンドレ・シモーヌは、同書において、フランスの名士を痛烈に糾弾して、次のごとく書いてゐる。

「ツールに着いてみると、政府の内部にも外部にも、第五列の活動が猛烈に行はれてゐた。私は市廳舍の前で、閣僚の一人に會つた。彼が私に話してくれたところによると、陸軍最高司令官たるマキシム・ウエイガン將軍は、潮の如く押寄せるナチの軍隊を喰ひ止めることはとても覺束ないと言つてゐるさうである。そして、ウエイガンが休戰を申し込んだことを、副總理の老ヘンリ・ペタンとカミール・ショータンの二人が支持してゐるといふ…………。

彼の話によれば、閣議の最中、ウエイガン將軍は突然立ち上つて閣議室を出て行つた。そして、數分の後あわたゞしく部屋に引きかへして來るや、おそろしく昂奮して、次のやうなことを大聲で叫んだ。

「共產黨が巴里を乘つ取つた！　市內の到るところで暴動が起つてゐる。モーリス・ソーレス（フランス共生黨の指導者）が大統領公館（エリチー）に侵入した！」

そして彼は、事態斯くなる上は、直ちにヒットラーに休戰を申し込まねばならぬと提議した。

「われわれはこの國を共産黨に渡すことは出來ない。われわれはフランス國の誇りを守らねばならない。」

ウエイガンのこの宣言は閣議に參加してゐた人々の心に、非常に深い感銘を與へた。

その時、ジョルジュ・マルタン內相は直ちに電話で、巴里の知事を呼び出して、眞相を照會したところが、巴里は平隱で、暴動の事實もない。街頭の亂鬪もない。赤の政治も行はれてゐないといふ返事である。祖國フランスを賣らんとしたウエイガンの奸策はまんまと失敗したのである。

「併し」と、その閣僚は悲しげな調子で私に言つた。

「いつまでこの狀態が續くことか？」

全く、いつまで續くことであらう――。政治家達の集まつてゐるホテルやカフェに行つてみると無數のデマが亂れ飛んでゐた。私は大通りのカフェを幾つか廻つた。そして約一時間ばかりの間にかういふことを聞いた。

「ドイツ軍は、今夜にもツールにやつて來る。英國はフランスに內緖で、ドイツに休戰を申込んでしまつた。英國首相ウインストン・チヤーチルは自殺した。巴里にはいま大火災が起つてゐる。

共産黨は數時間の中には大暴動を起す筈だ。いやもう暴動は始まつたさうだ。そして、最後に、ヒットラーはペタンに對してとても寛大な休戰條件を提示したさうだ。」等々。

…………中　略…………

そこで戰爭が始まつた時は、彼等の目に見える反逆によつて、佛蘭西内部は分裂し士氣も沮喪されてしまつてゐた。指導者達に對する信用は全然なかつた。ヒットラーは英國やフランスの政府或は同盟最高會議が何を目論み何をしようと決めてゐるかを、一切手に取るやうに知悉してゐた。何故なら、彼ヒットラーの手先となつた男たちがフランス國官廳の最高の地位を占めてゐたからだ。最高會議が前線に、英國部隊を進出させようと決議すれば、二時間後にはすでにヒトラーに筒拔けだつたのである。

大英帝國のジョージ六世陛下が戰線を訪問した時でも、さうだつた。英佛の新聞に現はれるよりも一歩先に、ドイツのラヂオによつて陛下の行動は逐一放送されるといつた有様であつた。」

私は電話の照介ひとつで判るやうな「奸策」や「反逆」をウエイガン將軍ともあらうものがしようなどとは信じられない。敗北者は、とかく敗戰の原因を誇大に吹張したがるものであり、また、

骨の髓まで自由主義に毒されたフランスのジャーナリストのヒステリカルなこの叫びを、そのまゝ鵜呑みにすることは出來ないが、フランス國內戰線の不統一を巧みに利用したドイツの宣傳と、第五列の活躍によつて、フランスが四分五裂の狀態にあつた事實は、最早一點の疑ふ餘地すらないであらう。

第三章　ナチスの宣傳政策とその教訓

第一節　ナチスの諜報組織と宣傳組織

前大戰におけるドイツ軍の敗北を促進せしめたる主要なる原因の一つは、宣傳戰の失敗にありといはれてゐるが、一九一四年イギリスの宣傳が課せられた最も重要なる任務は、アメリカを聯合國側につかせるといふことであつた。

この宣傳戰の敗北も、武力の援護によつて、ドイツ軍にとり最初に決定的な打擊が與へられたのである。

それといふのも一九一四年、英國が宣戰布告をやつた翌日、即ち九月五日ドイツの海底電線は、强力なる英國海軍の手によつて切斷されてしまつた。

イギリス海軍のために切斷された海底電線のうちには、大西洋を越えてアメリカに達してゐた二

本の重要な線を含むもので、そのうち一本はイギリスのベシサンスへ引揚げ、他の一本はフランスのブレストへ引揚げられて、遂に聯合國側の宣傳戰に利用されたのである。

いふまでもなく海底電線は深海にあるもので容易に探し出せるものではないが、宣戰布告と同時に之を全部切斷するためには、イギリスは相當以前からこれに對する準備が必要とされるが、宣傳戰の重要さを認識し、かつ武力のみをもつてしては勝味の少いことを知つてゐたイギリスは、ドイツの宣傳を無力化すべく海底電線に早くから眼をつけてゐたのである。

一九一四年の末に至つて漸く許可になつたドイツの無線電信は、この海底電線に代る重大なる使命を荷なつて登場したものであるが、種々な制限が附せられてゐたので、海底電線切斷の缺陷を補ふほどに役立つことが出來なかつた。

しかも、中立國を通つてゐたその他の電線は、いづれもロンドン中繼であつたために、すべての通信電報は檢閲され、勝手に留置されたり、削除や追加によつて改竄されてイギリスに惡用されてしまつた。

海底電線の失敗は、ドイツにます〳〵無線電信を發達せしめる大なる原因をなさしめると同時に

ドイツ有線連絡を斷念せしめることが、却つてイギリスの宣傳戰の敗北の一大原因をつくらせたといふ因果應報の皮肉な事實を見せつけてゐる。

今次大戰に、ドイツのもつ新聞通信の武器は、D・N・B通信社一箇であつた。かりに伊のステフアニ、ソ聯のタスの聲援を得ても通信組織は到底イギリスに匹敵すべくもなかつた。

しかも、世界宣傳戰に於て壓倒的勝利を博したのは、大放送設備を完備して、通信機關の缺陷を補ひ、又その頭腦的運用によつてラヂオによる謀略・宣傳戰術を採用したがためである。

ドイツは一九三四年に六百十萬、一九三五年には六百七十萬の聽取者を國內に持つてゐたが、國內宣傳强化と人心統一の目的を以て、對波戰前にラヂオの普及を更に强化したので、現在は八百萬を遂に突破してゐると傳へられてゐる。

ドイツは一九三五年のオリンピック放送施設にこと寄せて、一基百萬マークもする無電塔を一擧に十一本も建てた。だが、それはオリンピックのためではなく、決して切斷されることない通信宣傳機關として、今次大戰への準備であつた。

果せるかな、この十一本の强力なる放送設備は、國內通信設備の擴充と、その後占領せる無數の

放送施設と相俟つて、イギリスを凌ぐ世界放送を開始し、その宣傳の威力は今や地球上の空間を壓する觀を呈してゐるのであるが、一九三九年八月末には、ドイツの放送は、いまだ決して樂觀を許さゞる狀態にあり、英佛の反獨放送の渦中にあつたのである。

即ち、大戰勃發當時は、ドイツの放送は、西部においては英佛の反獨放送、東部においてはポーランドの反獨放送を受けるといふラヂオによる宣傳攻擊に當面してゐたばかりでなく、ベルギー、オランダ、ルクセンブルク等の近隣中立國の放送局が、殆んど英佛側の支配と影響下にあつて、英佛兩國の廣告放送による經濟的支援によつて、この經營が維持されてゐたため英佛反獨放送の前哨放送局たるの役割を演じてゐたのであつた。

しかし、ドイツのポーランド進駐によつて、ポーランド放送局は空爆し、次いで、デンマーク・ラカルンドボルク放送局が占領され、またノールウエー放送局もドイツ軍の手中に入り、さらに續いてベルギー、オランダの兩放送局を壞滅に瀕し、フランスの反獨放送の沈默するに及んで、こゝにドイツの對外ラヂオ放送は、漸くヨーロッパの天地に全く一人舞臺の活躍を始めるに至つたのである。

ドイツの强力なる宣傳放送も、反獨放送を全然沈默せしめることは不可能であつたが、この場合反獨放送を沈默せしめるための鬪爭は、武力の力を借りるに及んで、その戰果を獲得することが出來ると見られるのである。この一事をみても武力戰の攻擊における決定的な威力は、總力戰の時代においては一層無視することは出來ないのである。

議論が多少わき道にそれたが、イギリスの强力な宣傳機關に對抗するために、今一つ準備されたものは、かの有名な第五部隊の編成であつた。これは陰險極まりないイギリスのシークレット・サービズ（秘密諜報機關）に對してなされたものであつて、ナチスの親衞隊保安部（エス・エス）と秘密警察（ゲスターポ）とが所謂「第五列」を海外に配置し、あるひは潛入せしめるなど、これを縱横に使驅し應戰したのであつた。

ドイツ側にいはせれば「今次の戰爭では、イギリス諜報機關の凶刄を恐れるよりも、寧ろドイツの戰鬪精神をぶつ壞さうとする老獪な試みを警戒しなければならぬ。シークレット・サービスに對する鬪爭は、特にわが國內戰線の重要な任務の一つである。」と、いつてをり、確かにドイツでは國內統一戰線の破壞に對するイギリスのシークレット・サービスへの鬪爭のために、あらゆる警戒

と準備がなされてゐた。

ドイツ國内統一における第一の基本的な問題の解決として、ヒットラー竝びにナチスのなしたる最初の仕事は、一國家・一民族・一總統の國家組織――民族社會主義的世界觀――の完成であつた勿論、この偉大なる仕事は、世界無比のあの尨大なる啓蒙宣傳省の創設によつて、始めてよくなし得たのである。

ナチス的觀點によれば、民族社會主義的政黨（即ち、ナチス）は、政治的・世界觀的指導の機能を有するもので、政黨は國家の重要な教育機關である。だから、ナチスは一九三三年のヒットラー政權獲得以來、ナチス黨員の世界觀的、政治的訓練が義務的に課せられてゐる。

この民族社會主義的革新運動（ナチス）が、遂に最後の勝利を得たといふのも、この運動に參加した人達（ナチス黨員）が、最初から同一の形式、同一の訓練、又同一方向といふことへ導かれたからである。形式と訓練における改革のみが、運動の合理的な無血の勝利を可能にするのである。

政黨が、國家のため、民族のため、種族のため、文化のための改革を中核とする時に、始めて國家の將來が約束される。

民族社會主義的國家を擔ふ民族社會的指導層は、新體制による訓練方法で養成される。
これがナチスの精神であり、民族的教育機關の意義である。
そしてこの民族的・政治的教育機關は、突撃隊、親衛隊、勞働奉仕、ヒツトラー・ユーゲント・ドイツ女子青年聯盟、勞働戰線、政黨訓練等であり、かゝる政治運動の機關が、同時に教育の機關であり、新體制による訓練方法を示すものである。
なほ、ナチスのこの教育の原理の中には、かの「指導者の原理と組織」が一貫されてゐる。ナチスの國家觀に從へば、國家は民族の個々の意志を集めた意味の「全體的」國家でなくして、自由なる民族の隨順の國家であり、ゲルマン的指導者の國家である第三國家では、民主主義的要素と貴族主義的要素とが、新しい統一の形で結合され、その民族的・政治的共同體の中で、生活の流れが、下から上へ、上から下へと循環してゐる。第三國の中では、治者と被治者、指導者と隨順者とが同心一體となつてゐる。
隨順者なき指導者もなければ、指導者のない隨順者もない。すべて、民族の中から生じたあらゆる生活は、その意味の統一と充實とを指導者の創造的業蹟の中に見出す、そこには政治的業蹟と教

育的業蹟とは必然的に不可分に結合するのである。

ナチスの國家は、教育國家であり、政治そのものが既に教育である。學校は、それに附隨する性格・職能・學問的な教育を分擔するに過ぎず、この學校以外における公的教育手段として、ラヂオと共に、新聞を重要視してをり、新聞は、凡ゆる他の公共機關、特にラヂオと共に、民族協同社會の形成と確立、指導者による世界觀的統一と政治的意志形成とに奉仕するものとされてゐる。

讀者諸賢にとつて、かなり煩雜と思はれるかも知れないナチスの教育觀とその組織に一瞥を與へて頂くことを、私が要請したのは、國內統一戰線の形成にあたつて、ナチスの教育行政とその組織こそ、國內統一の最も根本的な、また最も强固な紐帶となつてゐると考へるからである。

ヒツトラーは、政權獲得の一九三三年の三月十三日早くもドイツ國啓蒙宣傳省を設立し、廣汎なる分野に亙る猛烈なる宣傳戰をくりひろげたのであるが、ナチス啓蒙宣傳の成功は、單に宣傳政策とその組織のよろしきを得てゐたためではなく、むしろ各國民個々人の受ける多種多樣な教育的精神的影響を統一したことにあると私は觀ずるのである。

國家は生活協同社會であり、この生活協同社會の成員として入り込むことが、また、入り込ませることが教育と啓蒙宣傳の前提條件である。そして多樣な教育的影響の統一は、あらゆる教育的生活秩序、部分的協同社會——國家、家庭、學校、公共團體、ラヂオ、新聞その他——そのものが統一的な國民全體の肢體として、その中に組み合せられ、その生活法則（ナチス世界觀）に從ふことによつて確保されるのである。

われわれはドイツの國內統一戰線の强靭なる形成を、啓蒙宣傳の分野からのみこれを觀んと欲し、また、啓蒙宣傳の成果のみにこれを歸せんとする傾向があるが、ドイツ國民の團結と統一は、實にそれぞれ特殊な課題を、すべて民族的全體性の法則の下に、統一的に果さしめたところにあるのである。

かくの如き努力と粒々たる辛苦によつてつくられた國內統一が破壞され、戰爭遂行の最高最大の主體たる國家組織が、前大戰における如く崩壞する樣なことがあつてはならず、英國シークレット・サービスの國內戰線破壞工作に對して、齒には齒、眼には眼の對抗手段を案出したのは、むし

ろ當然の處置であつた。

英國軍事諜報機關は、大體次の三大部門に分けられてゐる。

一、平時における軍事諜報機關

二、戰時における軍事諜報機關

三、シークレツト・サービス（秘密諜報機關）

そして平時の諜報機關には、次の三つの使命が課せられてゐる。

一、他國の軍備に關するあらゆる情報を、イギリス本國に通報すること。

二、一旦戰爭となつた際はその戰亂の續く限り、敵國及びその同盟國竝びに戰場に關する凡ゆる必要な情報が、シークレツト・サービスの本部なるロンドンのドーニンク街に齎らされるやう豫めその方法を案出すること。

三、イギリスに關する適當な情報が、敵の手に握られるのを妨げること。

戰爭が勃發すれば、諜報機關の活動分野が、非常に擴張せられるのは、蓋し當然である。この場合は個々の仕事が臨機應變、濶達自在にして而も的確迅速であることが最も要求される。

地上偵察、空中偵察等を通じて行ふ諜報機關の純軍事的な偵察活動は、逐一外務省内のシークレット・サービスに報告され移牒されるのである。

外務省的のシークレット・サービスの任務は、敵國銃後乃至敵國内のあらゆる事象に關する情報を提供するものであるが、これには豫備軍兵力及び動勢、後方防衛連絡路に關するものも含まれ、更にまた敵國内の内政狀態、勞働力と物資の現狀に關する情報を提供する。

その他シークレット・サービスの攻勢的な部門（積極的に情報蒐集、策謀等）の義務は、平時も戰時も同じであるが、たゞ戰時には、その活動の意義が高められると同時に、危險が殖え困難が增すのである。

イギリスのこの「シークレット・サービス」を前大戰の教訓によつて最も眞劍に最も熱心に研究し、これの對應策を講じたのはドイツであつた。

しかも、シークレット・サービスの第一の目標たる敵の連絡を遮斷し、これを監視し、あるひはこれを探り出す仕事、竝びに、中立を嚴守させる宣傳と策謀、味方に引き入れんとする宣傳と策謀

ドイツに對する反感を起させる宣傳と策謀等が、ドイツ國內戰線の破壞工作と相俟つて猛烈に行はれ始めた。

このシークレット・サービスの最も大なる錯誤は、主として亡命者（ユダヤ人）達から聞いた話によつて、ドイツには强力な反政府勢力があるものと考へたことである。シークレット・サービスは長年の傳統と經驗により、ナチス政府を顚覆せしめるべく「ドイツ反政府派との關係强化、出來る限りドイツ國內の全反對派から全權を委任された大物と交渉すること、交渉の目標は、ドイツにおける政治的擾亂、ヒットラー總統とその幕僚の追出し、イギリスに有利な平和の締結、チェッコ・スロヴキヤ、オーストリー、ダンチッヒ、ポーランド等の舊狀復歸等の指命を、オランダ駐在のステヴンス少佐やベスト大尉に發したのである。

ドイツの親衞隊保安部と秘密警察は、その情報網によつて、これらの計畫を事前に知ることが出來たので、直ちに活動を開始したが、イギリスの操る顚覆計畫は故意にそのまゝ放任し、イギリスの諜報機關付將校を逮捕すると共に、證據書類を握るに至つたのである。

この顚覆計畫はミュンヘンにおけるヒットラー暗殺の爆彈事件となつて現はれてゐる。

シークレット・サービスによるイギリスの魔手はノールウエーやスウエーデンを始め、バルカン諸國、オランダ、ベルギー、その他ドイツ、イタリー、日本に何等かの利害關係を有するあらゆる國々に伸ばされたのである。

例へば、ルーマニアにおいては、ダニューブ河のドイツへ至る交通を各所で不可能にしてしまひバルカン諸國とドイツとの間の通商を破壞するといふ大規模な陰謀が計畫された。ルーマニアの港キウルギューで數千箱のダイナマイト、機雷、爆雷、艦砲、手榴彈、機關銃、ピストルを積み込んだ船と、英國の特科兵、將校、爆破隊、工兵等を乘せた十七隻の船が一九四〇年四月、ダニューブ河を遡航せんとして發覺されたのである。

一九四一年の四月二十日ユーゴー軍が降伏して、ドイツ軍が南セルビアのウエスクエブに到着して英國領事館を檢索したところ、意外な一大發見をした。といふのは、奥まつた秘密室のドアーを開けると何んとアメリカ製機關拳銃、ダイナマイト、その他武器彈藥が山の如く積上げられ、しかもダイナマイトの箱の蓋には〃英皇帝御用〃の在外公館特有の文字が記されてあつた。更に次の部屋にはアヂビラが充滿してゐた。右についてドイツD・N・B・通信は報道して曰く、『ダイナマ

イト及び機關拳銃とアヂビラ。これが大英帝國の外交使臣と領事館とが常備して置く設備品である。實にイギリスの犬使や領事の仕事は、英國の意に反する駐劄國大官要人の暗殺と陰謀計畫にある。』と。

この種の數限りなきイギリス・シークレット・サービスの陰謀と謀略宣傳に應戰するために、ナチスの親衞保安部と秘密警察と第五部隊の一絲亂れぬ統制ある組織を以てなしたことは、既に述べた通りであるが、イギリスのシークレット・サービスのごとき慘忍なる組織に對抗するためにも、又、戰爭の體制が總力戰として廣汎なる鬪爭の分野を要求する以上、軍事、外交、經濟等に關する諜報機關と共に、精神戰、宣傳戰、文化戰、學術戰、敎化戰に對應する諜報機關を絕對に必要とするのである。孫子の敎へるごとく、敵を全體的に知ることなくして勝利への方法は發見されない。總力戰は必然に、あらゆる部門に亙る諜報戰が先行するであらう。

第二節　ナチスの國內宣傳政策の重點

ナチス・ドイツの宣傳政策が、擧げて國家啓蒙宣傳省の主宰するところであることは、すでに讀者諸君の諒承せられるところであらう。私は前章までに、又他の處においてもその一端を說述してゐるのであるが、この宣傳組織の詳細に亘る內容と活動については外務省調査部飯島英太郎氏の著書「獨逸の宣傳組織と其の實際」（日本國際協會發行）について學ばれるをより便宜とされるであらう。

私はわが國にすでに紹介されたる啓蒙宣傳省組織の具體的なる說明は、これら先輩の著書に讓りナチス・ドイツの國內宣傳政策の重點についてなるべく總力戰的觀點から、とくにその戰略上の意義について、少しく觸れてみたいと思ふのである。

イギリス軍參謀の一人であるフラー將軍は「伊・エ戰爭の分析と將來戰」と題する一書において全體主義戰爭の將來觀を語り、次のごとく驚くべき豫言と批判を下してゐる。

「獨佛間に突如戰爭が起つた場合、もしドイツが最初に攻擊を加へるとすれば、社會主義フランスに於てどんなことが起るだらうか？　フランスの攻擊力がどんなものであらうとも、同國が完全に恐怖に襲はれることは、殆んど疑問の餘地はないし、その恐慌は、同國の政治を、從つて必然的

にフランスの反撃力を完全に攪亂するであらう。然し、この豫想を逆にして、即ち、もしドイツが最初に攻撃されるとすれば、同國民はラヂオ宣傳によつて、一貫して軍隊的に統一された、國家的規律の下に置かれてゐるために、十中八九までは、恐慌は避けられ、同國政府が行動に移り得る時間的餘裕が與へられるであらう。」

「現在の戰爭條件においては、國內の一般住民も攻撃から直接保護されることは出來ない。それ故、もし、一般住民の神經が攻撃によつて動搖せしめられるならば、彼等の意志は痲痺せしめられその結果彼等の戰鬪力が崩壞するであらう。それ故に、純軍事的見地からすれば、一般住民に對して攻撃を加へることは、論理的であり、時間が死活的要素である場合には、たしかにそれは論理的である。だから、戰爭は、クーデターの形をとらねばならない。動員ではなく、陰謀の形を、政治的雷鳴を前觸れとする空言ではなく、靑天霹靂といふ形をとらねばならぬのである。

現代の戰爭は、科學を基礎としてゐるのであるから、たゞに戰鬪部隊が、益々科學的にならなければならないのみならず、老若男女の一人一人が、敵にたいして戰鬪を挑む、一大キヤタパルトに形成され得るやうに、全國民にたいして、科學的方法が適用されねばならない。

かゝる戰鬪においては、奇襲が不可缺のものであることが、直ちに了解されるであらう。だが、最も强力な奇襲形態は、時間の上の急襲又は打擊を與へるスピードではなくして、兵器又は戰術の新奇さによる奇襲であるといふことは、まだ認められるに至つてゐない」云々……。

民主主義國の敗北を決定的に豫言したフラー將軍の近代總力戰における理解は全く正しいが、ヒツトラーは、このイギリスの參謀以上に、前大戰の生々しい體驗から近代戰の形態を熟知しており、國內の施設と政策は、その總力戰的戰略から割り出して萬全なる方策を準備してゐた。

即ち、前線銃後の區別なく攻擊にさらされることも、全國民を軍隊的な統一ある規律の下に置くことも、國民の一人一人を一大キヤタパルトの樣に團結せしめることも、又敵に對してはクー・デター式の電擊戰（ブリツ・クーグ）と兵器と戰術における嶄新なる奇襲とを用意したのである。

フラー將軍のいふ如く、總力戰に於ける顯著な一つの性格は、相手國の全國土を貫いて戰場と化することであり、しかもこの戰場の意味は、唯單に武力による全國土の襲擊を蒙るばかりでなく、あらゆる他の手段による攻擊と防禦が行はるべきことを必然ならしめてゐる。從つて總力戰下にあつては、第二義的に考へられる銃後と呼ばるべきものはない。全國民が戰鬪員であると同樣に全國

土が戰場である。しかもいかなる戰爭であれ、それは例外なく全國民・全民族の精神的團結力が勝敗を左右する最も有力なる要素であり、從つて、戰鬪意志を挫折せしめたり、內亂の誘導によつて前大戰のごとくに、戰線の背後で國家の瓦解することを警戒すべきであり、ルーデンドルフ將軍も苦しんだところの統帥と政略との統一を確立すべきであつた。

この最後の、しかも最も重大なる問題は、一國、一黨、一總統の政治組織の確立によつて、また全世紀を被ふ總力戰的戰略の天才たるヒツトラーの出現によつて、美事に完成された。

私は本書のある箇所で、ドイツに戰爭が勃發しても、何等その組織と政策を變更する必要のない高度國防體制がとられ、所謂銃後の一般國民も軍人と同樣なる國民的規律と訓練がほどこされ、戰鬪的精神が植えつけられてゐたところにある、といつたが、わが國の現狀をみても直ちに解るやうに、たとへその機構の上に政戰兩略一致の組織がなされても、それが意の如く縱橫に發動され得ることも、また、一億餘萬の國民が一致團結の體制を整備することも、しかく簡單に出來上るものではない。

特に、後者の國內體制の擧國的一致の完成に至つては、筆紙に盡し難い微妙な問題が數知れず潛

んでゐる。それには微妙復雜なる國民心理の理解と把握とが、先決を要する前提條件である。

すでに私は前章において、國民の精神的統一のために、學校、職場、街頭、公共團體（ヒットラー・ユーゲント、勞働奉仕團、勞働戰線、K・D・F力行團、政黨組織その他）に於ける教育的影響——宣傳啓蒙組織——の統一によつて、その成功の鍵が握られたのであると述べたが、この困難なる仕事がいかになされたかを、今少し具體的なる二、三の例によつて説明しよう。

先づ、フラー將軍が指摘するごとくドイツのラヂオによる宣傳組織が國民の精神的統一と軍隊的規律の上に、いかに重大なる役割を占めてゐるかを研究する必要がある。

一、ラヂオによる國內宣傳

ゲッペルス宣傳相は、ラヂオは「第八の偉力なり」「ナチス黨國家の言葉であり、聲である」と考へて、前大戰における敗戰の轍を二度とくり返さぬように海外宣傳に、國內人心統一の武器としてこれを强化した。

戰時における放送時間は、各國とも增加されたが、イギリスは一日放送延時間四十時間、フランスは一日放送延時間十九時間半、イタリーは一日放送延時間二十時間なるに、ドイツのそれは使用

國語十ケ國語にて、一日放送延時間は、實に五十二時間といふ驚くべき豐富な時間を放送に集中したのである。

ここには海外ラヂオ宣傳についての說明は省略するが、ナチス・ドイツのラヂオ國內宣傳の特色といふべき大衆聽取組織は實に徹底的である。ナチス黨には多數のラヂオ監督官が直屬して居り、政府當局が何か國民に呼びかける必要を生じた時、この監督官が出動し、町の大廣場にラウド・スピーカーを設置する。その他學校、工場、一般集會場等にもこれを備へつける。かくて用意が整ふと全ドイツ國民はあらゆる仕事の手を休めてスピーカーから流れ出る聲に耳を傾けると云ふ仕組になつてゐる。

ヒットラー總統の演說は勿論、政府要路の大官及びその告知は一切ラヂオを通じて放送される。例へば、一九三九年八月二十八日午後三時に行はれた生活必需品の切符統制は、フリック內相のラヂオ放送によつて宣言され、約一時間に亘つて嚙んで含める樣な注意が喚起された。

だが、緊急なる戰時統制をラヂオ放送によつて行ふといふことは格別珍らしいことでもないが、食糧統制が行はれてから、凡そ一週間を經たないうちに、營良不足を訴える國民の不平がもらされ

るや、フリック内相はこれに應じて直ちにラヂオを通じて再び全國に呼びかける。
「配給物資が少いために營養不良に陷つて鳥目や結核になると心配してゐる人がある由であるがそれは全然杞憂に過ぎない。配給數量は只漫然と決めたのでは決してないのであつて、國立營養研究所で多年愼重に研究の結果外氣溫度攝氏何度の時何カロリー必要であるかを決定し、更にこれに相當の餘裕を加へて決定した數量である。從つて健全な消化器を有する人ならば營養不良に陷る惧れは絕對にないのであるから、國民諸君は安心して仕事に專念して貰ひたい。
若しそれでも尙營養不良に陷るといふ人があれば、それは立派な病人で、貴重な食糧が完全に消化吸收されてゐないのだから、即時入院して貰ふか、一ケ月も絕食療法を行へば健全な消化器の機能を發揮するに至るであらう。その上で再び國家のためにお働きを願ひたいのである。」
この內相の放送を聞いた國民は、今でさへ腹一杯にならないのに、この上絕食させられれば大變だと不平の聲は直ちに消える。
それから間もなく、こんどは筋肉勞働者側から不平が起り、勞働者と普通一般の人達と同じ配給を受けてゐることは不合理であるとの非難と不平が起つた。

こんどは勞働者の不平に尤もな理屈があるといふので、直ちにまたラヂオで內相が呼びかけ、「筋肉勞働者が普通と同じ配給量では困ると云ふ聲がある由であるが、なるほどこれは道理である。政府も目下非常に多忙であるのでそこまで手が屆かなかつたのであるが、來週から早速改める事にしたから、今暫く辛抱して下さい。……」（以上のフリツク內相の講演要旨は森川覺三氏著「ナチス獨逸の解剖」に據る）

といふ風に理由ある事は間髮を入れず採用して行く。嚇し文句ばかりで國民は治まるものではなく、なるほどと思ふところは、それに共鳴してやり、正直に白狀するのは國民をして納得せしめる所以であつて、政府の權威を害ふものでは決してない。

また、氣候の不順により突如、外氣溫度が下降し攝氏十二、三度になれば、政府は早速バター一週八〇瓦の配給を一〇〇瓦に增すのである。

これによつて國民は、なるほど內相のかつての放送にあつたやうに、政府は國民の健康と營養を嚴密に注意を拂つてゐてくれる。これでこそ安心してゐてよろしい、と政府に對する信賴は增加するのである。

ラヂオ活用の巧妙さはとにかく、かくの如く下情が直ちに政府に通じ、その不平不滿を解消すべく努力が拂はれるのは、一體いかなる機構によるのであらうか。

それは國民のこうした眞の不平不滿や下情を調査するナチスの見張所（Uberwachungestello）が全國至るところに配置されており、ゲスターポ（秘密警察）の活躍と相俟つて、國民の僞らざる聲が政府當局に非常に敏速に傳達されるからである。この種の任務は重にS・A（ナチス突擊隊）隊やS・S（ヒツトラー新衞隊）隊の隊員が任命されており、これは政府の役員ではなく、ナチスの黨員であつて、一國を支配する政黨の當然の義務としてこれを行ふところに妙味があるといふべきである。

そして國民の正當なる不平や要求を聞き屆け、暑さ寒さにつけても國民の健康を注意するところあつてこそ、國民は鬱積するその不平不滿を雨散霧消して、明朗な感激と感謝を抱いて、政府の施策に心理的、精神的協力をなすのである。

戰時下における國民の忍苦報國の精神は、決して濫用されてはならない。むしろこれはあくまで善導し育成すべく、政府自身が謙虛な氣持を以て萬全の注意を拂ひ、國民の僞らざる聲に耳を傾くべ

きで、ナチスの强味は、一見强壓政治と見られ勝ちなるにも拘らず、微妙なる國民の心理的動向にかくも多大な關心を寄せ、それに對應する組織を用意してゐるところに存する。

國內戰時體制はかくの如くにして鐵壁の陣容を整へられるのであり、敵國のあらゆる攪亂政策を擊破するのであり、敵の乘じ得べきいさゝかの間隙も與えないことになるのである。そしてまた、內政完璧と人心統一の强力なる自信が、進んで相手國の內政を攪亂し、武力の活動や經濟的進出の最も有力なる心理的地盤を供するのである。自國內に對する强力なる自信と精神的信賴なくしては武力による果敢なる進擊もなく、從つて最後の勝利の確保も覺束なくなるのである。

「國防國家の理論と政策」の著者八重樫運吉氏は、早くもこの點に着目されて、次のごとき見解を述べてゐられる。

「我が純粹なる民族國家の國體の本義は、當然そのまゝ國防國家として妥當する。國防國家は戰鬪行動組織體であるが故に、此の行動は、一つの意思に依りて運動しなければならぬ。各機能的に組織された行動の技術的組織が、一つの意志の決定に依りて一齊なる行動をとらなければならぬ。敵に臨んだ荒鷲や猛虎は、全神經を此の一點に集中し、此の神經に依つて身がまへ、完全に一齊な

敏速な行動を以て鬪爭する。戰鬪行動組織體としての國家意志は、完全に一元的でなければならぬ。そして此の戰鬪意志は、戰鬪に堪え得るだけに强力でなければならぬ。强力政治である。

次に此の國家意志に依つて、一切の細胞たる個人は完全に此の國家意志に從つて行動しなければならぬ。個々の行動に隨伴する意志は、國家の意志に從ふことを内容としなければならぬ。之は臣道實踐を意思することである。部隊長の指揮に依りて行動する兵の實踐意志でなければならぬ。更に國家意志に無自覺な者を自覺せしめ、若し飽迄自覺せざる時は之を撃滅しなければならぬ。何故ならば、かかる無自覺の存在は、全行動體系の歩調を紊り、敵を利する敵性であるからである。次に國家意志を決定するには、現實に戰爭をしつゝある第一線の部隊たる臣民自身から敵情が報告されなければならぬ。又部隊内部の戰鬪力の事情が報告されなければならぬ。之が下情の上達である。」（傍點は本書の著者、同書二一二—三頁）

戰時國内體制に、國家意志決定の秘決として、下情の調査と敏速なる上達は絶對に必要である。しかも、それは官廳の手になる眞相を傳えぬ形式的な報告ではいけない。わが當局はかゝる技術的組織について再吟味の必要ありと私は信じてゐる。

全國民の最後の一人に至るまで、國家政策を徹底的に理解せしめることは、それ自身戰時政策の重要なる課題でなければならない。

二、國内に於ける政策徹底に就て

わが國における經濟統制の過誤は、前節に述べたる如き國民の心理的・精神的協力をかち得るための文化的技術に缺けてゐたことと、國民の一人一人にわが聖戰の意義、その戰爭目標を徹底的に認識せしむべく萬全の方策が講じられなかつたためである。「戰ふ日本經濟」の著書西谷彌兵衞氏が「ドイツ經濟の成功は、その統制が資本家の自主的活動に俟つ自主的統制であつたが爲ではなくて戰爭經濟における主體としての戰爭目標が明確に而して嚴格に指示されてゐることが注目されねばならない。「指導」するためには指導する主體の確立が前提なのである。」と、この點を明確に指摘されてゐるのは正しい。

今これらの問題を、ナチス・ドイツにおける國內宣傳政策の立場から研究するならば、そこにわれわれは興味ある數々の教訓を學び取ることが出來るであらう。

ドイツの宣傳組織において、われわれが先づ注目しなければならないことは、政府の施策の實行

が、過去において役所の管理指導の時代から、國民的組織活動——わが國ならば臣道の積極的實踐の組織——を作り出さうとしてゐる點にある。

宣傳は普通には、單なる思想、理念の媒介と考へられてゐるが、それは宣傳の最も重要なる役割たる組織の過程、即ち、國民を組織し、再教育、有機的統一國家の創造といふことが課せられてゐるといふことが忘れられ勝ちである。

しかも、かゝる組織と宣傳の眞の効果は、いふまでもなく宣傳と教育的影響の統一にあり、同時に、その客體たる國民組織の統一と單一化にある。ナチス黨組織と國民細胞組織の一體化が國內宣傳の成功を齎らしめた最大の要因であつた。

わが國にあつては、新しい法令が出ると、法令の發動を見てから漸くボツ／＼宣傳が開始されるが、ナチス・ドイツではこれが反對である。

民衆に直接影響する物價統制とか、食糧切符制とかいふやうな法律を出さうとする場合には、その法令がヒツトラーによつて決定をされても、その施行に先立ちて、ナチスの黨組織は、忽ちその細胞——わが國の現狀から云へば常會の下部組織や職場組織——を通じて活潑な行動を始める。

また、新聞、雜誌、ラヂオ、映畫等のあらゆる文化機關が大衆に對して、その法律の特色を明かにし、戰爭との關聯を說き、極めて卑近な例を捉へて、平易に吞み込み易く宣傳して、何時でも、その法令が受け入れられるやうな下地を作り上げて置くのである。

かくて、この法律が、全國民に充分理解された頃を見計つて、政府はこの法令を發布する。故に全國民は、この法律の目的と理由とを充分に理解し、かつ納得するのである。

高壓的に一般國民にその政策を强要することは、その政策の實行に決してよき結果の件はぬことは、わが國の體驗からみても明らかであり、ナチス政策が强力なる迫力を帶びて着々實現されつゝあるは、國民的細胞――ナチス黨組織、ヒットラー・ユーゲント、勞働戰線、K・D・F、隣組組織――を通じて、國民全般に滲透するナチス黨宣傳組織の一元化にあり、またそれに對して根强い宣傳の觸手が繰り返し伸ばされるためである。

ここにおいて始めて「教育は崇高な政治であり、政治は教育でなければならぬ。」或ひは「政治文化一般を教育せよ。而して教育を文化一般の最高使命とし且つ之を政治的ならしめよ、之が國防國家に於ける要請である。」といふ大政翼賛會首腦者達の理念が具體化されるのである。

國防國家の理論と政策における方法論的一般理論の探求の時代は、すでに終りつゝある。われわれはかゝる政策と理論の具體化のために、その技術的方法論の探求と實踐へと突き進まねばならない。本書の大半はその要請に幾分なりとも應ずるためになされたものであるが、次に特にその技術的な方面に於ける一半を窺ひ得る問題について述べよう。

ドイツに於る戰時對外宣傳に國家的役割を果てゐる「ジグナール」(Signal)や「アドラー」(Adler)に就ては、わが國に於てもよく知られてゐるところであるが、この對外宣傳の寫眞雜誌に對應する國內宣傳の寫眞雜誌「ホルク・ウント・ライヒ」(Volk und Reich)については餘り紹介されてゐない。「ホルク・ウント・ライヒ」(民族と國家)は、國內の民衆指導啓蒙雜誌として、國家の政策を國民一般に徹底的によく呑み込ませ、政策に協力せしめるといふ、戰時體制の國家に、最も重大にして緊急な役割が課せられてゐる。

「民族と國家」(ホルク・ウント・ライヒ)について、柴田隆二氏は「フオト・タイムス」(終刊號)に含蓄ある批評と紹介をされてゐる。以下、同氏の批評を借用し、それに私見を加へながら同誌のドイツ國內における政策的任務について述べてみよう。

柴田氏は「ホルク・ウント・ライヒ」の任務から割り出された合理的な設計について、次のごとく書いてゐる。

「この雜誌の型態は全く合理的に巧みに設計されてゐると言はねばならない。先づ第一に編輯計畫が一政策を――「地中海の革命」と題する同號の如きに地中海政策を四十六頁の文章と寫眞を判りやすくするための巧みな地圖十三とによつて――一冊の本で徹底的にわかりやすく相當突込んで說いてゐる點である。此の言はば特輯號の形式は且つてソ聯の「U・S・S・R」が採つてゐた。「U・S・S・R」とは全然型體は變るが、此の「ホルク・ウンド・ライヒ」で矢張り特輯號の形式を採つて成功してゐる原因は一政策一冊主義によつてこそ政策を突込んで國民に知らせ、更に國民を導く事が出來るので、そこに編輯者の報道精神、指導精神が强く物を言つて來るのである」と、いひ、さらに「此の點から考へると日本の寫眞週報の採つてゐる每號廣く各省の何々デーの解說を一通り受持つことのみに終始してゐる行き方は、先づその企劃性に於て到底國民を指導する力を充分現はし得ぬ事を指摘することが出來る。」と、わが「寫眞週報」に言及されてゐる批評はまさに適切である。

政策月刊雜誌たる「民族と國家が」一政策一册の方針を以て編輯されてゐることは、大英斷であり、柴田氏もいはれるごとく編輯者の指導者意識のしからしめる處であるが、他の寫眞説明を主とする單行本に於ても、一政策一册、若くは一問題一册の編輯方針を努めて採用してゐる。例へば、

Die natinolsogialtiche Revolution in Wien 「ウキンに於ける國家社會主義革命」 Hilfs wert Mutter und kind" 「母と子」の援護 Der Deutsche Schwestern dienst 「ドイツ女子勤勞奉仕團」等。

今私の手許にある、この他數册の寫眞帳を見ても、編輯目的と政策における理解の徹底を期するこれと同樣な方針が、堅持されてゐることが推察できるのであり、國策雜誌にせよ、單行本にせよわが國の盛り澤山な、その結果、斷片的知識と理念しか注入し得ない編輯と企劃には、たしかに反省と批判の餘地が多分に殘されてゐる。

この「民族と國家」は、元來寫眞本位の政策雜誌であるが、ナチスがその政策と法令の徹底を期するため、ポスター、パンフレット等を始め、あらゆる場合に地圖或は繪解の統計を極度に利用し堅くなりやすい政策の話を判り易くしてゐる適切なる編輯振りには、われわれの大いに學ぶべきも

のがある。

今次の大戰において、この種の技術を活用して、特に留意して國民に納得せしめんとしたる點は戰爭によつて生ずる食糧の不安、勝利に對する杞憂の一掃であつた。

例へば、飢えに瀕してやせた子供と健康にほゝえむ子供の寫眞を對照せしめ「前大戰はこのやうに幼兒は飢えてやせてゐたが、今次大戰はかく健康である」と說明し、或は色塗りの地圖によつて前大戰の中立國と敵國とを色分けし、今次大戰に中立國と味方がいかに多く、今次大戰の有利な國際情勢を一目で分るやうにし、だからこんどは大丈夫であると國民に訴えるなど、その他數々の至れり盡せりの國內宣傳が行はれてゐる。

ナチスの國內宣傳の効果的なる點において、その機構上注目すべきは、わが國の宣傳省たる情報局が地方局を持つてゐないのに、ドイツ啓蒙宣傳省は、同省の設立の告示が（一九三三年の三月十三日）なされ、續いて同年六月二十日「啓蒙宣傳省の職務に關する命令」が公布されると同時に、早くも三十一の地方局が設立されたことである。

1、オストプロイモン　　2、ベルリン

3、ブランデンブルグ邊境國
4、シレジア
5、ポメルン
6、マグデブルク・アンハルト
7、ハレ・メルゼブルク
8、ツユーリンゲン
9、シユレスヴイヒ・ホルシユタイン
10、ヴエーゼル・エムス
11、東部ハノーフアー
12、南部ハノーフアー・ブラウンシユヴアイヒ
13、ヴエストフアーレン北部
14、ヴエストフアーレン南部
15、クールヘツセン
16、ヘツセン・ナツサウ
17、ケルン・アーヘン
18、コブレンツ・トリエール
19、エツセン
20、デユツセルドルフ
21、ミユンヒエン・オーバーバイエルン
22、シユバーベン
23、バイエルン東部國境地方
24、フランケン
25、マインフランケン
26、ツアールフアルツ
27、ザクセン
28、ヴユルテンベルク

29、バーデン　30、ハンブルク

31、メクレンブルク・リユーベック

地方局は以上の一定區域を擔當し、宣傳省の任務に關する一切を分擔し、宣傳大臣を補佐し、その命令を實行してゐる。

宣傳活動を展開するにあたつて、その地方々々特殊な地域的な條件を無視することの出來ないのは、ここに說明するまでもないことではあるが、わが國の情報局がこの點を考慮されるところ尠いのは、まことに遺憾なことである。

啓蒙宣傳大臣ゲッベルスを總裁として、映畫院、造形美術院、音樂院、演劇院、ラヂオ院、新聞院、著述院の七院を以てドイツ文化院を構成してゐることは人も知る通りであるが、この文化院の各院及び專門團體は、地域的には、宣傳省の地方局に對應して、矢張り三十一の管區に地方支部が設けられてあるが、この地方文化監理官は、宣傳省の地方局指揮者が、その職を兼務することに（一九三四年十一月十三日）決定されてゐるので、文化院の地方支部の指揮者は、宣傳省地方局長の監督下に置かれてゐる譯である。ここにナチス黨と國家組織との有機的一體の原則が事實上にな

りたつのである。

こんど大政翼賛會では、各地方の縣別毎に文化聯盟を組織されることに決定をみた由であるが、この地方文化聯盟は、大政翼賛會本部で統制されることはいふまでもないが、地方に於ける事實上の監督と指導は一體誰が如何なる權限を以てするのであらうか。情報局の地方局設置の問題と共に今一度この點考慮の餘地はないであらうか。

ともかく、ドイツにあつては、宣傳省の命令と指揮によつて、全國津々浦々に至るまで宣傳の嵐が、かゝる文化機關の協力のもとに、吹き卷くるのは、宣傳機構におけるこの地方組織とその活動を見逃してはならないであらう。

かくてこそ、敵の撒布するデマ宣傳や第五列の活躍の餘地を封鎖し、後方攪亂の間隙を與えないばかりでなく、政府の政策は徹底され、從つて、全國民は進んでこれに協力するにいたるのである。

三、ナチス宣傳の指導性と倫理性

ナチスの國內宣傳政策について書くべきことは限りなくあるが、私がとくに痛感せる點を強調し

て置きたい。

ナチス宣傳の指導性と倫理性についての問題は、必ずしも總力戰の戰略上の問題ではないが、わが國の宣傳がその指導性と倫理性の餘りにも缺如せるがために、しばしば宣傳の權威を失墜し、その信賴を喪失しつゝあるので、この問題に觸れることは決して無駄なことではないと信ずる。

ナチスの所謂指導者政治は、國民に對して、權力を以て支配するといふことではなく、むしろ指導者は國民の信賴に應ふるだけの國家に對する奉仕を實踐すべきであるとの理念のうちに存する國民社會主義(ナチズム)の體制が、今日まで成就し得た結果から見ると、この自ら形成した「指導」から發した國民の善良なる本能に對する訴へと說得とは、非常に有效であつたといふことが明白にわかる。それはドイツ國民のうちに於ける「信賴」の結果である。國民相互間の「信賴」就中指導者と被指導者との間の信賴である。

宣傳においても、無論この指導者原理は適用されてゐるし、指導者原理とその組織によるこの信賴ありてこそ、宣傳の倫理性と權威が確保されたのである。

ドイツの宣傳は、それが一度敵國に對する宣傳となれば、第二章で紹介した謀略戰の第五列的戰

術にせよ、後方攪亂政策にせよ、マキアベルリも三舍を避ける相當辛棘な政策を弄することもあるが、自國民に對する國內宣傳、それが特に青少年や生活問題に關ずる場合には、宣傳と實踐の有機的統一、指導性と倫理性との人格的な統一が美事に完成されてゐるのを見て驚嘆するのである。

ここに、ヒットラー・ユーゲントにその一例をとらう。「責任と創意性」の指導者原理を根柢にもつヒットラー青年團が指導者の養成の際、その不可缺の要件として列擧したものは、まづ第一に强靱な責任感、第二に教育者としての必要な知識と學問以上の實際的訓育の手腕、快活なる素質、青年を教化する高い人格と德性等であつたが、特に青年指導者としての最良の證明は、兩親がその子弟を彼に滿幅の信賴をもつて預け、そしてその子弟たる青年が彼を尊敬し且つ喜んで彼（指導者）に服從するといふことであつた。一言にしていへば、ヒットラー・ユーゲント擴大のための宣傳とその實踐の目標は「まづ兩親の信賴を獲得せよ」といふことであり、ユーゲント內の指導者達に向つては「しからざれば指導者たるの資格なし」といふことであつた。

このスローガンに對して、ヒットラー・ユーゲントの最高指導者（バルドウール・フオン・シーラッハ）は、いかなる實踐をもつてこれに酬ひたであらうか？

私は團長シーラッハの署名になるヒットラー・ユーゲントの勤務に關する施行細則を見て、そのいづれの命令細則にも周到なる注意が惜しみなく拂はれてゐることに全く敬服し、思はずこれあるかな！と快哉を叫んだのであるが「ヒットラー靑年團、獨逸少年團の整頓訓練、或は野外訓練に於ては、處罰の概念は存在せず、處罰の如き方法に依りて權威を維持せんとするが如きヒットラー靑年團、若くは獨逸少年團の指導者は、かくの如くする事に依つてその無能を立證する者に他ならざるが故に、斷乎として退職を命ぜられるものである。」といふ箇條と、保健事業について述べたところで「同團は年少者のみを取扱ふものであるから、その裝備に關しては特別の配慮を必要とする例へば、携帶用藥品にしても金屬製容器が用ひられ、硝子製容器は使用せぬ。また暗闇中に於て、例へば、藥品と礫砂とを混合する様な事故を防止するため、礫砂は編籠の中に入れた硝子壜に入れ手さぐりにても判別出來るようにせよ」等々の詳細なる使用法を規定せる條項に接して、この親も及ばぬ親切と周到なる注意に依つて、始めて「兩親の信賴を獲得せよ」と、呼びかける宣傳スローガンが僞らざるものであるばかりでなく、實に高き倫理性と權威を以て叫ばれてゐることを痛感したのである。ローマは一日にして成らず、八百萬のヒットラー・ユーゲントの隆盛も、倫理性高き

かくの如き宣傳と偉大なる指導者達の辛苦の結晶といふべきである。ヒットラーの宣傳、ナチス・ドイツの宣傳は、かくの如く決して空手形でないことを注目しなければならない。

もしも宣傳に、かゝる企劃と實踐に於て、その倫理性と指導性において、離反し缺如せるものあるならば、宣傳の過程が同時に組織過程であるとの理論も單なる空念佛として終るに過ぎないのである。

卑近な例を擧ぐるならば「代用食に甘藷を用ひよ！」との宣傳を以て大衆に呼びかけた場合、宣傳の企劃がそれと併行的に行はれず、甘藷が市場に少しも姿を見せなかつたならば、どうであらう。この訴へにより、當局のすゝめる甘藷やメリケン粉を代用せんとしたる善良なる國民を徒らに失望させるのみならず、將來行はるべき政府當局の宣傳を信用しなくなり、國策に對する積極的なる協力の熱意を失はしめるに至るであらう。

だが、殘念なことには、かゝる實例は、われわれの身邊に枚擧のいとまないほど無數にころがつてゐるのである。

國內政策の宣傳に於て特に重要視されなければならぬのは、宣傳に於ける企劃との有機的一體で

あり、その倫理性と指導性の維持である。かくてこそ宣傳そのものの信頼と權威が高められ、勝利の宣傳が確保されるのである。

宣傳は「精神支配」の手段でなく「精神指導」の手段であることを、ここに繰りかへし强調しておきたい。

第三節　ナチスの外交宣傳戰

一、憂國の志士は唯か　武藤氏外交論の功罪

戰時中に於ける外交政策が、常に戰略との最も緊密なる關係に於て割出され、更に現在の戰局と將來の發展及豫測と睨み合せて展開されなければならぬことは、今更議論の餘地のない所である。

今次歐洲大戰に於ける、ドイツ側の作戰と外交戰の經過を些細に檢討するならば、ヒットラーがこの點いかに苦心と遠謀深慮を拂ひつゝあるかを諒解することが出來る。事實外交戰と宣傳戰は、ヒットラーの幕下に、ゲーリングの作戰、リッペントロップの外交、ゲッベルスの宣傳の三者合作の美事なチームワークが演ぜられ、その成功によつてこそ、かくも戰果をかち得たのである。即ち、

ヒットラーの外交戰の要諦は外交政策と戰略との緊密なる結合關係に於て押し進めると共に、宣傳――特に新聞とラヂオ――を外交政策に協力せしめることを、最も重要にして、また動かすべからざる確固たる方針としたことにある。

今特に外交政策に對する「新聞」宣傳の協力といふ見地より、わが國の新聞宣傳を見るならば、各新聞は外交政策に協力せんと願ひつゝも、寧ろ却つてその裏切り的行爲に甘んでゐるかの如き事實に一驚を喫するであらう。否、わが國の新聞は意識すると、せざるとは別として、敵國諜報の役割を、實に勇敢にも、また忠實に果しつゝある。だがこの責任は、すべてを各新聞編輯主腦者に歸すべきではない。寧ろそれはわが國の宣傳政策の貧困と無能とを暴露する以外のなにものでもないであらう。

論壇の雄武藤貞一氏の所説は、筆者の日頃受讀し、且つ、その喧々諤々の主張と論策に啓發される處も多いのであるが、同氏の外交問題打開に關する方策と態度に於ては、筆者は必ずしも全幅の賛意を表し難いのを遺憾とするものである。

武藤氏は「小林商相は敵中橫斷の決意で行け」と題する某紙上最近の所說に於て、次の如く述べてをられる。

「筆者は夙に蘭印總督を無視し、こと蘭印に關しては毅然たる東亞の盟主たる建前に於て、オランダ本國を征伐したドイツに對し、イタリーに對し交涉し、要求せよと痛呼し來つたのだ。愚劣なる前內閣の諸公がわれら同志の熱血を揮つての訴へにも、冷然と聞き流したが故に、今日、僅かに小林君の商談に期待せねばならぬ羽目に至つたのではないか。

亂鴻急を告ぐ、日本南進の空聲に怯えたアメリカでは、バタヴィアの日蘭會談を重視し、石油の實權を握るスタンダードから先づ代表が急行し、次いで新聞王ロイ・ハワードが十三名の視察團と稱する者を伴つて濠洲經由で押渡るといふ。かくてアメリカの僞善のヴエールをかなぐり棄てゝ、東印度諸島の經濟的本國は吾なりとの傲慢なる鼻柱を突き出して來たのだ。アジアの一角に對するこの振舞は、日本に對し、侮辱に非ずんば挑戰に非ずや」云々………

同氏の警告と慨歎は、筆者も一應尤もなりと首肯できるし、また、その警世的な所說に疑義をさ

しはさむものではない。否、武藤氏の外交論策が、わが外務當局の無爲無策とその典型的日和見主義の核心を衝き、わが南方政策への正しい道を示唆しておればおるほど、云ひ換へれば、武藤外交論が正しければ、正しいほど、ジャーナリズムに於ける世俗的なる公表は差し控へらるべきである。ドイツでは最近碩學〇〇〇博士の著者を國家のために役立つ書物なるが故に、即ち、同書の內容が他國に知られた場合、却つて、ドイツ國家に不利なるために發賣と公表を禁止せしめ、發禁に依つて蒙る同博士の被害を國家に於て保證するの措置をとつたのであるが、國家に稗益する處大きければ大きいほど、かゝる有益な著者、研究家に、國家が最大の保護と名譽とを與ふるは、寧ろ當然であらう。わが國にかゝる羡望に耐へぬ賢明なる文化政策がとられてゐないにも拘らず、即ち、わが當局が同氏の論策を遇する道を辨きまへないにも拘らず、同氏のジャーナリスティックな活躍ー自由發表に依つて與ふる反響の責任――のみを追究するは、或は殘酷のそしりを免れぬかも知れないが、私の今問題するところは、武藤氏そのひとにいかに過酷であらうとも、同氏の外交論策に依つて與ふる對外的影響の――即ち、同氏の外交論が一つの外交宣傳として及ぼすところの戰略的な反響の功罪に對して嚴正であり、峻烈たらざるを得ないのはまた止むを得ざるところであらう。

從つて、われわれはアメリカをして、事前に、あるひは必要以上に「日本南進の空聲に怯え」しめたところの、武藤氏等一連の南進論者の責任の追究を手加減しようとするものではない。否、われわれは宣傳政策に無關心たる外交評論家の、猪突猛進の空騷ぎこそ、彼等をして「日本南進の空聲に怯え」しめたる當面の責任者ではなからうか？と疑はざるを得ないのである。

私は戰時外交政策に關する限り、絶對の秘密と自國民をも欺瞞（カムフラージ）する遠大なる謀略、策戰を要望する。敵を欺かんと欲するならば、なほさら先づ味方より欺け、とは古來兵法の敎ふるところ、お祭り騷ぎの行々しい、前觸れ太皷を叩くことなく、外交的戰術も、かのヒットラーの戰法に倣ひ、强力なる戰爭手段（軍隊）を、外交交涉と策戰の背後に極秘裡に十分準備しつゝ、突如電擊的に襲ひ、第三國は勿論、相手國にも間髮を與へざる機敏さに於て、即決したいものである。

戰時中には、もはや所謂「輿論外交」の餘地は全然殘されてはゐない。輿論なるものは必要に應じて何時でも國家宣傳によつてつくり得るものである。從つて、自然發生的に擡頭せんとする國民の自覺と輿論の聲に追隨し甚しきに至つては「國民外交」の美名に隱れ、所謂輿論の歸趨とその決意に俟つて、これに盲從せんとする舊來の外交政策を、世界新秩序建設といふこの大變革期に、猶

且つ堅持せんとするのは、武藤氏の所謂「亂鴻急を告ぐ」る戰時外交の妙諦を知らざる床屋政談にすぎない。

憂國慨世の論客武藤貞一氏は、この秘略を知つてか、知らずしてか、南方に颱風の訪れなくして嵐を招き、大洋の波いまだ靜かなるに風波を起すかの如き警報的陣太鼓――春秋の筆法を以つてすれば、武藤氏の警告、スタンダード代表並にロイ・ハワード一行を蘭印に走らす式の喧々諤々の、宣傳戰術にアマチュアたる外交論を、憂國慨世の志士われ一人なり、と、得々たるかの如く振りかざすは、好漢惜らくは、戰時外交戰を知らず、と、同氏の愛國的熱情と撓まざる不屈の努力を知る者の、ひとしく愛惜するところである。

二、外交政策はいかに宣傳さるべきか

私は今次歐洲大戰に於けるドイツ的戰略を研究し、いさゝかヒツトラー戰略の眞髓に觸れて得たる外交政策と宣傳戰術に關する結論は、外交戰の展開は、作戰と宣傳との緊密なる協力を要すといふことであつた。從つて、外交政策に對する進言警告の如きは、個人的な建策として帷幄の府に提言すべきであつて、巷間に流布される言論機關――一般新聞・雜誌の如き――に公表を許すべきで

ないといふことである。しかし、その反面、情報局に於て外交評論家や新聞雜誌編輯者には外交政策は勿論、進行中の戰爭作戰と宣傳政策などその組織的機關を通じて大膽に相談し、その協力を仰ぐべきである、要するに、聰明機敏なる宣傳政策に依つて、言論機關の一糸亂れぬ統制の强力緊密なるタイアップがなされねばならない。勿論そのために何よりも先づ、言論――新聞、雜誌外交、評論家――機關、文化機關の統制と完全なる組織化、そして同時にわが情報局の擴充强化とかゝる宣傳政策の果敢なる實行にあらねばならない。

私が本書卷頭に於て屢々强調せる如く、ドイツが前大戰當時の敗北の經驗を最もよく活用せるものは、むしろ今次大戰に於ける謀略・宣傳政策に於てなされたのであつたが、その新聞政策――特に海外宣傳と特派員の操縱――於ては、全く他國の追隨を許さぬ新機軸を生み出した。アメリカの一特派員――オスワルト・ガリスン・ヴィラード氏は、この點に關して次の如く述べ、且つ、私の前述の所論――外交と戰略のために、いかに自國民を欺き、またそのため苦肉の策を弄したか――を肯定してゐるのは興味深い事實である。

「ナチスが前大戰當時の對外宣傳放送の一部が、英國軍隊に惡い影響を及ぼした事實、及び夥だ

しい英國人が裏切り英國人「ホーホー卿」の講演に耳を傾けてゐた事實を認めてゐる。

ベルリン當局は外國の通信員に對して、屢々好いニュースを迅速に供給してゐる。又、私がドイツ外務省に出掛けた時事實を曲げないで、ドイツの指導者の悪口を云はない限り、どんな電報を打つのも、手紙に書いて出すのも自由だと言つたが、ベルリン當局は、此の私への約束を實行した。**今度だけは、ドイツ人は念入りに自國民を欺く一方、他國民の心理に對する幾分の理解を示してゐる。ナチスはこの方面に於ても新機軸を出した。**」

（因に「ホーホー卿」とはドイツ對英放送の人氣者のアナウンサーの綽名で、この名はデーリー・エクスプレスのラヂオ記者パーリントンの命名せるもので、ヴイラード氏は裏切英國人といつてゐるが、彼はロルフ・ホフマンといふ立派なドイツ人であるともいはれてゐる）

今次大戰勃發以來、私はナチス黨機關紙たる「フエルキツシエル・ベオパハター」（Vökischer Beobahter）や「デル・アングリッフ」（Der Angriff）「ドイチエ・アルゲマイネ・ツアイツング（Deutsche algemine zeitong）その他一、二、をドイツ軍作戰の進行と睨み合せて研究し、検討したのであるが、その結果私の學び得たる貴重なる教訓は、先にも述べたる如く結局、對外的影響

の微妙にして甚大なる外交政策は、外交專門論客以外は濫にその公表を許すべきではなく、又外交政策とその宣傳戰に關する限り、ことのほか愼重にして、しかも機敏なる統制が確保されねばならぬといふことであつた。

ドイツの新聞が、宣傳・謀略の巧妙なるコントロールに依つて、その報道と論說がいかに操縱されたか、また、妙味ある策戰と統制に依つて、いかに絕大なる威力を發揮したかを、今次大戰の報道戰に於ても最も公正なる態度を保持した日本人の觀察に依つて語るために、ポーランド作戰當時旣にドイツに滯在されてをられた氣賀健三氏の卒直明快なる大戰體驗記――ドイツ新聞見聞記――を紹介しやう。

「ダンチヒ市及びポーランド廻廊を廻つて、戰雲の怪しくなり始めた頃、ベルリンの各新聞は、如何にもポーランド政府並に民衆に理解ある態度を期待するものゝ如く頗る穩健な論陣を張つて居つた、然るにポーランドがヒツトラーの第一回解決案を拒絕し、英國と攻守同盟を締結し同時にドイツが對ポーランド不侵略條約を破棄して以來、新聞の論調は俄然一變し、連日のやうに廻廊地方に居住するドイツ人虐殺のニュースを載せたり、ダチンチヒ市壓迫の有樣を報道したりして、猛烈に

一般市民の敵慨心をあふつた。その調子は之でもか〳〵といふ工合に政府當局者として、最早堪忍成り難いことを國民全體に同意させ、戰爭もまた止むを得ないことを、はつきり心底にしみこませる程のものであつた。

對英佛に闘するドイツの態度に就て、各新聞は當初から今年の春に至るまで常に筆を揃へて、戰爭の責任が英國に在ることを書き立てた。「ポアリユよ、トミイの爲に徒に血を流すな」といふ文句が當時のどこの新聞雜誌にも讀まれた。因にポアリユ及びトミイとは、それ〴〵フランス、イギリスの男子の代名詞のやうな名前である。之は正に眞意であつたに相違ないが、フランス國民の戰意を挫く上に於て實に有效な宣傳であつた。一般市民は當時、獨軍がライン河を越えて侵入しないのであらうかと疑つた程である。

然るに今年春になつてから、新聞紙上にはフランスも亦敵とせざるべからず、といふやうな論調が載せられるやうになつてきた。ドイツは、前年の世界大戰にうけたフランスの侮辱を忘れるものではない。總統は忍ぶ限りの讓歩をして、フランスと友好闘係を結ばんと努力したが、頑迷な佛政府のために、その努力は遂に成功しなかつたが、その責は偏にフランスが負ふべきである。ドイツ

は過去の恨を忘れるものではない。いつか之をはらす時が來るであらう、といふやうなことを書き始めたものである。果せるかな獨軍がベルギー、オランダの國境を越えてフランスに進軍して行つたのは、それから間もなくのことであつた。

この西部戰が始まる直前なほ一つ興味深いことがあつた。といふのは新聞やラヂオが毎日バルカン問題を報道して居つたことである。ベルギーやオランダの事に就いては一言半句も言を費さず、專らルーマニヤやトルコの國情不安を述べ、英國やユダヤ人の同國内に於ける種々の陰謀を曝ぐやうな記事を揭げたり、イタリヤが反英氣勢を盛んにして、今明日中にも參戰しさうな氣配をみせてゐると報じたりしたものである。丁度その頃私はイタリア經由でナポリから日本の船に乘つて歸國しようと準備してゐる頃であつた。知り合ひのドイツ人達は皆僕にその無暴を忠告し、バルカン地方がかう不穩では、イタリア參戰は間もないことであらうから須らくシベリア經由の道を取るのがよいと說いてくれたのである。自分も半分はその氣になり、若し途中でイタリア參戰などといふことになつたらどうしやうと本氣になつて心配した。がそれから間もなくベルギー、オランダへの進軍が始まるなどゝ豫期するものは一人としてゐなかつた。南ドイツの一都市シュトツトガルトの旅

館でオランダ侵入を告げるラヂオの報知を耳にした時は正に靑天の霹靂であつた。自分はこの時の驚きを忘れない。新聞はそれつきりバルカンのことを書かなくなつてしまつた。そして、景氣よく西部戰線の勝ち戰さを報道した。」（氣賀氏の「ナチスの宣傳とその實際」の一節）

三、外交戰はいかに戰略と結びつけられたか

私はわが同盟通信社調査部の編輯になれる「國際宣傳戰」なる一書を手にしたが、同書の所說と調査は、私の所論と一致し、また、私の導き出したる外交・宣傳政策に對する如上の結論と信念とを裏書するもの多く、實に愉快に堪へない。こゝに同盟通信社調査部の同書刊行の勞苦と功績とを深く感謝する次第である。

「三月十八日、獨伊國境のブレンネル峠で行はれたヒツトラー、ムツソリーニ會談が、實はドイツの北歐進擊打合せを中心話題にしたものであることは、もう今では疑ふ餘地がないが、當時にあつてはこの會談の內容は實によく秘密が保たれた。三月中のドイツの新聞はノールウエーに關する重大記事は一つも書いてゐない。この月ドイツの新聞の最大スペースを取つてゐるのは、ブレンネル會談の前日に行はれた、英軍港スカパフローの大空襲の月末に突然發表された例の「戰爭摘發者

の暴露」といふ外交文書の話だ。ブレンネル會談に關しては「獨伊の樞軸愈々固きものあり」といつてゐるだけで當日の新聞すら、スカパフロー空襲の續報の方を大きく扱つてゐる。スカパフロー空襲が、ブレンネル會談からの關心を他に外らすためには殊更その前日行はれたといふ見方も滿更穿ちすぎた話ではない。

これに對して英佛側の新聞がどうかといふとブレンネル會談には總ゆる新聞が、凡ゆる揣摩憶測を書いてゐるが、結局ムッソリーニの仲介による和平だといふ話と獨・伊・蘇の提携によるバルカン攻略だ、といふ二つが中心となつてゐる。その後の事實の進行から見れば誠に他愛のない推測だが、英國政府筋ではこの月の初め頃から、盛にバルカン危機の増大を放送してゐたのだからしかたがない。大體英國は當初からドイツの矛先を東から南へ向けさせたがつて、折あらばバルカンの危機を盛に宣傳してゐたのだが、この時もドイツのノルウエーの狙ひを知つてか知らずしてか、盛んにバルカン危機を繰し返し放送してゐる。ドイツも差支へない程度でお附合に、時々バルカン危機を放送して居り、スイス邊りからもドイツの放送によると思はれる、バルカンの危機が一再ならず傳へられた。」

この英佛側のバルカンの危機の宣傳は、後になつてからえらい結果を招いた。即ち英國艦隊の一部はこの三月末バルカンの危機愈々迫るとの「確證」を握つて地中海方面に廻つたが、何ぞ計らん翌月九日には、ドイツの北歐洲進撃となつて、しまつたと思つたがとき既に遲しの破目に陷つた。つまり英政府自らの希望的宣傳が作り出した幻影に、うつかりひつかゝつたわけであるが、無論ドイツ側も默つて棚ぼたを待つてゐたわけではない。ノルウェー電擊上陸の前日、英佛側のノルウェー沿岸機雷敷設といふ暴擧に對して、ドイツ外務當局が新聞記者團と會見した際に於てすら尙「問題はノルウェー方面許りではない、バルカンの方でもつと危いのだ」との一項を附け加へるのを忘れなかつた位だ。そしてこの日に到るまで、ドイツの新聞は、尙スカンヂナヴイア方面には一言も觸れてゐないのだから徹底してゐる。

「四月九日ドイツはノルウエーに電擊上陸、翌日のフエルキツシヤー・ベオバハター紙の第一面には赤字全段拔きの見出しでかう書いた。

「ドイツ、スカンヂナヴイアを救援」

次いで翌日から戰況の報道とともに、何故ドイツがスカンヂナヴイアに出兵するかの理由を猛烈

に書き出した。英佛の新聞が事前に、例の機雷敷設の理由として、ノルウエーの中立性を最早信ずることが出來ないからだといふ話を、前日ゴタ〳〵と並べて居るから、ドイツ側はその話をそつくりそのまゝ書き並べればよかつたのである」（「國際宣傳戰」四一―四三頁）

ドイツのノルウエー攻略が、五月初め壓倒的な成功のうちに一段落すると、當然その後に來る問題は「ドイツの次の狙ひは何處か」といふことだつた。バルカンは依然として危いし、ノルウエーを作戰根據地とする英本土襲撃も考へられるし、フランス攻略の前提としてのオランダ侵略も――もしかするとこれが一番起り易い。

「このドイツ側の結論は、英國としても充分豫想できたところで、英國側としては長期戰への誘導を利益とする以上、結局このドイツの連戰への轉換を阻止しなければならない。

こゝで英獨兩者が必死となつて爭ふ外交宣傳のテーマが登場して來る。即ちアメリカ參戰を續る兩者虛々實々の宣傳戰だ。ドイツ側は、オランダ侵入によつて、アメリカ參戰の危機が增大することは百も承知してゐたが、結局の問題は、最後にアメリカが參戰するかどうかといふことではなくてアメリカの參戰を恐れてぐづ〳〵してゐる間にオランダ侵入の時期を失ひ、叉英國の宣傳が速效

を奏し、アメリカがドイツのオランダ攻略完了前に參戰することが、最もまづいのだといふことをよく知つてゐた。ここでドイツの大膽極りなき謀略宣傳が始まつた。

つまりドイツがオランダを攻略した場合、東洋にあるオランダ印度はどうなるだらうといふ問題の提出である。「オランダの危機が增大すれば東洋の蘭領印度は動搖するだらう。これに對して密接な經濟交渉を持つ日本も、默つてゐないかも知れない」たとへアメリカが歐洲戰爭に參加しても蘭印問題を中心に日本が起てば、アメリカは大平洋へひきつけられ、英佛側へ寄與するところは少いといふ、はつきりした計算を眞正面からぶちまける――これが戰爭當初からの、そして特にオランダ侵入暫く前からのドイツの「對大平洋」宣傳の方策だ。

蘭印の危機はオランダ危しの聲と共に歐洲開戰直後から、屢々自然發生的に世界の各地から放送されてゐるのだが、我が國の第七十五議會で有田外相が行つた蘭印・フイリツピンその他との不可侵協定の準備あり、といふ演説以來一段と强くなつた。この現象の背後には、ドイツの對第三國宣傳網の活躍が隱されてゐるのだ。有田外相の演説は、當時ドイツ各紙が大きく扱つてゐるし、四月の後半有田外相再度の聲明で、蘭印が新しい型で登場し、蘭印各地のオランダ紙や、フイリツピン

の米系紙が盛にガヤ〳〵對日恐怖の聲を上げたのに、ドイツ各新聞は意識的にこれを取りあげ、原文を再錄して（時には日本の感情を害する樣な毒筆もそのまゝ）「大平洋の波」を錄音放送したものだ。だとへばこんな風に――

「蘭印の空騷ぎ」（四月十八日獨某紙、スラバヤ・ハンデルスブラット紙より轉載）――日本側今次發表の眞意は捕捉するに困難であるが、多分ドイツがオランダを侵略したら、英國は自動的にオランダの同盟國となり、その結果日英開戰ともなれば、日本は蘭印の物資を自由に輸入出來なくなる、だから日本は蘭印保護の任にあたりたいといふことだらう云々」

「結局こんなことで、一時は世界の眼が、ヨーロッパと大平洋と、兩方を一時に見るために、轉手古舞をした。日本の新聞にも、當時連日の樣に蘭印問題が載るし、外務當局も何かと云へば蘭印の話をし、甚しきに至つては日本中の蘭印通が動員されて、やれ蘭印の資源はどうの、軍備はどうのとしやべられてゐたのを、諸君は記憶してゐるだらう。もとより全部が全部ドイツの宣傳に躍つたといふわけではないが、とにかく、かういつた宣傳の效果はてき面、アメリカは五月七日に到つて、折柄太平洋で演習中の艦隊に對し、その主力をハワイに集中し、當分駐留させることに決めて

しまつた。アメリカの巨大な足はこれで、太平洋の深みへつゝまれた！これより三日後の十日、間髮を入れずドイツはオランダ、ベルギーに電擊を打ちこんだのである」（「國際宣傳戰」五六―五七頁）

わが同盟通信社の調査報告は、作戰計畫（即ち戰略）との緊密なる協力に依つて展開される外交――宣傳――政策の妙諦とその威力の驚くべき成果について、實に鮮明正確なる描寫を與へてゐるのではないか！わが論壇の雄武藤貞一氏が、かくの如き遠謀深慮なるドイツの思想謀略に踊らされたのではなく、また「蘭印の空騷ぎ」を演じた一人でもないならば、まことに幸ひといふべきであらう。

こゝに於て、私は最後に斷呼として叫びたいことは外交――宣傳――政策は、新に生れた情報局に一任せよ！　しかして、情報局は、外交政策・宣傳戰に於てもわれ〳〵の信任と期待に酬ゆるだけの敏捷果敢なる鬪爭の展開に依り、この分野に於ても、また最後の勝利を獲得すべく滿全の努力を拂ふべきであらう。

第四節　ドイツ軍の前線新聞

西部戰線における不滅の勝利も、單に戰略と軍事上の作戰からのみ考察されてはならない。

ヒットラーは七月十九日のドイツ國會における大演說において「ドイツの成就せる成果の原因はより深いところにある。それは、われわれの敵がドイツの弱點なりと信じてゐたところ、即ち第三國家の革命的動力とその國民社會主義指導とに求めなければならない。ナチスの指導は、嚴格且つ一絲亂れざる最高統帥部とともに、最良の近代的兵器を作り出した。ナチスは冷靜に商量された極めて入念な準備と、最も大膽な作戰の遂行とを結合し、ドイツ將校の古今世に聞えたる戰鬪力を、もはや單なる祖國への義務の遂行といふことを以ては理解し得ず、一致團結せる全國民を擔ひ且つ推進するといふ念を以てする以外には說明し得られぬまでに、高揚せしめたのである」と、述べてゐるが、ドイツ將兵をして、戰爭への參加を「もはや單なる祖國への義務の遂行」ではなく「全ドイツ國を推進」せしめる「義務以上」の精神的高揚として與えたものはなんであつたか？

ドイツ兵が、どうして、あんなに勇敢に鬪つたかについては、勿論、平時におけるナチ精神及び

新秩序（第三帝國）建設の理想の徹底、その他種々なる理由を擧げ得るのであるが、ナチ精神の昂揚、ヒツトラーに對する絶對の信頼を、戰線における將兵に、最もよく植えつけたものは、實に戰場における「前線新聞」――第一線軍機關紙――であつた。

西部戰線（ベルギー並に北佛）派遣軍司令官フアルケンハウゼ將軍は「ドイツ軍の駐屯地には必ず獨逸新聞がなくてはならぬ」との方針を抱き、各地において派遣軍の軍機關紙を創刊した。

クラカウ、ワルソオ、オスロー、アムステルダム、ブラツセル等においては、すでにそれぞれ第一線軍機關紙が發行されてゐる。

ブラツセル・ツアイツングは一週七日發行、平日夕刊、日曜朝刊、七段制大型紙のもので、その創刊號に掲げられた發刊の辭には、次の趣旨が明らかにされてゐる。

「前線新聞（フロント・ツアイツング）は勿論、一般治安の回復につれ、占領地帶に發行された。この政治的日刊新聞は獨逸軍隊にとつて肉體的の糧と全く同じく不可缺な精神的な糧を與へた。

北諸派遣獨逸軍部隊は、苦戰の最中にあつても、なほナルヴイクで戰線新聞を發行してゐた。我

が飛行機は氷雪に埋れながら頑敵と對峙しつゝあつた友軍に彈藥、食糧を投下したが、オスローにドイチエ・ツアイツング・イン・ノルウエイゲンが（一九四〇年七月一日）發行されるやうになつてからは、同紙をも軍需品と認めて投下したのである。

このドイツチエ・ツアイツング・イン・デア・ノルウエイゲンやクラカウエル・ウント・ワルシヤウエル・ツアイツング（一九三九年十一月創刊）やドイッチ・ツアイツング・イン・デンニーダアンテデン（一九四〇年六月創刊）と同じく、ブルッセラア・ツアイツングは獨軍第一線部隊を讀者とするものである。

しかしながら、ブルッセラ・ツアイツングはベルギー人民にも讀まれ、獨逸軍と白耳義國民との協力に寄與して、彼我共榮の實を擧げんことを目的とするものである。」と。

即ち、軍機關紙たる前線新聞の役割は、將兵に對する「肉體的の糧と全く同じく不可缺な精神的な糧」として、發行されたのであり、また、同時に占領地帶の民衆との精神的交流を以て「彼我共榮の實」をあげんことを目的としたものであつた。

ナチスが新聞を「第七の偉力」なりとして、精神と輿論統一の武器として重要視したことは、旣

に述べた通りであるが、一九四〇年五月以來、ナチス全國新聞部（ライヒス・プレッセシュテレー・デア・NSDAP）主催のもとに、戰線から歸鄕し、あるひは戰線に歸任する歸休兵に對して、多數の新聞雜誌を贈つてゐるが、これは格別珍らしいことではないにしても、ベルリン停車場において歸休兵に特に多數の新聞が配布されたことは注目する必要があると思はれる。

何故なら、わが國においては驛頭における物資による慰安は常に考慮されてゐるが、精神的な糧の提供といふことについては忘れられ勝ちであるからである。

それはさておき、ドイツ軍進駐地における「前線新聞」は、新聞記者として日頃訓練されたる宣傳省のエキスパート（宣傳中隊）によつて編輯されたのであるが、この新聞は、今次の戰爭の目的ドイツが復興せんがためには、英佛はどうしても邪魔であるとか、またドイツが爆擊しようとしてゐる目的都市であるとか、その戰略的意義がどこにあるといふやうな、當面必要な戰局や戰況を詳細に報道して、士氣を鼓舞すると共に、實際に戰爭に携つてゐる兵隊に、現在目前に展開されつゝある戰爭の狀況をよく知らしめる、それも記事と共に極度に寫眞や圖解を利用して行ふといふ非常な親切な方法を以て、前線將兵の士氣の鼓舞と統一、精神的孤立から一致團結への感情的紐帶の確

保といふ點に、全く想像も及ばぬ多大なる成果を獲得すると共に、また、占領地帯の一般民衆には極めて良好な宣撫的役割とドイツ國防軍への信頼を高めることに役立つたのである。

「前線新聞」の必要について、わが大陸派遣軍も十分これを認識されてゐたので、昭和十三年十一月十二日の武漢攻略直後、同盟通信のニュースを主體としてガリ版手刷りの「漢口新聞」が發行され、昭和十四年四月一日第百四十號に至り活版印刷となり、同年六月一日の第百九十二號より「總前衛」と改題され、日々數萬の發行をみる立派な前戰新聞になつたことを忘れてはならない。

この前戰新聞「總前衛」について島場逸雄氏が「新聞日本」紙上に「陣中新聞物語」と題して書かれた一文より、陣中新聞の使命について述べてゐられる箇所を引用しよう。

「前線の將兵が家鄕の安否と共に知らうと求むるものが、事變の全貌と國内事情であることは想像に難くない。大陸各地の戰況如何、銃後の守りは堅く强いであらうか。長期戰に處して一億の團結果して如何、滔々たる時流、世界に狂ふ新秩序建設の步みは如何、これらの問ひに對し、日々本紙は北中南各方面の活潑壓倒的な陸海空の大戰果と、鐵より固き國内の協力體制と世界の逆睹し難

き千變萬化の容貌を傳へ、唯一途、直接間接皇軍の使命達成への邁進を信念として、今日に及んだものである。實に「總前衛」の根幹とせる所は、この尊き皇軍使命を達成すべき士氣の昂揚と鼓舞にあつたといはねばならぬ。

一面においてはまた前線の讀物もなきを思ひ、慰安的なる側面を具へて感情のオアシスたらしめるべく將兵各位の投稿による小說、隨筆、詩、短歌、俳句を掲げ、支那事情を紹介し、更に漫畫漫文笑話をもつて將兵を微笑ませ、又治外法權欄を設けては讀者（將兵）を爆笑せしめることも忘れなかつたところである。鹿逐ふ獵師山を見ずの譬に入らしめざるやう、大勢を知り大局を洞察せしめ、明日に備へて世界の動き故鄉の姿を示し直接間接に大使命達成の自覺と新らしき力を與へるべく激勵と啓蒙と更には慰安をニュースを通じて續けて來たのである。」

前線新聞の將兵に及ぼす影響とその使命の認識において、わが國のそれがドイツのそれに優るとも、劣るものありとは認め難いのであるが、その組織と企劃の計畫的なる點において、ドイツのそれになほ學ぶところ多いであらう。とくに宣傳中隊を編成し、戰爭勃發に當つてすでによくこれを訓練して、前線銃後の通信連絡に、また、英佛聯合軍の得意のデマ一掃に準備し應戰したるドイツ軍

首腦部の組織的計畫性に、われわれはなほ一歩讓るところあるを批判し攝取しなければならない。

わが國においても支那大陸や海洋に活躍する勇士達に前線新聞の他に「戰線文庫」のごとき雜誌も配布されたが、勿論それは內地で編輯印刷されたものであつた。ドイツでは「コペンハーゲナー・イルストリールテ」と呼ぶ立派な前線雜誌が在デンマーク・ドイツ軍隊の兵士雜誌として配布され、國外で働いてゐる部隊を常に祖國へ結びつける重要な役割を果してゐる。

今次大戰の勃發とともに、ドイツ政府が「戰線へ書物を送れ」といふ一大宣傳運動を起したことは、わが國のそれと同樣であるが、ドイツでは戰線における移動式の戰線書籍業が計畫され、一九三九年十二月からすでに盛んに營業しつゝある。

この移動書籍業者は常置九軒の書籍店が支配しており、これらの書店のために十四臺の圖書運搬車が使用されてゐるほどで、戰線の兵士は給料の一部を割いて喜んでこれらの店から購入して新刊書を貪り讀んでゐる。この移動の戰線書籍業はドイツ全線の將兵に非常な歡呼を以て迎へられたのである。

食糧と同樣、精神的糧も前線に大いに必要である。これによつてわれわれは將兵に激勵と慰安と

を與えるのは、決して、食物や演藝隊の美人ばかりでないことが諒解できるばかりでなく、思想戰文化戰の上からみて、戰線の將兵を精神的に思想的により强化し、敎育し、その歷史的使命をより深く認識せしめることも必要であらう。

第五節　ナチスの映畫政策

女優李香蘭の日本劇場へのデビューは、日劇を取卷く大群集によつて、紀元の佳節を冒瀆するあの不祥事件を惹き起させしめ、各方面より喧々囂々たる物議がかもされた。

そして、所謂「識者」といはれる人の多くは、戰時下の娛樂政策そのよろしきを得ざる結果であり、戰時娛樂政策の樹立は焦眉の急なるものあり、といひ、また、他のあるものは觀覽に殺到せる群集の狂態を非難し、國民的規律の養成と訓練こそ急務なり、と說かれたが、この問題を日滿親善の觀點から解剖せんとした所謂「識者」は、僅に野山草吉氏（「サンデー每日」所載日滿親善と李香蘭）たゞ一人であつた。すくなくとも私の眼に同氏の所說のみが印象的に觀ぜられたのである。

「李香蘭の國籍が、日本人であらうと、なからうと、私には問題ではない。とにかく滿洲人くさ

い風格の女がここに現はれると、忽ちそれが帝都の人氣をさらつたといふ事實、それが問題なのである。日滿親善などとは、耳にタコが出來るほど聞かされてゐるが、さうした說教は、大抵說教の範圍に止つて、私達を心の底から、全人格的に親善を感ぜさせるやうなものではない。從來、學生や青年團を、大量にかの地を訪問させるやうな努力は拂はれてゐることではあるが、それは學生や青年を通じて、間接に大衆に影響する効果が期待されるのみで、大衆に直接呼びかけるものではないのだ。李香蘭の出現は、多分偶然であつて、計畫的になされたものではないが、計畫したもの以上に遙かに日滿親善感を、大衆に呼びかけてゐるのである。それはかの女の出演する劇場の雰圍氣が物語つてゐる。

本當のことをいふと、私はあの劇場を取り卷いた大むかうどもの無秩序や、場内の觀衆の齒の浮くやうな狂態振りに對して、かぎりなき憤懣を禁じ得ないのであるが、それはそれとして、日滿の結びつきを、理窟だけのものではなく、情意の上に打ち樹てる方向を、かの女の出現が暗示してくれた點において、大なる興味をかけずにはをられないのだ。ゆゑにもし十人の李香蘭が日本に現はれたら、多分私達の滿洲感は、現在よりもつと別のものになつたに相違なかつた。またもしも、日

本人の「李香蘭」が滿洲國にあつて、滿洲人をして新京の大劇場を、七巻半取り卷くほどの熱狂をさせることが出來るならば、滿洲人の日本に對する考へ方は、今日あるより別のものがあると思はれる。」云々……

宣傳は科學の問題ではなく、本能の問題である、といはれてゐるが、この論者野山氏は「李香蘭」事件の出現によつて、情意の上に打ち樹てる「日滿親善」の暗示を觀取せられたところに、即ち李香蘭を情操に訴へる日滿親善（宣傳）の媒體と考へられたところに、宣傳に關する並々ならぬ關心と鋭い本能を所有されてゐることに敬服するのであるが、少しくドイツの映畫政策の事情に通ぜられるならば、あに「李香蘭」の出現と、その不祥事件の敎訓にまつまでもなく、人氣ある映畫俳優や音樂家や映畫による宣傳攻勢——文化工作——は、すでにドイツによつて實踐され、相當の成果が收められてゐることが分るのである。

われわれは數年前、早くもアメリカの三S政策（Screen. Sex. Sports）によるわが國への攻勢とその被害とを屢々指摘したところであるが、スクリーン（映畫）により、セツクス（性的魅力）により、スポーツによつて、文化攻勢がなりたつことは、直ちに、右の三形式が鬪爭手段たることを

意味するものである。

事實アメリカ映畫の進出による宣傳攻勢、アメリカナイズされた輕佻浮薄な生活樣式の氾濫をもつてする堅實なる國民生活の去勢、アメリカ野球團やスポーツ・マンの進出による親善外交、外人崇拜等の被害と影響とに對しては、われわれはすでに十分苦き體驗を所有してゐるではないか。

わが情報局がアメリカやドイツの映畫政策に多くの敎訓を學びとつて、東亞共榮圏内に絕對的優勢な果敢な文化工作をほどこすべきは餘りにも當然なことではなからうか。

ドイツ啓蒙宣傳大臣ゲツベルスは、一九三八年三月十八日、ドイツ映畫アカデミイの設立を宣言しこれを宣傳大臣の監督のもとに置いた。

そしてこのアカデミイに附屬文化映畫製作所をつくり、同所の任務は、文化映畫に關する一切の問題についての研究をなすべきであり、また指導及び相談を任務として、さらに文化映畫製作者の敎育施設及び實際の映畫製作をなすべきである、と明白に述べてゐる。

このアカデミイ附屬の文化映畫製作所の發行せるパンフレットには、最も重要なる文化映畫素材の組織的一覽表として、世界觀、藝術、科學、哲學、自然科學、技術の六項目が掲載され、その明

確なる研究方針と世界に冠たるその設備に驚かされるのであるが、同パンフレットの中に「文化映畫は國民教育及び確信的世界觀宣傳の貴重な手段であり、これを國民間の理解を深める有効なる手段と認める。」ものである、と述べられてゐるのは、映畫が單に國民教育の機關であるばかりでなく、他國間に融和と親善を深める文化的闘爭の手段たることを確認しつゝあることを意味する。

今次大戰にあたりドイツは敵國、あるひは中立國を味方に引き入れ、親獨的ならしめるために潜行的な經濟工作を行ひ、その上にラヂオと映畫を第一戰部隊とする文化工作を盛に行つたのである。バルカンにおけるドイツの壓倒的な優勢は、先づ經濟工作において始められ、續いてドイツ映畫の積極的な進出が試みられ、各地におけるドイツ映畫の最も多く上映されるに及び、益々その地位は確保されるに至つたのである。

ドイツは多くの傑出せる劇映畫や文化映畫を海外に送り出すと共に、パウラ・ヴェセリーとか、ジエニ・ユーゴといふやうな人氣女優を、好評を博した各國に旅行させて、親獨と人心の收攬に力めてゐる。ドイツが世界に誇る管絃樂團、ベルリン・フイルハーモニートその指揮者、フルトヴェングラーとは、常に英國民の切なる希望によつてしばしばベルリンから出張して行つた。どんな険

惡な空氣の中にあつても、この演奏に對して英國民は、最大の讃辭を送り、拍手を惜しまなかつたのである。この一事は數名の大政治家や外交官の決して解決出來ない國民の空氣を非常に明朗にしたのである。

映畫女優や音樂家達による文化宣傳を活用せるドイツのこの政策を知るならば、李香蘭といはず人氣ある映畫俳優の日滿、若くは日支親善は驚くに足りないが、わが國の官僚的宣傳家が、かゝる人心の機徴をうがつた宣傳媒體に着目しないにも拘らず、野山氏がこの點に注目せられたる敏感さと慧眼には敬意を表してもよいことである。

ドイツの映畫政策を注意深く見ると、二つの重要なる特色に氣着くであらう。

その一つの特長は、イギリス以外の如何なる國民をも刺戟するやうな映畫は一切製作しない樣に注意が拂はれてゐることで、一九四〇年の秋、ドイツがヨーロツパの天下からアメリカ映畫をノツク・アウトした際、アメリカ側では俄然反獨映畫の製作に躍氣になつて乘り出した時でも、ドイツでは反米映畫を計畫しなかつたのみならず、却つてアメリカの感情を融和せしめ、緩和せしめるような一種の謀略的親善映畫が製作されたことである。

またカール・リッターの「祖國に告ぐ」は、ドイツ本國より一足先に交戰中のフランスにおいて公開され、フランス娘の純情を讃美し、フランス軍人の武士道的態度を賞揚したこの映畫はフランスの文化人に非常な好感を以て迎へられ、フランス國民のドイツに對する敵愾心を緩和せしめることにすくなからず役立つたのである。

ドイツ映畫政策の今ひとつの特長は、ノールウエーの謀略戰において、既に紹介したごとく、オスロー駐在の各國外交使臣やノールウエーの高官連を招いて、そのサロンで「ポーランド進擊」の物凄い實寫を上映したやうに、デンマークやオランダやベルギー、その他バルカン諸國において、或はイベリヤ半島に「ポーランド進擊」「砲火の洗禮」「ノールウエーの獨英戰」「白蘭進擊」「パリー進擊」等を各地の進擊と占領の前後に上映せしめて、獨軍の猛威を誇示し、その威力の前に慴伏させるといふ戰法をとつてゐることである。

最近日本はじめイタリー、ハンガリ、ルーマニア等の樞軸國において上映された「勝利の歷史」（原名「西方の勝利」）と題する大戰記錄映畫は、これら樞軸國に先だち、一九四一年の二月廿六日いち早くトルコに送られて上映さた。

フォン・パーペン獨逸大使は二月二十六日ノールウエーで行はれたと同樣に、トルコ政府の要人達を一夕招待して試寫會を催したのであつた。この日は皮肉にもイギリスからイーデン外相が特使としてアンカラに到着した日で、トルコは英國側につくべきか、ドイツ側につくべきか、その去就に迷ひつゝある重大な時期である。その場合この映畫は「ドイツの近代兵器」の物凄い威力と、ドイツの確固たる意志を遺憾なく表示し、換言すればトルコに對するドイツの無言の脅迫狀としての役割を務めた譯でこの映畫のためばかりでは勿論ないが、トルコはドイツの無言の壓力によつて次第に軟化しつゝあるのも同じこの戰法といはねばならない。

第三の特長は、藝術的、技術的に優秀なる映畫をつくらなければ、以上の二つのいづれの政策も成功的なる効果をあげ得ずとなし、極めて眞劍に優れたる映畫の製作に從事してゐることである。

ゲッベルスは、ドイツ映畫アカデミーの開設式に臨んで「われわれは如何なる領域に於ても、他國の優越に堪えることは出來ない。天賦の才能をわれわれは持ち、組織的な條件は作られた。金錢的手段も準備が出來て、われわれにはたゞこの可能性を利用することが殘されてゐるだけである。われわれを映畫の領域に於て世界的存在たらしめることを妨げるものはない筈である。勿論、無用

の長物は振り落さなくてはならぬ。かうすれば、無能な連中によつて、眞實の能力者が道を塞がれるやうなこともなくならう。

今や藝術家は前進あるのみである。……云々」と、述べ、激勵してゐるが、ゲッベルスが「金錢的手段も準備が出來た」といつてゐる點に、特に留意する必要がある。

何故ならドイツの映畫政策の紹介者の多くは、ドイツにあつては映畫化される前にその臺本が檢閲される「事前檢閲」制度や、毎年輸入すべき劇映畫や、國內に於ける配給量の割當制限令や、ドイツ映畫の製作はドイツ國內に於いて製作され、且つその構想、脚本、音樂がドイツ人の創作になり、製作者、演出者及びその協力者の全部がドイツ人でなければならぬと、非アリア人の排斥をなしてゐることを紹介されるが、最も重大なドイツ映畫の經濟的支柱をなしてゐるところの映畫信用銀行について語る人はいたつて少くないが、獨立映畫製作者に對して、製作者の負擔額三〇％に對して、七〇％の補助を與へることを原則としてゐる、映畫資金の融通を行ふこの機關の設立は、ドイツの政府當局がいかに映畫に重大なる關心を有してゐるかを如實に語るのみならず、事實かゝる國家的支援によつてこそ藝術の前進はなし得るのである。一九四〇年ドイツ政府の映畫事業に對す

る補助金は九千五百萬マークといふ莫大な援助がなされてゐるのに、わが國の映畫事業への政府補助金は、本年度の豫算計上額において僅に十萬圓に過ぎないといふ一事から見ても、彼我の映畫事業に對する見解の差違がどれほど違つてゐるかを想像することが出來るであらう。

コリン・ロス博士の「新しきアジア」を始め、わが國においては屢々日本紹介映畫を外國人をして製作せしめてゐるが、かゝる映畫の製作に當つて、日本人が徹底的に指導し監督すべきは當然であつて、日本の紹介を外國人にゆだねるが如きは、日本文化人の恥辱といはねばならない。

なほ、文化工作と宣傳は、對手國に對し、政治工作や軍事行動が行はれた後に、はじめてなされてゐることが多く、また、文化宣傳は、武力戰の後に追隨すべきものと考へられ勝ちの傾向があるが、經濟工作にしても、文化工作にしても、對手國と戰火を交へた場合に勝利を欲するならば、必ず、これらの工作は武力戰に先行して既に戰はれてゐなければならない。いな、經濟戰と文化戰の先行によつてのみ勝利の道は開かれ得るのである。

だから、ドイツ當局は、機會ある毎に、あらゆる國に、ドイツ映畫の上映を必死となつて工作しつゝある。

最近、東亞共榮圏内――とくに佛印、泰方面に漸くにして「日本ニュース」が進出しだし、蔣介石に拍手を送つた觀客に挑戰しつゝありと聞くが、わが共榮圏内に「日本ニュース」や日本映畫が上映されてゐない國が一國でもあるならば、政治、外交、經濟の諸工作をほどこして、上映を拒絶する國における上映權を獲得すべきであり、日本映畫上映のために鬪ふ熱意がなければならない。

映畫上映は、かくて一つの立派なる鬪爭の手段であり、ラヂオや新聞と同樣に、映畫政策とその鬪爭（海外における上映）は、一國の興廢消長を現はす最も敏感なるバロメーターである。從つて映畫やラヂオや新聞等の文化鬪爭の意義とその偉力とを正當に評價し活用し得ない國は、將來結局劣敗者の地位に顚落を餘儀なくされるであらう。

第六節　ドイツの文化鬪爭と技術

支那派遣軍報道部鷹尾正氏の「演奏進擊」といふ文章の中に、次の樣な一節がある。

「皇軍が漢口を占領した時、佛租界當局は境界を嚴重に封鎖して皇軍の通過を拒んだ。折から市中を行進した軍樂隊が、物々しいバリケードの傍に步を止めて「フランス國歌」をはじめフランス

曲目をいくつか演奏した。附近からは見る間にフランス居留民が集つて來て軒並の窓といふ窓には熱狂するフランス人の顏が溢れてゐた。次の機會に再び軍樂隊がそこを通過した時、先方から來て欣然とバリケードを斥けた。かくして和氣靄々の裡に、同租界は皇軍に開放されるところとなり、その先頭を切つて彼らは堂々と第一歩を印していつたのである。

久しくレコード一枚にすら餓えてゐたフランス人達が狂喜したことは想像以上であつた。前線に戰ふ者の心は何を求め、軍樂隊の進擊はこれをいかにして滿足させてゐるか、また音樂が他國人の心をとらへるのにいかに役立つものであるか等、以上のいくつかの例によつて十分理解されることであらう。……云々」

私はこのフランス租界の軍樂隊の進擊なる一節を讀んで、すぐにドイツ軍のオスロに上陸の翌日（四月十日）に、オスロ市民が人心の動搖により騷然たる混亂の狀を呈してゐる市中を、威風堂々音樂隊を行進せしめ、忽ちにしてその混亂と動搖を沈靜せしめ、ために戒嚴令を必要としないほどなごやかな平隱な空氣が流れたといふ狀景を、なるほどと生々しい眞實を以て腦裡に描き出したのであるが、わが皇軍も軍樂隊の演奏進擊によつて同じ成果を得てゐるではないか。これについて同

氏は、同じ文章の末尾に左のやうな所感と結論を述べてゐる。
「これを見て隊員は樂器の、否兵器の重さを忘れ疲れた足を早めるのである。
しかり、彼らの進撃は單なる慰問ではない。
友軍愛に滿ち溢れた協力である。戰捷のために統合發揮さるべき戰力の一部である。
隊員の到着を鶴首する演奏場を一瞥する時ギッシリ蝟集した聽衆は單に皇軍將兵のみではない。
和平建國に雄々しく起ち上つた綏靖軍の將兵や、みのりの秋に滿ち足りて安居し農業する農民の老幼男女が、長江の波打際までつゞいてゐるではないか。
そこに演奏進撃の建設的な新使命がある。やがて描き出されるであらう親善風景が彼らの使命の尊さを遺憾なく證明するであらう」
ドイツ人憎しと敵意を抱いたオスロ市民、獨軍の電撃的上陸に人心のたゞならぬ動搖を來したオスロ市民を沈靜せしめたと同樣に、敵愾心にたけり立つてゐたフランス人、文化の敵であると憎惡の眼を以て迎えんとしたパリ人をして、ドイツ人語るに足ると考へ直させたのは、パリ入城の演出者たる宣傳大臣ゲッベルスの功績であり、人心の機微をつかんだその演出であつたのだ。

パリ城外で幾千の戰車は一旦休憩して奇麗に磨かれ、軍服は戰塵のまみれぬ新しい服と着換えられ、散髮をし、チックをつけて、まづ戰車隊員が颯爽と乘り込んだ。次に頰を櫻色に紅らめた美少年兵がにこ〳〵して入城した。

そのあとから莊重な古典樂を奏しつゝ樂團が續いた。このすばらしいパリー入城の演出と、その後、ヒットラー總統が軍服を脫ぎ棄て、藝術家や學者を從へて、平服を着用してパリーを訪問したといふ、いかにも文化を理解し尊重し、かつ敗戰國フランスに哀悼と敬意を表するといふゼスチュアが、パリ人をしてドイツ人語るに足り、協力するに足るといふ氣分を起させる印象を與へたことに、どんなに與つて力あつたであらうか！

映畫といひ、音樂といひ、文化的教養といひ、その他一切の文化技術がいかに戰爭に役立つか、一分間一千四百四十コマ廻轉するフィルムが一分間一千數百發發射する機關銃と同樣に攻擊と建設に重大なる威力を發揮するか、また重い樂器を抱く樂人が想像以上の演奏行進の戰果にその重さを忘れて驚いたかを諸賢が知られるならば、私はもはや文化技術をもつてする總力戰の重要さを喋々と論議するの必要もないかも知れない。しかしわが國の現狀においては、文化的技術を以てする鬪

爭、とくにその技術上の問題の如きは、全然未開の境地に屬するので、今少しこの問題に立ち入つて論ずることゝしよう。

山下奉文中將はドイツ國内視察の所感において、次の如く述べてゐられる。

「ヴエルダンをはじめ、北フランスからベルギーかけて、いたるところにフランス人がたてた前大戰の記念碑があるが、それがドイツ軍の手でそのまゝ大事に保存されてゐることをみても、ドイツ軍には前大戰の復讐といつたけち臭い考へはなく、もつと別な立場から新しい歐洲の建設といふ大きな精神が動いてゐる。

ブラツセルの近郊ではドイツ兵がベルギー人の民家に分宿してゐるのをみたが、普通なら戰勝の軍隊だからその家の中で最も上等の部屋を占領するところだが、ドイツ兵は屋根裏へ寢たり、地下室へもぐり込んだりして、これでよいのだと、一般民衆に迷惑をかけないやり方で我慢してゐる。ルアンの戰鬪では街が火災に包まれ、或る由緒ある教會が燒けかゝつた時には、ドイツ軍は戰鬪力の一部を割いて、特に工兵隊を派遣し、周圍の建物を壞して、その文化的遺産の安全をはかつた。

またナポレオンの王子の遺骸を、ウイーンのステファン教會からパリに還し、ナポレオン親子が枕を並べて地下に眠れるやうにしてやつた。

ヒツトラー總統のやり方といふものは一つの新しい精神の誕生を意味するものであると思ふ。」云々。（朝日新聞昭和十六年六月十八日付）

ナポレオンの遺骸のうつしたことはドイツの對外宣傳寫眞雜誌「ジグナール」などによつて、既に紹介されたことであるが、かゝる文化的教養を以てする文化工作の技術がいかに大なる宣撫と宣傳の役割を果すかは說明する必要もないほどである。

戰時における經濟工作（即ち經濟鬪爭における技術）においても、相手國の國民心理を巧妙に捉へた、いはば戰爭指導心理並びに宣傳心理學的な要領を得たものでなければ、勞多くして効果は少いであらう。ここにドイツの經濟工作が占領地デンマークに於いて美事に成功せる最もよき實例を示してみよう。

ドイツ軍が、怒濤の如くデンマークに殺到した翌日、獨藏相フンクは、早くもデンマークの首都

に乘り込んで、國民政府の首惱と會見した。そして

「ドイツは戰略上、己むなくデンマークに電擊作戰を決行した。しかし、ドイツは飽くまでデンマークと親善關係を保つて行きたい。そこで、今後デンマークがドイツに對して望む所があれば、ドイツは出來得る限り、その要望を叶へてやる考へだ」と、切り出した。

この意外な提案にデンマークの首惱部も、いさゝか呆氣にとられたが

「それでは此際、貴國の機械類を出來るだけ我方に輸出してもらひたい」と、要望した。

フンクは即座にこれを引うけて

「然し、デンマークには差當りそれを輸入する經濟的餘裕が無いであらう。若し、必要なればドイツからクレヂツトを設定してやつてもよい。」と、極めて率直に、二千萬マークのクレヂツト設定を約した。

云ふまでもなく、デンマーク首腦部は、大いにこれに滿足した。それを見たフンクは改めて

「ついては、二千萬マークのクレヂツト設定と交換に、これに相當する貴國の紙幣を豫めお渡し願へまいか――」と、要求した。

デンマークの首腦者は、勿論、快よくこれを承諾した。

フンク藏相は、その紙幣束を受けとるや、直にデンマークの首都コペンハーゲンを發つて歸國の途についた。

しかし、胸中深く秘策を藏してゐたフンクは、そのまゝ本國に歸らなかつた。

その頃、デンマークに進駐したドイツ軍はデンマークの各都邑をはじめ、要所々々を殆んどその手中におさめてゐた。

一路、本國に飛ぶと見えたフンクは、忽然と機首を轉じて、デンマークの首腦部から受けとつたデンマークの紙幣を悉くその主計官に渡した。そして

「出來るだけ速かに、デンマークの農產物及び家畜類を買ひつけるよう――」と、命ずると共に

「農民から物を買ふ場合、決して安く値切つてはならない。寧ろ、時價よりも高く、例へば麥一石三十圓のものならば三十五圓で買ひ、また、牛一頭三百圓のものならば三百五十圓を支拂ふべし――」との意味と注意をつけ加へた。

このフンクの意圖は、直に、デンマークに進駐してゐる全軍の主計官に傳へられた。

ドイツ軍の主計官は、時を移さず全面的な買付けを始めた。

デンマーク農民達は驚き、且つ喜んだ。ドイツ軍進駐前より、一般農産物がにはかに高値となつた上に、代金は手の切れる様な紙幣——しかもデンマーク紙幣——で支拂はれた。有頂天になつた農民達は、ドイツ軍のために氣前よく、その農産物を手放した。

勿論農民達は自國政府首腦部と、獨藏相フンクとの間に、どんなカラクリがあつたか知る由もなかつたし、そんなことは直接關係のないことでもあつた。

かくてドイツ軍は、デンマークの農民達から多量な農産物や家畜と共に、また多大な感謝と歡迎をうけ取ることに成功したのである。

これが戰時における經濟鬪爭であり、宣撫戰であり、人心收攬とドイツ軍の威德を示す宣傳戰でなくてなんであらうか!

しかるに、わが對滿、對支戰時經濟工作は、このドイツの經濟戰と比較してどんな方向に進んでゐるであらうか?

わが國にも、叉別の違つた戰爭經濟の觀點から、フンク藏相のこの經濟工作に着目せる聰明な

る經濟學者が、必ずしもないわけではない。

即ち「戰ふ日本經濟」の著書西谷氏は「ドイツ戰爭經濟の建設は斷じて百%の資源と外貨によつて達成されたものではないのである。經濟は戰爭を決定すると同時に戰爭は經濟を決定する。ポーランド進駐の戰車隊の後を追つて紙幣を滿載したトラックが走り、オランダの砲煙いまだ薄れぬうちに經濟建設計畫の足を踏み出す獨逸の總力戰體系は、東亞經濟圈建設計畫への有力なひとつの示唆となるものであらう。」（同書二三九頁）と、書いてゐる。

西谷氏が經濟建設への有力な示唆としてうけとられるところのものを、われわれプロパガンディストは、戰爭指導心理學ないし宣傳心理學的觀點から、この問題に大きな一つの示唆と暗示とを投げ與へられるのである。

軍服を着用せず、喇叭を吹くでもなく、一臺の戰車を持たずとも、政治、經濟、文化のあらゆる技術と敎養との總力戰的活用によつて、ある程度有力なる武器として役立たせることも不可能では決してない。

アメリカが砲火を交へてゐないと雖ども、ルーズベルトが參戰してゐないと斷言するものは、もは

や今日においては誰れ一人ないであらう。今現に砲火を交へてゐるか、否かは大した問題ではなく既に世界が二つの陣營に對立し、二つの相對立する國家群に分れてゐる以上、われわれは出來得る限り最小の犧牲において、最大の効果をもつて敵を屈服せしめることが至上命令である筈である。

ルーズヴェルト大統領は「戰爭以外のあらゆる方法」を以て援英援蔣を行ふを言明しており、又に飽らずして全體主義を擊破せんとするのが、ルーズヴェルト政策の根底をなしてゐる。しかも、何時如何にして武力を行使するか、それとも武力を行使せずして、それ以外の手段によるかはルーズヴェルトにとつて、結局一つの戰術上の問題にしか過ぎないのである。

かくて、われわれにとつても、殘されたる問題は、自然科學、社會科學の兩技術を最高度に磨き上げることであり、强力なる戰爭技術として十二分に動員し、活用すること以外にない。あらゆる技術家の總力戰的參戰と戰場への進軍、これこそがわれわれに殘された唯一の捷利への道である。

企畫院第七部第一課長森川覺三氏は「科學、技術新體制の理念」（朝日新聞十六年五月二十八日）と題する警世的なる所論において、科學技術の總力戰的動員と育成、助長の問題を力說されてゐるが、文化科學、精神科學と技術の問題においても、この所論は當然そのままあてはまることである。

森川氏は、同論中のある一節において、次のごとく述べてゐる。

「今後技術の輸入が政治的情勢により、相手國のために著るしく制約せらるゝことを考慮に加へる時、所謂日本的性格を有する我國獨自の高度の科學と技術が創造され、育成さるゝまでの期間において、科學技術の著るしき開きを生じ、ひいては國防上の危險に直面するやうなことはないであらうか。今回の歐洲戰によつて明示された如く、今後の戰爭は精神力に加ふるにあらゆる點において、はるかに敵國を凌駕する極めて高度の科學技術の發達によつて、はじめて壓倒的勝利が確保されることは明かである。

かく考へ來る時、我らは科學と技術の發達進歩のためにあらゆる方策を講ずるだけで、後は自然に盛り上つて來るべき獨自の科學技術の進歩を靜かに待つてゐるといふだけでは、いかにも不安を感じるのである。盛り上つて來るべき科學と技術の進歩を何等かの方策によつて、國家の總力を用ひ無理にも引き上ぐる手段はないものであらうか。もちろんこれは不自然な、人爲的な、極めて無理な方法ではあらう。しかしさうでもせねば、今後の國際情勢に處して安心が得られないとせば、又このやうな方法によつて少しでも科學技術の發達の速度を早め得るものとせば、少々の無理は承

知の上で斷行すべきであると信ずる。」

………中………略………

「今回創設を見るべき科學技術行政中樞機關だけなりとも、何とかして實効の擧げ得るものでなければならぬと念願する次第であつて、これを具現するにいかなる方法が最善であるかは、官界練達の士を集めて論議、決定されるであらうが、我等としても一つの試案を持つてゐる。

責任の歸趨を明らかにするとともに、個人の創意を存分に活用することによつてのみ、行政の能率化を望み得ることはすでにナチス・ドイツで試驗濟みである。國家非常の際である。會議々々で責任を分配させ、非能率的な、その日その日を送ることは最早清算されてもいゝはずである。會議制度で行くため一人の責任者の決定した場合に比して、逆にいゝ結果が生れ得るならば、また考へやうもあらうが、多くの場合逆の結果を生じてゐることは識者の等しく認むるところである。

また十分なる專門的知識と體驗を持たないものが、公の地位を占めてはならぬ。特に科學技術行政の中樞機關である以上、各々一流の專門家である體驗者でなければ、その職責を全うし得ないはずである。

我國一流の專門家であり、體驗家である人々の當る以上、その創意を十分に振はすためには相當なる權限を與ふべきである。また一流の人物を集める以上は、その職務と待遇は別個に判斷さるべきである。……云々」

あまりに長きに過ぎた引用ではあるが、森川氏の科學、技術に對するすぐれたる所論は、直ちにわれわれの文化・思想・宣傳・謀略・鬪爭における專門的技術と特殊なる才能を必要とされる部門の擴充强化のために、直ちに問題となるべき卓越せる所見である。

わが國においてもロベルト・ライ博士やトッド博士がゐないわけではない。フンク藏相やゲッベルス宣傳相やダレー農相のやうな豊かな才腕と創意を有する人材が必ずしも絶無ではない。

しかも森川氏のいはれる如く、わが國においては、文化の跛行狀態は依然として是正されず、その研究成果は一瞥も與へられず、かつまた研究促進の連絡が中樞機關によつて綜合的に企劃されず、さらに野に遺賢なからしめんとする人材登用の道も依然として開放されてゐない舊體制の現狀こそが、ゲッベルスもトッドも出づべくして出で得ない狀態に置かれてゐることを考ふべきである。

第七節　宣傳中隊（P・K）の活躍

ドイツ軍の宣傳分野における、成功の鍵として、大きな役割を占めるものは、この宣傳中隊（Propaganda kompanie）の編成であつた。

この宣傳中隊の創案者はハンツ・フオン・ヴエデル大佐で、彼は今、宣傳中隊のベルリン司令官となつて活躍してゐる。

このP・K司令官の支配下には、二百名の記者と四百名の寫眞、漫畫、映畫、戰爭美術、ラヂオ解說の技術家が網羅されてゐる。

そしてポーランドの進攻に七名、ノールウエイ作戰には十六名の同中隊員の戰死者を出してゐるノールウエイ作戰には五十名の記者と百名のカメラマンが配屬されたのであつたが、この十六名の戰死者といふ比較的多い數字から見て、銃劍をとりつゝ活躍するP・K隊員がいかに勇敢であり、危險な活動をしてゐるかゞ解るであらう。

ノールウエイ進攻に配屬され、軍艦ブリユツヘル艦上に、丁度ハーン大尉がカメラを動かしてゐ

た折も折、海岸砲臺の彈丸が命中して忽ちブリュッヘルは沈沒したので、大尉はフイルムを濡らさぬように岸に泳ぎついたが、彼は直ぐにノールウエイ軍に捕えられたので、止むなく光線をフイルムに入れて敵中にこれを委ねることを避けたといふ一エピソードもある。

かくの如く、P・K中隊員は、軍務と情報の二つの職能を持つをり、ノールウエイを攻略する軍艦の上にも、セダン要塞に迫るタンクの中にも、危險極まる挺身隊パラシユート部隊の中にも、英本土を襲ふ爆撃機の上にも、英艦を狙ふ潛水艦にも、常に起居して、カメラや無線やペンを縱橫に驅使しつゝ作戰に必要なる情報と宣傳資料を蒐集記錄してゐるのである。

「事實は最上の宣傳なり」といはれてゐるが、P・Kのサイン附の戰線報告は、あらゆる戰線から陸續として、第一線の生々しい實感の溢れてゐる、そしてまた、英國側の老獪なる逆宣傳を餘すところなく封じ、さらに前線銃後の精神交流の武器として非常なる役割を果したのであつた。

宣傳中隊の報道と營業的新聞通信員のそれと本質的に異るところのものは、彼等宣傳中隊員は、これまでの戰地通信員のやうに、一新聞社または出版社の雇人ではなく、從つて雇主のためにのみ働いたりすることもなければ、雇主から報酬をうけることもない。故に、軍作戰の必要に應じ、讀

者大衆にこびるところなく配置することが出來る。

だから、P・K隊員の報道は、營業的記者のジャーナリスツクな幻想や美辭麗句によつてでつち上げられたニュースではなく、それこそ戰爭そのものの中から生れた生々しい體驗であり、讀者の好奇心やスリル心理を滿足させるために筆をとるような眞似はやめて、遙かに高い任務をもつやうになつた。即ち、宣傳中隊の任務は、銃後の國民の一人一人に、彼等の息子や兄弟が、いかに偉大で困難な鬪ひをつゞけてゐるかを直接具體的に知らせることによつて、戰線と銃後との間を血と精神を以て統一することにあり全國民の精神的共鳴を獲得して國家總力戰を完遂するといふ一大任務を背負はされてゐるのである。

しかも、その上にイギリス流の「作られたニュース」やデマ宣傳を一時にして吹き飛ばす重大なる役割を兼ね備え、今次大戰以來この宣傳中隊の赫々たる功績は、戰史の上に不滅の金字塔を打ち建てるであらうし宣傳戰術の上に革命的な影響を與えるであらう。

P・Kのサイン附のニュースが、ドイツ國民と全世界からどうして絶對的な信賴をかち得たかを語る次の一篇の事實を紹介しよう。

一九四〇年九月上旬ドイツ軍隊は、ポーランド國境を越えて進撃してゐた。すると、忽ち英佛側の例のデマ宣傳が火蓋を切つて落された。それは「ドイツ軍隊の慘忍ぶり」といふ見出しで頻々と報道され出した。

ドイツ軍がまだチエンストーを占領してもゐないのに、早くもこの市におけるドイツ軍隊の蠻行や殘虐が世界中の新聞雜誌に書き立てられた。つまりドイツ軍隊は極めて恥づべきやり方で、すべてのポーランド人が神聖視してゐるヘレ山のマドンナを破壞してしまつたといふのである。

すると、忽ちにして、ドイツ側からこれを反駁するニユースが現はれた。英佛側のデマ・ニースがこの時ほど素早く反駁されたことは異例であるし、また、この時ほど美事に粉碎されたのも異例であつた。

それといふのもP・K隊が戰鬪を行ひつゝある自軍とともに、チエンストーに入るや否や、いまだ方々の街で市街戰が猛烈に行はれてゐる最中、すでに完全な姿のヘレ山のマドンナを寫眞に撮しとる一方、ヘレ山の僧院の住職とのインタービユーをものにしてゐた。

その記事には、同住職の談話として、ヘレ山の僧院とマドンナの神像とは忠實なるドイツ兵によ

つて、何よりも眞先に保證されたことに對する感謝と感激が語られてゐた。
かくて「ドイツ軍隊の蠻行や殘虐行爲」が英佛側の新聞面を騷がしてゐる最中、それと同じ日、ベルリンに特派されてゐる中立國の通信員達は、この動かすべからざる反駁資材を手に入れてゐたのである。
このほかにP・K中隊員によつて、多數の敵を捕虜にしたり、ポーランド廻廊地帶の一番乘りをしたりした多大なる戰蹟も枚擧のいとまないほどである。
P・K前線アパートに集められた報道は、一度ベルリンのP・K司令部に送られ、宣傳省で編輯されて、國内國外のそれ〴〵の機關に配給されてゐる。ドイツのP・Kの出身を調査してみると、さすがに新聞記者が壓倒的に多いのは爭はれない。そしてP・Kの大半は軍籍にある敏腕記者と寫眞班員であることは、彼等の專門からみて容易に肯かれるところであるが、カメラ・マンのごときはアマチュア・カメラ・マンを宣傳省の統制下に置き、その所屬團體長に、その技能、所有カメラ年齡、適性等を申告させ、これを宣傳省に豫め登錄せしめて置き、必要に應じこれを召集し、各兵科にこれを配屬せしめて訓練し、戰ふ報道の戰士として活躍せしめたのである。

ドイツが宣傳中隊を編成したのは、第三者的な通信社を使ふ不利を知り、また、英佛のデマを粉碎する最善の武器として、これを撰んだといふばかりでなく、かゝる決死的報道によつてのみ國民を奮起せしめ、精神的協力をかちとり、祖國とその運命をともにする決意を抱かせるものだからである。そして、また、宣傳戰においては單に形式の嶄新さにおいて一歩先んずることなくば、その勝利を確保することが出來ぬといふ重要なる秘訣を心得てゐるためである。

私は他の章において「前線新聞」について論じたが、わが國は「前線新聞」の活用においても、宣傳中隊とは違ふが、かの宣撫班の創設においても、必ずしもドイツの後塵を拜してゐるばかりではなく、むしろ一歩を先んじてゐることもあるが、その計畫の粗雜なる點において、また嶄新なる企劃を採用する大膽さと、先見の明と勇斷に缺くるところ多いのは極めて遺憾なことである。

宣傳中隊や第五部隊の特殊な任務と才能を必要とする人材は、さう速急に養成できるものではなく、またこれこそ適材適所に配置されなければ所期の効果は擧げることは出來ない。

この點について苦い體驗を有せられる伊地知進大尉の警告と提言に耳を傾けよう。

同氏は「新らしき宣撫工作」（文藝春秋社「現地報告」二月號）と題する一文において、次の如く結

論され、積極的な提案を示されてゐる。

「戰爭の擴大と占領區範圍が擴大するにつれて、宣撫班も增大されなければならぬ。

八木沼班長はそこでその人を求めるに、國內の若き學徒及靑年に期待したのである。

宣撫班は、すぐに千名を突破する人員となつたが、初め滿鐵社員によつてその根幹が出來上つてゐたので、爾後の增員の場合も、勢力の對立、嫉視反目などのごたごたを見ることなく、どちらかと言へば無難によく動いてゐたものである。

これが中支になると異つた形を現はしてゐた。まつたく寄せ集めと言へるもので、滿洲の縣參事官崩れあり、暴力團的人物あり、左翼轉向群あり、右翼自任者ありて、その混沌さは中支に來てみて驚いた程である。

人の貧困――どこへ行つてもそればかりを聞かされてゐた。然し私は、それは人の貧困ばかりでなく計畫がなかつた爲めだと思つてゐる。あれだけの兵を動員し得て、どうして宣撫班を動員し得ないのであらう。私は平時から宣撫班動員計畫が、軍若しくは政府の手にあるべきだと思ふ。それは金と暇を食ふものではなく、極く簡單に出來るものである。

試案を示してみやう。

三府四十三縣を五十縣と見て、一縣百人を動員すれば五千人は出來るのである。而も宣撫的人物を日頃より物色吟味しておき、その人に仕事、居所を、動員同様に調査しておき、その書類を必要な箇所において保管する。

人物は、考古學者あり、農村指導者あり、技師あり、醫學者醫師あり、教師あり、社會運動家あり、宗教家あり、その他學者あり、語學者もありで、これ等の性名を調査しておき、必要により召集すればそれだけで結構なわけである。

國家總動員の今日、誰だつて召集を覺悟すべきであり、宣撫班などもかゝる動員部隊により結集するのは最良の手段である。

が、こゝで問題なのは、この人々の團結の問題であつて、これは日頃から必要により、臨時召集して訓練しておくの要がある。若し出來得べくば、これを東亞班・南洋班・西比利班・赤道班といつた假稱によつて分類しておけば尚更結構なことである。」

伊地知氏のこの試案は、その題名の示すごとく宣撫工作のそれで、宣傳中隊についてではなく、

同氏は宣撫班を宣傳班が兼任すべきか、どうかは一利一害あるとされ、むしろ反對の口吻を漏されてゐるが、宣撫班にしろ、宣傳中隊にしろ、また、第五部隊にしろ、かゝる特殊な任務を帯びるものは、平時からの訓練と養成が絶對に必要であり、しかも、特殊な才能と技術の習練によつて始めて闘爭的武器として役立ち得るのであるから、總力戰における闘爭の一手段として當然準備されなければならぬ組織である。

第八節　ナチス第五部隊の研究

讀者諸君は、前章においてポーランドからフランス敗戰に至るまでのドイツの宣傳・謀略戰を各國別に一瞥され、ナチス宣傳戰と謀略戰による赫々たる戰果に驚異の眼を見張られたことゝ思ふが、對敵攪亂作戰としての「かくの如き成功は、長き準備と用意周到なる研究によつて生まれたる「第五部隊」の組織的な活躍に負ふところ多いことはすでに觀取されたところであらう。

今次大戰におけるドイツの宣傳・謀略戰を語らんとするならば、その花形役者たる「第五部隊」組織の研究を忘れることは出來ない。

一、スペイン戰爭の第五部隊

「第五部隊」なる名稱を創り出したのは、フランコ將軍と同軍參謀のモラ將軍であるといはれてゐる。

マドリッド攻略に出かける日、モラ將軍が幕僚を前にして、何あに、マドリッドを陷すのには四軍團もつれてゆけば結構であらう、と云つたのに、不安を感じた一將校が「閣下、それだけで本當に充分でせうか」と訊ねたところ、モラ將軍は「いや、もう一軍團（つまり第五部隊）がすでにマドリッドに這入つてゐるから大丈夫だ。」と、答へたさうだ。

モラ將軍の第五部隊は、ナチスの心理學者達の指導のもとに注意深く組織され、フランコ將軍が實際軍事行動をとる以前に、この心理學的武器はすでに行動に移つてゐた。

ドイツはこのスペイン戰爭を實驗の舞臺として使ひ、スペイン人の生きた身體と心理について、この新しい武器（第五部隊）を實驗することが出來たのは、今次大戰に應用するに極めて有利なことであつた。

スペインにおける第五部隊の活躍は、一九三六年五月マドリッドに於て始められた。

それはある日、何百人といふ婦人が、恐怖のために氣狂の如くになつて、政府の官舍を圍んで頑張つてゐた。

彼女等は、尼僧がマドリッドの子供達に毒の入つた菓子を配り歩き、そのため市の病院は小さな犧牲者で滿員になつたといふ、巧みに放たれたデマによつて恐怖のために押し寄せたのである。

勿論、フランコ軍の支持者（第五部隊）は、これを無政府主義者の仕業であると主張した。マドリッドの支配者（共産軍）は、そのため安寧秩序を保つために非常な努力を拂つたのである。この混亂を望んだものは、實は第五部隊にあつたのである。

また、教會が俄に焰に包まれるやうなことが起つた。放火が頻々と行はれたが、放火犯人は誰にも分らなかつた。しかし、注意深く見ると、それは混亂を增大するため時刻を定め、受持をきめて計畫的に行はれてゐる樣子であつた。

一九三六年の八月、モラ將軍の四ケ軍團が侵入する直前のマドリッドは實に騷亂を極めており、夕方突如屋根の天邊から銃聲がなり出したり、また、一方街の隅々のやうな所に幽靈自動車が現はれて、機關銃をぶつ放しては、また忽ち姿を消した。

このやうにマドリッド市民の神經を攪亂してゐたものは、勿論モラ將軍の第五部隊であつたのである。

二、第五部隊の歷史

しかし、第五部隊戰はスペインに於て始まつたものでなく、ペロンポンネス戰役（前世紀四三一—前四〇四年の三〇年間）といはれるアテネとスパルタが戰つたギリシヤ戰爭に始まり、更に革命戰爭よりナポレオン戰爭に至る間に英國において驅使されたが、ナポレオンはそれ以前にもオランダ、スペイン、イタリー、ドイツにおいても不平不滿の徒をかり集め軍隊進擊の前にこれに備え、またデマによる攪亂をなした。ヒットラーはこのナポレオン戰術をさらに近代化して縱橫にこれを使つたものといはれてゐるが、ヒットラーとナポレオンと相似る點は非常に多く、ヒットラーが、ナポレオンから學び、また、學ばんとしつゝあるものも單に「第五部隊」戰術のみならず、對英攻擊その他非常に多いと思はれる。

三、第五部隊の活躍

ドイツが、第五部隊をスペイン戰爭における實驗を適用して始めて使つたのは、オーストリーに

おいてであつた。

オーストリーの第五部隊長インクワルト博士は、侵入するドイツ軍に砲火を交へずしてオーストリーを明け渡すことに成功した。

チエツコスロヴアキアにおいては、ズデーテン人とスロヴアキア人の多くが第五列の役割を果したし、ポーランドでは、國内の少數のドイツ民族が、ポーランドの軍事組織を粉碎して、橋梁や戰略要地や工場、發電所などを占據した。

ノールウエーでは、ドイツ艦隊の到着以前に、假裝部隊がオスロー、ベルゲン、ナルヴイクを占據してゐたし、ルクセンブルグでは、矢張りドイツ正規軍が到着しないうちにドイツの「旅行者」達によつて機關銃をもつて國内を殆んど完全に占據してゐたのである。

四、ナチス第五部隊の戰術

第五部隊のかゝる成功は、一體いかなる戰術によつてなされたのであらうか、

ドイツが最初に着眼せるものは、その國における獨逸語を話す小數民族、或は小數黨である。

第五部隊はその國に民住するドイツ語民族の小數黨の中から選拔され育成されて、全國民の破壞

をなし遂げることに成功したのである。ここに「言語」における政治性を今少し重大なる問題として取扱はねばならぬのを痛感するのである。

ヒットラーはこのため「在外ドイツ人は、ドイツの支配下にあるべきで、又諜報の場合に見る如くドイツの利益に奉仕する義務がある。」と叫び、極めて對外宣傳を重要視し、宣傳省第七部「外國」において、海外移住者並びドイツ語民族への宣傳と連絡統制にあたらしめたが、第五部隊の本部は、別に某所に置かれ、第五部隊養成のためエス・エス隊や秘密警察の優秀なる人物がナチス・スパイ學校におくられたが、この學校は情報部長として前大戰にも活躍したニコライ大佐が校長となつてその指導の任にあたつており、現在ウイルヘルムストラッセのあるビルの最上階の五室を借り切つて嚴格な規律のもとに第五部隊の養成、訓練が行はれてゐると傳えられてゐる。

第五部隊の戰術の巧妙さは、先づその國に民住するドイツ系民族の組織であつたことで、外國の市民でも外人スパイでもなかつたところにある。

勿論、戰爭前、第五部隊によつて手に入れておいた軍人、巡査、郵便屋、鐵道員の制服に似せてつくらせた變裝によつて、落下傘や秘密な方法で多數新しい第五部隊を潛入せしめたのであるが、

ともかく、第五部隊の戰略の成功は、金錢のために雇はれて國を賣るといふ人間の弱點に賴るのではなく、むしろその反對に高邁な理想的精神に重點を置いたことにあるのである。

海外におけるドイツ語民族は、ヒットラーの熱烈なる宣傳と長年に亘る强力なる援助によつて、自分達は第五部隊の一員をなしてゐるのだといふ深い理解を有し、常に第五部隊戰術に參加せんとする熱烈なる要求を抱くに至つたので、今日着々とその成果を現はしてゐるのである。

ドイツ人はどこの國に行つても、ナチスの計畫を促進する積極的行動をとるやうに訓練されてゐる。

外國におけるドイツ人の住民としての行爲は、英國人などとは違つて全力を盡してこの土地に融和する。英國人は土着民からかけ離れた世界に住み、故國に何が起つてゐるかも知らず、たゞ新聞の到着を待つて始めて知るといふ始末である。

しかるにドイツは、その土地の政治的社會的問題に通じ、その地の重要な人物に通ずる人物を海外に多數植えつけることに成功した。

その上に、第五部隊本部は、これらの海外居住者たる第五列の報告によつて、問題が起るといつ

でも鍵となる主要な人物について研究し、世界のあらゆる國に於て、將來いつかは利用出來るやうな人物の傳記を記錄するカード式索引を準備してゐたのである。

そのカードには、月並な人物紹介ではなく、その人の私的な趣味であるとか、熱狂とか、弱點とかについて詳細な調査が行はれてゐて、もしもその人が問題になつた場合、彼をうまく買收し、或は利用し得るやうな事件とか事實とかが詳細に記入されてゐるものであつた。

五、平時における第五部隊の役割

第五部隊の軍事的役割とその活躍については、前章において述べたのであるが、平時におけるその機能は、主として宣傳を行ふことであるが、この宣傳は必ずしも親獨的乃至親ナチ的なものとは限らない。この活動は各國の商業的、工業的、政治的な活動と同時に、各國の士氣をも報告し、ベルリンにおいてこの報告を綜合すれば、各國の國民生活の完全な縮圖が直ちに描き出されるやうになつてゐるのである。ここでは更に彼等の平時と戰爭準備のための巧みな暗躍について述べよう。

一九三九年の二月十四日のロンドン・タイムス紙上にロッテルダムよりの通信が載せられてゐるが、これによれば多數のドイツ銀行家や實業家が過去二週間內に、オランダを訪ねたと報告されて

ゐる。
彼等銀行家はオランダにおいてどんな仕事をしたかといえば、「我々（ドイツ）は平常な取引を欲してゐるのに、聯合國（英佛）の戰意によつて、この取引が阻害されることはまことに遺憾である。」といふ意味を、手を替へ品を替へて納得せしめることであつた。
その結果オランダ實業家は、ドイツは戰爭をこれ以上の騷ぎにならんことを欲してゐるのだ、といふ風に感じたのである。
かうして平和的雰圍氣を創り出しておいて突如オランダへ獨軍は殺到したのである。
この獨軍の侵入に驚いたオランダ政府は、國內のナチス黨を檢擧し、その指導者や相當多數の彼等の仲間を投獄したのであるが、獨軍の飛行機に信號を示し、敵のタンクの防害物を取り除いたりして協力する一般の民衆に對しては、なんとも處罰の仕樣がなかつたほどであつた。

六、戰爭準備のための活躍

またこんな手も打たれてゐる。
ユーゴースラヴィアは、ダニューブのある地域內に居住する外人に、土地の賣買契約を破棄せし

めるような特別命令を出したのであるが、それはそこに居住するドイツ人がドイツ當局から供給された金で、その重要な水路の近くに戰略上大切な土地を買ひ上げてゐたためであつた。

この新しい土地の所有者は、その土地にダニューブの水路を利用して空と水とを結ぶ戰略上効果ある土地を占有するために道路を設置した。それ故ドイツはダニューブ河に沿つて、その石油を運ぶのになんの障害もない道路を確保したわけであり、また、戰爭が彼等を要求するやうなときにはすぐさまこれらの移民は、彼等自身の權利を行使して小數黨となつて起ち上ることも出來るのである。

一九四一年五月二日付の外電によれば、イギリスはアメリカに對して、米洲全土における第五部隊の活動を根絶するため、米政府に對して斷乎たる處置をとるべき次の二項目の實施を要求した。

一、アメリカにおける樞軸國全資金の凍結

一、西半球におけるドイツの第五部隊に對し活動資金を供提せる疑ひある會社のブラック・リストの作製

右の事實から推察し得るやうに第五部隊の活動資金は、ドイツの海外商社を通じて提供されてゐ

ることが推察し得るのである。

イギリス當局は、ドイツの英本土上陸にあたり、また、ドイツ機の空襲が頻繁になれば、當然第五部隊や落下傘部隊の執拗なる後方攪亂が行はれるものと見て、イギリスはナチ第五部隊や諜報網の檢擧に躍氣になつてゐる。一九四〇年の七月八日のイギリス內務當局の發表したところによると同年の六月中に「ナチス第五部隊」及び、これと密かに聯絡をとり、スパイの疑ひある者として捕へられた者が、全英に五百名に達し、敵性外國人で、七月七日現在までに抑留された者二萬人に上つてゐる、といふのであるから驚くべき數字といはねばならぬ。

ドイツ軍がギリシヤを制壓したその日、即ち一九四一年五月一日イラク政府によつて行はれた排英クーデターが勃發したが、これは勿論アラビア民族意識の昂隆であるとはいへ、このクーデターがナチス第五部隊の指導のもとに用心深く計畫されたものであることは疑ふ餘地もない。

イラク・クーデターの立役者はガイラニ首相であるが、この影に活躍した覆面の第五部隊指導者は、ゲオルグ・フオン・ヘンテイツヒといふ近東におけるナチスのこの機關の支配者である。

ゲオルグ・フオン・ヘンテイツヒは、英國のシークレツト・サービスのローレンス大佐と同じや

うに變裝してアラビヤ諸國酋長を訪問したり、しばしば英國の戰線を突破してアフガニスタン首都カブールにまで入り込み、アフガニスタンを反英に引込もうとの運動を極秘にしてゐた。

その後フオン・ヘンテイツヒは多年ドイツ外務省の近東局の首班としてアラビヤ人世界の情報を入手し、汎アラビヤ運動反英戰線を計畫して來た。

イラクがしばしばドイツとの外交關係を惡化させた當時も、彼のみは自由にイラクを旅行してゐた事實からみて、彼の所在を保護する多數の友人があつたことを示すもので、彼の潜勢力の一半を知ることが出來る。かくして近東における反英熱――親獨傾向も、彼等第五部隊の活躍に負ふところ大なるものがあると見ねばならない。

七、第五部隊に提供する活躍舞臺

第五部隊の戰術は、かくの如くドイツ語を話す海外居住者を組織することの他に、第二に着眼したのは、敵國内における政治的對立と國論不統一を微妙な心理學的分析によつて利用したことであつた。第五部隊の組織者にとつて國内不統一による思想的混亂と戰爭の歷史的重大性を認識しない國民の不平不滿は、實に肥沃なる地盤を提供するものであつた。

この間にあつて第五部隊の目につけたものは、二つの大きな感情、即ち、戰爭によつてすべてを失はんとする人々の心の中に湧き出てくる平和に對する人間の本能的要求と、社會の不公平に對する不平と、この不公平を克服せんとする理想的熱情の二つの感情であり、この人間本來の强烈なる理想は、第五部隊の無限の地盤であり、原料であつた。

第五部隊の組織者が、國內對立を激成するために政黨の分裂を利用して、その統一と團結を破壞せんとするのは當然であるが、高邁なる理想を有する、即ち、常に平和を愛し、合理的なる社會の建設に憧れる立派なかつ有力なる人物をして、ナチスの世界觀に共鳴せしめることによつて、即ちヒトラーの理想の支持者たらしめることによつて、敵國の戰意を喪失せしめる日和見的な輿論をつくらしめることにあつた。

第五部隊は、オーストリーの場合の如く、その國の內部からオーストリーを崩壞させ、奪取せしめる力を持つナチス黨、または親獨政黨がない時は、不用意のまゝに放置され國內の思想的統一に缺けてゐるこの對立を激成せしめ、さらにナチス世界觀の偉大さに共鳴せしめて、彼等をドイツに對し、ヒツトラーに對してまづ精神的に敗北せしめることであつた。

かゝる心理學的分析とその應用を以てする攪亂政策には、ナチスはその技術において實にナチス的徹底さを見せてゐる。かうして國民的統一を破壞して行く第五部隊の仕事は、ドイツの攻略作戰に先行してどし〳〵と行はれ、また、海外宣傳機關によつて或は海外商社の手を通じて第五列の活躍は常に十分援護されてゐた。

國民が戰爭目的を十分に認識して戰鬪的精神に燃え上らないといふ消極的な態度と、どちらつかずの日和見主義は、總力戰といふ現實に直面してゐる時には、消極主義と日和見主義は國民の步調を亂す以外のなにものでもないばかりか、むしろ敵國に力を貸す第五列的存在であつて、國民の步調と統一の上に致命的な打擊を與へるであらう。

要するに、第五部隊におけるヒットラー戰略の眼目は、敵をその內部から破壞にみちびくことであり、彼等（敵國民）自身を使つて彼等（敵國）を征服することにあつたといふことが出來るであらう。

八、第五部隊の立脚する二つの原理

しかし、ヒツトラーの第五部隊組織は、ドイツにあつていかにして結成され、また、いかなる原

理に立つてこれが成功したのであらうか？

この點に關し「ナチス電撃の恐怖」の著者伊藤鉄太郎氏は、次の如く書いてゐる。

「ナチス第五列は、二つの革命的な原理の上に立脚してゐる。第一はドイツ民族の世界的な優秀性と國籍のいかんを問はずドイツ民族の一身同體性を主張するナチスの民族主義である。この原理によつて、ドイツ人はもはや私的な個人でなく、ドイツ民族の有機的な一員として、ドイツ帝國の命令に絶對的に從ひ、國家の政府に奉仕しなければならない。ナチズムの眼からみれば、ドイツは國境で終るものでなく、ドイツ語が話される處にはすべてドイツ國が存立することになる。「外國在住ドイツ人」と呼ばれる海外に於けるドイツ國民は、ボオレを指導者とするナチ黨の海外組織のなかに包含されてゐる。ボオレはまた外務省の書記長である。これらの海外在住ドイツ人は、カモフラーヂした横の連繋を通じて、ボオレの組織と緊密な關係を維持してゐる。

第二の原理は、世界の社會的、經濟的、政治的な新體制の創造を目指したナチスの世界革命である。これはドイツ民族の世界制覇を目標とすると同時に、一切の全體主義的な政治體制の協力を要望するものである。」と。

第五部隊の理念の根本的要素は、たしかにドイツ民族の一身同體性を主張するナチスの民族主義を地盤として組織化され、他の一つは世界制覇を確信せしめるナチス世界觀の優秀性に對する熱烈なる信念に立脚してゐる。

この二つの原理こそ、彼等に行動を起さしめる根本的な動機である。強き力は國民の統一と協同體觀念からのみ求められ、その反對に、弱さは國民の不統一から招來するものであることを教えてゐるのである。

ドイツの今日までの赫々たる勝利は、必ずしも優秀なる武器にのみあるのではなく、むしろこれらの理念から導き出される不動の精神にあることは、ここに繰返し述べる必要はなからう。

第四章　ナチス思想戰と日本思想戰

第一節　戰爭理論と思想戰術の革命

「獨逸の戰爭論」(國防科學研究會譯編)　原名 Handbuch der Neuezeitlichen Wehrwissenschaafen に從へば、思想戰とは、國家が、世界の輿論の前に自己の名聞を立て、敵國の名聞を貶し、自國の國防力を保持し、强化し、敵國の抵抗意志を減殺せしむるために、思想的武器をもつて行ふところの戰鬪をいふ。(同書二九六頁)といふ風に定義されてゐる。

そして、思想戰は、時間的には、必らずしも武力戰と一致するものでなく、思想戰はしばしば武力戰を惹起さしめ、且つ武器が旣に收められた後にも繼續されるものであることが說明されてゐるのであるが、私の見解を以てすれば、ヒツトラー戰略における思想戰・謀略戰の特徵は、前大戰の聯合國の宣傳戰とは違つて、武器によつて戰ふ以前に、戰爭はすでに獨軍の勝利に歸してしまつて

ゐる、といふやうな事實が至るところに存在してゐたことで、武力による勝利が第五部隊の先行によつて、それ以前に確保されてゐたといふことは、宣傳が第五部隊の手によつて架空なものとしてではなく、深く地上に根を下した物質的權力として組織化されたことである。

前大戰における宣傳戰の驍將ノースクリフは、ドイツの第一次大戰の敗戰の原因は、ドイツが戰爭において宣傳を「放棄」したことにのみあるのではない。ドイツの武力の弱化が初めて宣傳を有効ならしめる前提となつたのであり、從つて、武力の弱化と敗色が戰爭敗北の最大の要因となつてゐる。と、告白したさうであるが、今次大戰におけるヒットラーの宣傳と詭計は、むしろ武力を決定的ならしめる最大の要因を形成してゐるかの如く、私には見られるのである。

本書の緒論において紹介して置いた石丸藤太氏の所說も、大場彌平閣下の批評も、また、從來なされた宣傳に關する殆んど一切の所論の結論は、結局宣傳は如何に重要視しても一種の補助手段であつて、戰爭において決定的なものは、武力戰であるといふことを、繰返し論證せんとしてゐるに過ぎない。

しかし、次に掲げる數氏のヒットラー戰略觀は、從來の宣傳觀に多少の修正と反駁を要求してゐ

ないであらうか？

Ｈ・ラーヴイン、Ｊ・ヴエクスラ共著「軍事宣傳とアメリカ」（小松孝彰氏譯「アメリカと參戰」）には、次のごとき一節が見られる。

「一九四〇年の三月後になつて、ヒートラー總統が豫て長く滿を持して放たなかつた例の電擊戰に愈々取り掛り、ノルウエーを鎧袖一觸で粉碎し、更にデンマルク、オランダ、ベルギーなども一嘗めにした時、果せる哉、例の「第五列」なるものが驟然として起つた。さうして敵の防備を全く支離滅裂にして了つた。

敵の士氣を沮喪させる最も價値ある手段として宣傳を觀てゐるヒツトラーの概念と堅く結びついてゐるのは、敵を混亂、迷妄に陷れるといふ技法だ、聯合國側の宣傳といへば必ず出來る限り多くの支持者、後援者を第三國間に集めるといふのが眼目とされてゐるが、ヒツトラー總統一流の宣傳振りはそれとは譯が違ふ。彼には後援も支持も不必要だ。たゞ敵の力にひゞを入れ、敵の力を分割し、かくしてその結果生ずるところの混亂狀態を巧みに彼れ自身の麾下の恐ろしく完全に組織されてゐる精銳に利用せしめるといふのが、ヒツトラー總統の手口である。」と。（同書四九頁）

しかし、私はヒツトラーが後援も支持も不必要だ、と思つてゐるとは考へないが、その他の觀察には大いに穿つてゐるところがあると見てゐる。

「沈默の戰士」の著者小松清氏は、同書において次の所感を述べてゐる。

「ヒツトラーは、ミスチツクであるが、あれでゐて仲々秀れた心理分析家(プシコログ)でもあると僕はみてゐる。

在來の血をながさないで獲ち得た彼の勝利は、ほとんど（心理の戰ひ）における勝利であつた。こちらのジヤーナリストはこの戰法を（神經の戰ひ(ラ・ゲール・ド・ネール)）とよんでゐるが、僕は（心理の戰ひ）と名づけるべきものだと思ふ。

（ドイツはフランスと戰つてゐるのではない。ドイツはちつとも國境を侵してゐないではないか。フランスはポーランドに對して與へた約束から、仕方なく腰をあげなければならなくなつたのだ。心から進んで熱情をもつて起ちあがつた戰ひではない。厭々ながら、戰線にでて行くのだ。フランスの大衆一般は確かにさう思ひこんでゐるに違ひない。そこで、若しドイツが、ひと先づポーランドを制覇してから（それは最早時日の問題にすぎない）フランスにむかつて、吾々は貴方々に何の恨みも

ない。お互ひに血を流すやうな愚を止さう。ここらで話し合うぢやないか、と平和解決の提議をすれば、フランスはどういふだらう。軍部や一部の强硬派の政治家は反對するとしても、少くとも、大衆はその提議に心をひかれるに違ひない、したがつて輿論も大いに動搖するだらう。……」

これがヒトラー一黨の（心理的な計算）であり、且つ作戰なんだ。」（同書六九頁）

ヒツトラーがフランスに平和提議をなさず、フランダース電擊戰の壓倒的勝利とパリーの無血占領の後に休戰條約を締結したことは、人も知る通りであるが、小松氏のいふごとくヒツトラーがすぐれた心理分析家であり、この巧緻正確を極めた心理分析の上に立つて作戰が錬られてゐることは疑問の餘地がない。

勿論小松氏の所謂「心理戰爭」は、ドイツ軍の戰略中における「心理的な計算」をいつておられるのであり、個々の戰術（技術）について言及されてゐるのではないが、ドイツ軍は、その作戰中に「心理的な計算」を考慮の中に置いてゐるばかりでなく、戰鬪技術（戰術）の中にジモナイド博士の「戰爭心理學」やブラウ中將の「戰爭指導心理學」が巧みに活用され、實戰に應用されてゐるのである。所謂パンゼの神經作戰は「戰爭心理學」を戰場に應用したものである。

バンゼの神經（或は心理）作戰といはれてゐるのは、從來までの思想宣傳戰の手段として行はれた捏造された宣傳ビラ等の代りに、眞實の恐怖心を敵陣にバラ撒くといふ方法を使ひ「音響攻擊」とでも言ふべき新戰術が採用されて、銃劍の先端に强烈な音を發する特殊裝置を施したり、炸裂よりは高音を目的とした手榴彈をもつて敵中へ突擊したりする。そしてその猛烈な强音によつて敵のドギモを拔くといふやうな方法や、また猛獸の咆哮にも似た大音響を擴聲機で敵陣へ送り、或は高音爆彈と物凄い高聲裝置を有する急降下爆擊機を用ひ、敵の心理を攪亂するといつたことも行はれた

アメリカ陸軍の實驗によれば、低空襲擊とか、敵戰車の猛攻とか、または大砲の音響等のやうな强烈な刺戟を受けると、兵士達は神經を害して喪心狀態に陷り、甚だしきは啞や氣狂になる者が時々出るとのことである。軍醫達はこれを「激戰痴呆症」と呼んでゐるが、種々研究の結果、結局强烈な音響刺戟によつて神經に異常を來すのはヴイタミンＢ１の缺乏によるものとビッツバーク大學のカーン博士によつて證明されたが、强烈なる音響に對して特に敏感な西洋人には、音響による神經攪亂は相當の効果がある樣である。ともかく、かくの如き音響効果と共に視覺攻擊とでもいはれる夜間攻擊の戰車に幽靈のやうな不氣味な燐光（曳光彈）を放射せしめて、敵の神經の攪亂、心理の錯

亂を狙はうとする等心理學的研究より考案された新戰術は數限りもなく應用された。兵隊をつけずパラシュートだけを降下する如きは明らかにその極端な一例であると見られる。

しかし、かゝる個々の新形式は別として、ヒットラー戰略に、小松氏のいふごとき「心理的な計算」が十分算入されてゐることを見落してはならないばかりでなく、ヒットラーの正確なる心理分析は精神科の醫師が、精神患者の病源を美事に分析し、解體して行く樣に、英佛兩國の精神的、心理的紐帶の切斷に、また兩國の國內統一の戰線の解體に、否、あらゆる政治組織、國民組織の解體に成功したのである。

朝日新聞中村特派員の三月八日ロンドン發の一文は、ヒットラーの所謂「解體戰術」について一層明白なる見解を述べてゐるのは、特に注目に値するものがある。

「大戰開始以來ドイツは驚異と讃嘆の眼をみはらせずにはゐないほどの電擊的陸戰に勝利を收め今日ではバルカンの無血制霸を續々完了せんとし、すでにブルガリアに進出、ユーゴースラヴィアもまた樞軸陣營に接近せんとしてゐる。

この一連のヒットラー總統の作戰に一貫するものを抽出するとすれば、それは「解體」の一語に

盡きよう。實にヒツトラー總統こそ、レーニンのいはゆる「戰爭における最も確實な作戰は、戰はざるに先だち、先づ敵の士氣を沮喪せしめることである」の完全な遂行者であり、ヒツトラー總統は敵の士氣のみならず、政治、經濟、軍事、文化各分野にわたる「解體」に周到な工作を必ず用意するのがわかる。」

と、ヒツトラー戰略の眞髓であり、その作戰を一貫するところのものは、所謂「解體」戰術にありと喝破されてゐるが、いひ得て餘りある「解體」戰術とは、まさに至言といはざるを得ない。しかし、同氏が、いみじくも名づけられた所謂「解體戰術」がいかなる準備と基礎によつて成り立つてゐるかを、遺憾ながら論破されてはゐない。だが、たとへ、同氏の所説が、その點に言及されてゐないとしても、ヒツトラー戰略を所謂「解體戰」なり、と命名された同氏の解剖力の鋭さに敬意を拂ふに、私は決して吝さかならざるものである。

ヒツトラー戰略が巧妙なる心理分折によつて、敵を分裂せしめ、それに依つて生ずる混亂を利用して戰はざるにすでに解體と崩壞をみちびき、最後の武力の一撃によつて、その勝利を決定的ならしめるの筆法を撰んだことが理解されるのである。

しかし、いはゆる「解體」戰の赫々たる戰果は、從來の單純なる宣傳戰術のみでは到底覺束ないヒツトラー戰略の成功、解體戰術の勝利は、宣傳を單なる思想戰とせず、策略や詭計を用ひて、戰闘を支援し、完成し、且つ成果を大ならしめる準備をなす第五列の活躍により、その緊密一體の連絡によつて、私の謂ふところの「謀略」戰を敢行したためである。

ユーゴースラヴイアは、幸か不幸か「無血の勝利」の凱歌を擧げることは出來なかつたが、一九四一年の四月六日戰端を開いて進擊を開始せるドイツ軍は、十日午後早くも何らの抵抗も受けず、堂々とザグレブに入城したと傳へられてゐるが、ユーゴー軍の主力をなすクロアチヤ人に武器を捨てさしめたのも、クロアチヤ國獨立を宣言せしめ、全市民が旗をふつて獨軍を歡迎せしめたのも、ベルグラート政府からマチエツク副首相やパウエリツチ氏を寢返らせしめたのも、强力なる武力を背景として暗中飛躍せる第五列の功績に負ふところ想像以上のものがあるであらう。

なほ、四月十六日發のベルリンよりの同盟通信は、「僅か九名で首都占領」と題して――ベルグラード陷落の祕話を――左記の如く報じてゐる。

ドイツ軍のベルグラード入城は、十三日午後六時半より行はれたが、これに先立つて僅か九名の

ドイツ兵が既に十二日夕刻ベルグラード市内に潜入、ドイツ公使館の屋上高くハーゲンクロイツ旗を打立てた事實がベルグラード駐在ドイツ武官トウサント大佐によつて十六日はじめて明かにされた。すなはちグリンゲンベルグ中尉以下九名の親衞隊員は、ドナウ河上流方面よりユーゴー軍の陣地を突破して敵陣深く潜入、遂に十二日午後五時徒歩をもつてベルグラード市内ドイツ公使館に達した、公使館にはフオンヘーレン公使引揚げ以來フアイネ參事官、トウサント武官以下少數のものが居殘つてゐたが、この思ひもかけぬドイツ兵の出現に歡喜雀躍、直ちに全員屋上に馳上り、ハーゲンクロイツの大國旗を打立てた。

ついでグリンゲンベルグ中尉は公使館より二臺の自動車を借受けて直ちに急スピードで市内目貫の大通りを驅廻つた。市中には折柄の混亂に乘じて掠奪者達が横行してゐたがこの天から降つて湧いたやうなドイツ兵の出現にみんなびつくり仰天して逃げ隱れてしまひ市内の秩序は急速に回復された。それからこの九名のドイツ兵は、ユーゴー軍工兵隊の大部隊と遭遇したが、僅か數發の彈丸を浴びただけでこれを見事に降參させ折柄迫る夕闇のためこれらの兵數が向ふにわからないのを幸ひ、これを全部捕虜にし僅か二名の兵をもつて監視させることができた。そのうちベルグラード市

長がやつてきて市を明け渡すことを通告、こゝにベルグラードは僅か九名のドイツ兵の手に歸して仕舞つたのであつた。

この驚くべき報道(ニュース)の眞僞は別としても、僅かな兵士をもつてベルグラードへ殆んど無血に近い入城をせしめる雰圍氣のあつた事實を疑ふことは出來ない。しからば、九名のドイツ兵にベルグラードを開け渡す様な心理狀態を一體誰が用意せしめたのであるか？私はこれが必ずしも自然發生的なまた水鳥の羽音に驚く式の恐怖と臆病からのみと簡單に片づけられないと思はれる。

「フランス敗れたり」の著者アンドレ・モーロアは、第五列のこの邊の消息について興味ある報告をしてゐる。即ち、

「第五列の流言蜚語が機械化兵團の進む地ならしをしたのだ。ドイツのパラシュート兵が相當の役割をしたことは確かであるが、彼等に對する恐怖といふものが彼等の効果を十倍にもした。」云々……と。

私が先にヒットラーの「宣傳」は、武力の弱化につけ込んでなされたノースクリフ卿の亞流をくむものでないといつたのは、ヒットラーのそれは戰はざるに先だちて行ふ精神と組織への一擊であ

り、軍隊の進擊を容易ならしめる地ならしであり、その武力の効果を十倍ならしめるものを狙つてゐるところに大なる相違があるからである。

私がこれをあへて單に「宣傳」といはず「謀略」といふのは、逆說的に聞えるかも知れないが、從來の宣傳戰が「思想的武器」をもつて闘爭する手段であるのに對して、謀略（第五列）戰は「武裝せる思想」をもつて闘爭する手段であり、かつある場合は、武器をとつて闘ふ思想戰でもあるからである。

だが、この宣傳戰術——技術——の變化は、單に宣傳觀並びに宣傳理論のみの變化によつて齎らされたものではなく、戰爭觀並びに戰爭理論の革命が、宣傳理論とその戰術をも一變せしめたのである。

中世より第一次大戰を經て、今次歐洲大戰までの戰爭形態の變遷を、凡そ四つの異つた時期に大別することが出來るであらう。

中世の戰爭——は封建領主の專斷によつて行はれ、軍務に就くことを條件として俸祿を得てゐる武士のみによつて行はれた單一武力戰であつた。

近世（ナポレオン）の戰爭――は一般市民や農民を國民軍に編成し訓練して戰爭に參加せしめたところの國民的武力戰であつた。

近代（第一次歐洲大戰）の戰爭――は國民全體が戰爭に參加してゐるのみでなく、國家機能の全體が戰爭の各要素となつた全體戰であつた。

現代（第二次大戰）の戰爭――第一次歐洲大戰は既に單一武力戰的形態を捨てゝ國家の總力をこれに動員する全體戰であり、一種の國家總力戰に移つてゐたとはいへ、未だ充分、經濟、政治、思想、文化の活動と鬪爭そのものが戰爭であると自覺されたところの國家總力戰ではなく、國家總動員の總力戰として行はれた戰爭は、第二次歐洲大戰であつた。

この戰爭形態の變遷は、同時に戰爭理論の變遷であり、戰爭に對するかゝる認識と手段の變化は宣傳理論とその戰術（技術）の上に大なる變化と影響を與ふるのは寧ろ當然といふべきであらう。

私は「總力戰」時代における宣傳戰は、單なる補助手段でないと既に斷言したが、私の混迷せる理論に、より明快なる解決を促し、さらにこれを體系的なる戰爭理論――總力戰戰略――にまで發展せしめるべく、最も大きな示唆を與えて下さつたのは、最近刊行されたる寺田彌吉氏の「總力戰

教書」と題する著書であつた。

總力戰の觀點に從へば、國家機構の凡てが、攻擊と防禦の對象となり、又手段ともなるのである寺田氏はこの點に關し、實に明快なる論述をされてゐる。

「通常總力はそれ等の力の綜合力と解される。勿論このことは間違つてはゐない。而して、この場合は、それ等の力の運營形態が問題となる。換言すれば、國家機構のことがその焦點となるのであり、即ち總力戰と云ふものは國家の全機構が有するそれぞれの力を以て戰ふといふことであり、又全機構の有する力が攻擊と防禦の對象となることでもある。之を戰爭體制の上で云へば、その全機構が有機的なる綜合を有することであつて、例へば、政治と統率が一元化されなくてはならぬと云ふのも、その點に觸れた問題であり、之を以て戰ふと云ふ場合も、武力行爲と政治力の發動が車の兩輪の如くに相補ひ相扶けつゝ進むことを意味する。故に總力戰の總力とは、何よりも第一に「國家全機構の力」として表はれるのである。」（同書九六頁）

「先づ第一に國家總力戰と云ふのは、自國から云へば國家の機構を眞に統合し、その間に寸分の離間をも生ぜしめないやうにし、如何なる機構に對しても、相手國から乘ぜしめることのないやう

にする。（之を總力戰體制若しくは國防國家體制と云ふ）と同時に、相手國に對しては、その機構相互間に離間工作を企て、以てその國の總力を弱體化し屈服せしめることを指す。大體原則としては、自國と相手國間に於いては武力には武力を、經濟力には經濟力を、宣傳力には宣傳力等を宛てるのである。」（同書一〇〇頁）

「だから總力戰と云ふことになれば、國家の諸機構が武力機構を支援してゐると云ふ如き時代錯誤の見解を拋棄して、最も單純化された全機構若しくは、總力機構たらしめると同時に、凡ゆる機構を擧げて攻擊と防禦の體制を取らしめ、且つその機構の有する力を最高度に行使しなければならぬのである」（同書一〇三頁）

「武力手段を以てする總力戰略の發動に代ゆるに、他の諸手段を以てし、その消耗から來る大影響を避けんとするのみである。而も他の諸手段を行使すると云つても、實は武力の背後からの支援がなくては、容易に行はれるものではない。總力戰略に於いては多くの場合に、武力が一手段になると云つても、それは武力を輕く見るなどといふことゝは正反對であり、その備へに最も力を注ぎ總力手段の全面に及び、未發動武力の威力を巧みに行使せんとすることを意味する。」（同書四一四頁）

以上、いさゝか長きに及ぶ引用ではあるが、陸軍省情報部鈴木庫三氏監修の「世界再建と國防國家」並びに寺田氏の「總力戰教書」さらに多田督知氏の「日本戰爭學」の以上の三書ほどに、的確に總力戰的觀點より、武力戰とその他の關係を明確に把握せる戰爭理論は、私の知れる限りにおいて他に少いと思はれる。

クラウゼウイッツは「戰爭（武力）は他の手段を以てする政治の繼續なり」と斷じたが、これは政治の優位を既に語つており、總力戰論の最初の提唱者ルーデンドルフ將軍は、その逆に「戰爭は他の手段を以てする對外政治なり」と喝破されたが、これはむしろ政治は戰爭（武力）に奉仕すべきを强要するものである。

だが、現代の高度化した總力戰は、その戰略においても、クラウゼウイッツ對ルーデンドルフの立場を超越すべきである。寺田氏の言葉を籍りるならば「擲くともそれは武力手段といふものゝ廣範圍なる活用を巧みに行ふといふ點に於いてクラウゼウイッツを超越し、總力の積極的なる攻防の手段化といふ點に於いてルーデンドルフを超えてゐる。」のである。

戰爭形態とその理論の變遷は、宣傳鬪爭の認識と理論の上にも必然的に大きな影響を與えずには

おかない。

私は屢々「宣傳戰をも含む謀略戰」なる至極曖昧なる言葉を使つて來たが、ここに私は私の所謂「謀略戰」なるものゝ定義を一層明白にしておく必要に迫られてゐるやうである。

寺田氏は、思想戰を左の五つのカテゴリーに分類され

一、精　神　戰　　四、學　術　戰
二、宣　傳　戰　　五、教　化　戰
三、文　化　戰

政治戰を左の三つに分類され

一、內　政　戰　　三、法　律　戰
二、外　交　戰

經濟戰を左の十に分類され

一、資　源・戰　　三、商　業　戰
二、食　糧　戰　　四、產　業　戰

五、軍需戰　八、交通戰
六、勞力戰　九、通信戰
七、金融戰

その他に、厚生戰を加へられ、保健戰、衣食住戰、醫藥戰、人口戰、種族戰、三S戰、以上の六つに分類されて、詳論されてゐるが、私が謀略と稱するは、武力以外のあらゆる手段を以て敵を攻撃せんとする戰術の總稱をいふのであり、しかもこの攻撃は殆んど敵にその手段を祕匿されて行はれる處の秘密戰である、といひ得るであらう。

由來、文化戰にせよ、經濟戰にせよ、外交戰にせよ、武力戰以外の他の鬪爭手段は、武力戰によ る決定的な勝利を、單に支援する補助手段としか理解されてゐず、從つて、文化戰そのものとしてまた、經濟戰そのものとして攻擊する鬪爭手段とは認識されてゐなかつたが、總力戰的體制による戰爭形態の變革は、それらの理解と戰略に重大なる革命を要求しつゝあるのである。

私のこの問題に對する研究は、一種の端緒的なるテーゼを提出してゐるに過ぎないが、本書がこの種の論議を一層追究せしめるいさゝかの機緣をつくるならば望外の欣びとするところである。

第二節　マキアヴエリズムとヒツトライズム

私は本書のある箇所において、謀略戰術を主流となすヒツトラー戰略は、マキアベリズムが近代化され、ナチス化されて復活されてゐると、述べたのであるが、ヒツトラーは一九三三年の始めに當時ダンチヒ上院議員だつたヘルマン・ラウシュニング氏に向つて、次のやうなことを言つたといはれてゐる。

「元來戰爭とは狡猾、欺瞞、迷想、攻撃、奇襲でなくて、そも何であるか。一體戰爭の目的といふものは何處にあるか。敵を降伏させるまでの話ぢやないか。だから若し戰爭以外の手段を以て、もつと徹底的に、もつと安價に敵を屈服させることが出來るとすれば、私は何を苦しんで戰爭といふやうな手段を用ひよう。」と。

彼ヒツトラーの謂はゆる他の手段とは、無論、宣傳と謀略を指していつてゐるのである。

ヒツトラーの「謀略」と「宣傳」戰術における最も具體的な、かつ、最も端的な現はれは、かの「第五列」であり、ナチスの第五列こそ、ヒツトラーの宣傳・謀略に關する理念の最も實踐的に應

用されたるその組織化でなければならない。

ドイツがここ數年間において行つたラインランド、オーストリー、ズデーテン、チェッコ、メーメルの所謂「無血の勝利」の蔭に第五列の盛んなる活躍のあつたこと、大戰が勃發してからも、その得意な電撃戰の背後にはポーランドにおける水も洩らさぬスパイ網の活躍、ノールウエーにおけるキツスリング氏一派の第五列の暗躍、ユーゴーにおけるマチエツク副首相やパヴエリツチ氏一派の第五列的謀略の成功等に、これを見るが如くに、ヒツトラーは、强力尨大なる戰爭手段、即ち、軍備を背景となしながら、「戰爭以外の手段を以て、もつと徹底的に、もつと安價に敵を屈服する」ことに、今や着々成功しつゝある。それは狡猾であり、欺瞞であり、迷想であり、反間苦肉の策であつたかも知れない。そして從來の武士道氣質から見れば卑怯な振舞であるとのそしりをまぬかれないかも知れぬ。しかし、戰爭は、あくまで勝つことにあり、この目的はいかなる手段をも正當化すものである。即ち、勝てば官軍、負ければ賊軍となるのである。

オーストリーの合併にしても、當時の國際的環境――英佛の武力干渉が豫期されるにも拘らず、ドイツの軍備も自信ある完成の域に達してゐない。一九三三年當時――においては、獨墺合併は承

認されずと見たヒットラーは、一壞國の内部から壞國を奪取する一計畫——即ち、ナチスの謀略と反亂、第五列の暗躍によるほかなしとして、インクワルト博士をその參謀となし、一九三八年リスト將軍の率いるドイツ軍に砲火を交へずしてオーストリーを明け渡すことに成功したのである。

ヒツトラー獨特のこれら一列の謀略戰を見る時、そして堪え難きヴエルサイユ條約の桎梏に呻吟する困難なドイツの現狀と國際的環境を回顧するならば、マキアヴエルリが、個人主義的世界觀と政治的分裂によつて哀れむべき奴隷の境地に立つ祖國イタリアの窮狀を顧み、イタリアから諸外國の勢力を驅逐して、古代ローマのごとき統一國家として再起せしめんとする念願を抱いたのと、ヒツトラーのそれと實に近似してゐるではないか。

マキアヴエルリも古典的精神の復興によつて中世期の神學的偏見をすてさせ、人間を赤裸々の姿において觀察し、その營む政治生活場裡の行動をあくまでも平靜な、あるときには冷酷とまで感じられる態度でこれを描き取つた。

マキアヴエルリは、この冷靜な觀察による人間觀に基き、彼は祖國救濟のための方策を古典に求めた。祖宗ローマがあの驚異すべき統一を完成し、强力な指導者の下に質實剛健な國民が、當時の

東洋の豪華壯麗な國々に接しつゝ、そのかげに秘められた個人生活の頽廢文明の風に染まず、武力の涵養と國力の强化にあらゆる個人の欲望を犧牲に供した偉大な國家生活を復興しなければならぬと痛感した。

國家が眞に國家たるには、完全な自主性を獲得しなければならない。大いなる政治才能を惠まれたる指導者が出現し、復興期時代において彼マキアヴェルリが、常に見る腐敗した社會を一新せしめるためにも、イタリアの各國は一致團結して外夷の勢力たるフランス、イスパーニア及びハプスブルク家の軍事的政治的侵略を防止し、イタリア內部の擾亂の原因を除かなければならぬ、と、考えたマキアヴェルリと相似るところ多いのは、ヒツトラーと共に、恐らく、ムツソリーニであらう。

ヒツトラーが第三帝國を理想に描き、ムツソリーニが古代ローマ帝國の復活を夢想した點において、又その苦難な歷史的環境において獨伊の兩英雄は、マキアヴェルリと似通つてゐるところ多いが、戰爭戰術において、神變無礙な外交戰術において、已むを得ずして執るべきことを要請された權謀術數の政策においては、私は遙に多くヒツトラーが相似ると考えるのである。

ヒツトラーの權謀術數の外交政策、第五列の謀略戰術も、マキアヴエルリの已むを得ざるに出でたる政策論と殆んど何等變るところがなく、同じく國家の存立と强化のための主張であつた。

諸外國の勢力とユダヤ財閥の權勢が國内のあらゆる社會勢力と結びつき、自家權力の伸張を計る大小さまざまなる權門の家——政治勢力の分裂、政黨の對立抗爭——が、互に鬩ぐの愚擧を繰返す戰場であり、「分裂させて支配する」イギリス政策によつて祖國は衰頽の底に喘いでゐたのである。

マキアヴエルリのイタリーも、ヒツトラーのドイツも、外國勢力の驅逐を、英佛のヨーロツパ支配を驅逐することが當面の重大なる課題であつた。

マキアヴエルリの提唱する政治理論も、近世民主主義を超えて、現代フアツシズムやナチシズムの政治に結びつくものであり、しかも、この新しい二つの國民國家（イタリーとドイツ）は、内に蟠居した社會腐敗とその原因を除去し、人民を健全なる國民として再び組織したのである。

マキアヴエルリのひそかに願望した富國、强兵、良民、善法主義が、マキアヴエルリの祖國イタリーにおいて、また、その盟邦ドイツにおいて實現されんとしつゝあり、しかも、國家目的を達成

せんがためには、道德的批判を逸脫したあらゆる手段をとらねばならぬとする權謀術數の政策は、現代の英雄、偉大なるマキアヴェリストたるヒツトラーに、より多く生々と復活されてゐるのを見逃すことは出來ない。

惡人たる人間を統率すると同樣、惡人たるイギリス的支配を排除するためには、權謀術數は用ひられねばならない。マキアヴェリズムは勇敢に復活されねばならない。

マキアヴェルリはかの有名な「君主論」において「君主は、狐と獅子との二役を演じるやうに努めなければならない。……狐になつて罠を見拔き、獅子となつて狼どもの度膽を拔くことが必要である」との大膽なる提言をなしたのであるが、國際政治においても、文字通りの戰國時代——世界革命戰——に處して、國內に對すると同じ「變通自在の心構へをもつてゐて、運勢の風の吹廻しだの、變化だのに應じて、思ふ存分に振舞ひ……必要とあれば善道を離れるばかりでなく、進んで惡道に踏みこんで行かなければならない。」これは「自分の國を持ち堪へて行く」ために已むなく取らなければならぬ方策であり、その國家的目的の達成のためには「已むなく信義に悖り、仁愛の道に外れ、人情に背き、信仰に逆ふ行ひをしなければならなくなるものである。」とのマキアヴェリ

ズムは、祖國の隆昌のために、あらゆる社會的規範を無視すべき必要をはつきりと認めてゐるのであり、それは國際政治社會が、悪逆なる人間と同じやうに、一つの現實であることに基礎をもつのである。

しかし、これは個人生活において單なる個々人の私欲のために、目的が手段を神聖にするといふ考へ方を是認するのではなくして、國家を至上の存在と觀念し、國家の强化と存立のためにのみ、この非常方策を是認せざるを得なかつたのである。だから、ヒツトラーが、イギリスの陰險過酷なるシークツト・サービス（諜報機關）が、全世界に張りめぐさられてゐるのに對抗する手段としてかの第五列部隊の組織と謀略をもつてしたとしても、また、權護術數的な變幻極まりなき外交戰術を弄したとしても、なんの不思議があらうか？

これが戰爭であり、極悪イギリス勢力驅逐のための鬪爭手段である。われわれも今やアメリカ式のセンチメンタルな人道主義と所謂「謙讓の美德」を淸算して、かのマキアヴェリズムとヒツトライズムに大いに學ぶところなければならぬであらう。

陸大兵學教官多田督知氏は、マキアベリズムの研究において「先覺的なるマキアベリーの兵學・

戰爭思想も、實はイタリーに於ては直ちにその成果を現實に結ぶことは出來なかつた。それを結ばしむる地盤が整つてゐなかつたからである。現實に於ける時代社會の實際が、それを地についたものとして生育せしめ實現せしめ得るだけの革新を遂げてゐなかつたのである。その頃この國の内情は、ベネチア・ミラノ・フイレンツエ・法王領・ナポリなどの對立があり、互に權謀を以て其の内に鬩ぎ、剩へ極度に人心の腐敗するあり、それが爲、列國に先んじた文藝分野のルネサンスも、それを社會政治などの實際部面にまで波及せしめ得なかつた。凡そ如何ほど進歩せる軍制の理論も戰略・戰術・戰爭論の主張も、それを現實に生ひ立たし得るだけの政治的・經濟的・事實の基礎地盤なしには、悉くが單なる理論、徒らなる主張として止まる以上にその實現性は望まれない。重ねて言へば、輝かしい勝利を得せしむるほどの劃期的なる軍制論・兵學・戰爭論もその實踐を擔つて立つ社會・經濟・政治・教育・科學など諸々の現實が同樣に劃期的なる革新を經るに非ずんば、結局その實力を發揮し得る餘地はないのである。要するに、新しい戰爭は新しい時代社會の出現に伴つてのみ、現實に呱々の聲を擧げ得るものである。」（「日本戰爭學」三二五—六頁）と述べてゐられるが、マキアベルリの先覺的な兵學・戰爭思想は、今や新しい時代社會の地盤を得て、現實に呱々の

聲を擧げ、（祖國イタリーの首領ムツソリーニの中に）そして遂に多く盟邦ナチス・ドイツの偉大なる戰略家ヒツトラー總統の中に、現實に更生しつゝあるのである。

マキアヴエルリも、もつて瞑すべきであらう。

第三節　戰ひの世界觀と勝利の理念

「日本戰爭學」の著者多田督知氏は、その尊敬すべき著書について、「日本戰爭學の神髓たる日本精神」を追究し檢討したる結論として、次のごとく述べてゐる。

「日本精神とは、日本に一貫して把握せられ實踐せられて來た事實に內在する。而も之が「自づからあるがまゝの道」（大自然の法則）と一致する。さればこそ、始めて、此日本は悠久不可知的なる古へより、現代に到るまで而して未來天壤無窮に生き〻〻として生き拔く事實たり得るのである。

この生き〻〻として生き拔いて來た事實は何を物語るか。

榮枯盛衰常なき世界に斯くも一貫して生き拔く事實は何を物語るか。眞理に即するものは強い。正しきは何ものにも優つて強い。事實眞理に即しない理論は夫れが如何に巧妙幽遠に作られたから

とて畢竟それに即するものには勝ち得ない。儒教が如何に理論巧妙に過去の日本に迫つて來たからとて結局考へられたに過ぎずして大自然が自からの內に自からの法則――事實がみづからの內に有つ法則原理――眞理――に反する彼等の「天」の思想「天帝」なる信仰は、畢竟我皇國の事實を動かすべく餘りに微力でしかあり得なかつた。如何に玄妙に考へられた印度佛教も日本に來つては遂に其空漠たる世界主義を放棄し、叉當初の「本地垂跡說」から全く反對に「鎭護國家」の現世的宗教となるに至つたのである。日本民族中の一部のものの誤まれたる思想は兎も角として、事實としては何等皇國の生命を中斷し、或は敬神崇祖の事實を覆がへし得るほどの力は持ち得なかつたではないか。時代思想とか考へられた理論とかは別として嚴たる我歷史の事實は如何に動いて來たか？嚴として一貫する我國體事實は何を物語るか？　眞理に即するものは强く、正義は强い！

悠遠の過去より現代にまで生き拔く「我國體事實」（萬世一系の事實・忠孝の實踐せられたる事實）はそこに、それ丈の合理性があり、大自然の法則に適合する處あればこそ、それが事實として續いて來たものであり、生き拔いて來たのである。理論のみを尊ぶ人々は兎角其理論に迷はされて、この正當の事實眞理を解し得ない。最上の理論は合事實的であり、事實は理論の出で來る源泉そのもの

であり、事實以上に强く正しい理論はないのである。

日本精神は事實として歷史を一貫してゐる。我々は單に頭の中でのみ作られた理論には左程の價値を認め得ない。各國それ〳〵に美しい理論も出來よう。併し幾ら立派なものを考へ出し作り出されたとしても、彼等のものは自から具つて居たものではなく、悠遠なる歷史の事實に即するものではない。要するに創られたるものである。少くとも歷史の上に一貫してあつたものではなく、今想起せられ考へ創られたるものである。のみならず日本以外に打ち出さるゝ理論は、必ず部分的であつて、凡ゆる生活の部面を綜合する一體系の理論とはなり得ない。國家理論と世界理論・政治と宗教とは結局は必ず背馳するに至るであらう。例へば民族全體主義と將來の世界像とは如何に統一思想として聯關せしめ得ようか。然るに我々は我が歷史事實の中に、而も夫等凡てが一に歸するものを發見し得る。成程今迄は所謂「言擧げせぬ」ことが尊ばれて、未だ理論化せられずに放置せられてゐたのであるが、今日、嚴たる我歷史の事實を言擧げしてみれば、其所に偉大にして完全なる一つの理論體系をなすものであることを發見し得るのである。例へば我敬神祭祀の本質は我政治の本質戰爭の本質と一體不可分のものであり、社會生活、國家生活、經濟、外交、宇宙論、世界觀、等

々凡てのもの、渾然一體化せるもの即ち之日本精神である。夫等の間には何等の矛盾撞着なく一なる日本精神に歸し、一なる日本精神から自から流露するものである。時により消長の差こそあれ、過去の時代より一貫してそれを保持し來つたのが我が日本であり、而かもそれは、現時の如く表面如何にも歐米文化の嵐に吹き荒されたるが如く觀ゆる時代に於てすら、尙我が民族意識の奧底には依然として潛在的に流れ、我々の血の中に深く脈打ち續ける基本性格であり、根本原理であり、根幹たる精神である。一刻も速にそれを表面にまで浮かび上がらしめ、現象形態の末々にまでそれを具顯することは、我々に課せられたる光榮ある責務であり、子々孫々に負ふ重大な我等の責務でもあり、また世界史進展の觀點からも我々以外に擔ふべきものなき緊急逼迫せる大使命である。」（同書一九〇頁―一九三頁）

しからば、天壤無窮の皇運によつて扶翼せられたる、しかして「世界史進展の觀點から、我々以外に擔ふべきものなき緊急逼迫せる大使命」とは何んであるか？

「戰ふ日本經濟」の著者西谷氏は、これに對してすでに美事なる解答を與へてゐる。

曰く、「歐洲經濟の新秩序は二つの限界につきあたる。第一に獨伊樞軸の結合のみを以てしては

さらに來るべき「超帝國主義」的資本主義の壓力に對し全く無防禦であり、獨伊の戰勝は歐洲とアフリカの枠のなかに止まざるを得ないことこれであり、第二に、その結果として當面既にメッサジエーロ紙のいはゆる「英米全權國家」の支配要具たる金への妥協を考へざるを得ないことこれである。

然らば一體どの國が、どの民族が眞實の世界新秩序の擔ひ手となり得るか。いふまでもなくいまや英米資本主義の再編成地盤とならうとし、また今日までにも英米資本主義の支柱となつてきたアジア大平洋權における唯一の發言者日本でなければならない。日本の決意においてのみ歐洲經濟の新秩序は確保され、安固なる成長を期待し得るのである。しかも歐洲經濟の新秩序が確立し得ないとすれば、英米資本貴族によるアジア大平洋圈の二十世紀的劫掠は必死であり、日本そのものが窒息枯死するほかはない。いはんや植民地解放のごときひとつの夢想たるに止まつて、世界は階級對立の無限の繰返しのなかに沈淪するであらう。

世界經濟の新秩序とは何か。それはまさに日本そのものの擴大であり、日本世界の建設を意味するものでなければならぬ。北はベーリング海峽を越えて東へアメリカ大陸につながり、南は印度洋

を越えて西へ地中海、中央亞細亞、歐洲につながる二つの東西交通の大通路を扼し、しかも大平洋の南北に亘る豐饒なる天然資源の開發と防衛に當るものは、ひとり日本あるのみである。イタリアの地中海、アフリカ大陸の制覇が僅かにスエズ地峽、紅海の一端を抑へ得るに止まつて、英領印度の障壁につき當らざるを得ないことをみよ、曾ての前大戰においては老猾なるイギリスは日本艦隊をしてこの南方ルートを防衛せしめ、以て對獨制壓の端緒を摑んだのである。

亞歐米の三大陸をつらねるルートを抑へ、加ふるに大平洋の南北ルートを統治し得るものこそ世界を統治する。これまさしくかの古代スメル文化圈の復興であり、日本世界のルネツサンスでなければならない。

われわれが考へるべき問題は、もはや英米「列强」の顏色や、資本主義的諸矛盾の詮索ではない滅ぶべきものをして惜しみなく沒落せしめよ。世界古代史の日本的復興こそは、スメル文化の擔ひ手たりし日本民族が再び擔ふべき世界史的課題なのである。

日獨伊三國同盟をして世界につなぐ北と南のルート建設の前提ならしめよ！

英米の壓迫。

それに對する反撥。

人々は三國同盟の地盤をそこにみようとした。しかし誰がそれを知らずとも、三國同盟こそは單なる力學的反動の所産ではなく、まさにもつとも積極的な、もつとも建設的な、そしてもつとも世界的な新秩序建設のゆるぎなき紐帶であり、また唯一つの可能な方法であつたのである！」（同書三三三頁―三三五頁）

考へられた理論としてではなく、世界新秩序の擔ひ手たる、かみながらの道、大自然の大法則は、ひとり日本民族のみがこの世界史的課題を解決し得ることを運命づけてゐるのである。

ヒツトラー總統いかに偉大なりとも、また、ナチス・ドイツの意氣いかに軒昂たりといへども、わが日本に神意によりて具備せしめられたところの「自然の大法則」――歷史的役割と威力とを除外して、かの世界新秩序の建設を完うすることは出來ないであらう。

最近アメリカのペンシルバニア大學において、世界の偉人とは誰か？　との質問に對して、最高位を占めたるものは、盟邦ドイツのヒツトラー總統であつた、と傳へられてゐるが、そして、私も「ドイツ的戰略」研究の末席を穢すひとりとして、ヒツトラーの政治家としての偉大さ、將師と

しての天才、なにものをも燒き盡さねばおかぬ熱烈なる祖國愛に讃仰の辭を惜しむものではないが、無批判なる親獨主義と、徒らなるヒットラー崇拜の熱にうかされたる恐獨の精神的敗北主義に陥ち入る危險については嚴重なる警告を發すべきであると信じてゐる。

日本みづからの威大なる使命に對する無自覺は、わが國民に自らの力の過少評價によつて恐るべき致命的な錯誤を起さしめんとしつゝある。

故に、わが「聖戰完遂」の威大なる戰爭目的——世界新秩序の建設の唯一なる擔當者としての日本の歷史的使命の曠大無邊さを、今こそ、高らかに宣傳し、鼓吹せられねばならぬのではなからうか。

しかり、この理念と貴き使命の自覺こそ、わが國民の最後の一人にいたるまで把握されねばならぬ。しかもこれこそが勝利の秘決であり、世界新秩序建設の鍵である。また、かくてこそ「最後の一兵」に至る犧牲を最小限度に止めしむることである。

第四節　國內宣傳と啓蒙教育

ドイツ軍の壓倒的な勝利と國內統一戰線の强固さは、要するに國家總動員――總力戰體制――によつて產み出されたもので、この物心兩方面よりなる總力戰への戰ひは、一九三三年のヒツトラー政權獲得の年からすでに始められてゐる。

この國家總動員の重要なる要素を擧げるならば、次の三つの點に要約される。

一、鬪爭心に燃える新しい靑年層を產み出したドイツ民族の心理的な動員。

二、ドイツ軍首腦部の卓越した軍事技術と作戰計畫。

三、史上かつてその比を見ないほど多種多樣な機械兵器を產み、且つ外部からの經濟封鎖に對して出來得る限り自國を耐え得るものとした經濟的動員。

これらの三要素を全面的に問題とするのは、著者の任務ではない。私はこれを啓蒙・宣傳・謀略の分野から、即ち、思想國防の見地からのみこれを俎上にのせるであらう。

八重樫運吉氏は近刊の「國防國家の理論と政策」と題する著書において「國防國家に於ける教育

思想・文化一般の性格」について、次のごとく言及されてゐる。

「我が國に於ける大政翼賛の政治理念は、我が皇民の練成を目的とする教育と一體のものとなる言を換えれば、教育は崇高な政治であり、政治は教育でなければならぬ。」

「教育に於ける道の教育の重要な部門は、全國社會教育體系を確立することに依りて、全國の自覺的指導者の手に依りて之を爲さしめ、學校は主として國防國家が極度に高度化せしめざるを得ざる科學教授の强化に當らなければならぬ。學校の教育が知識に偏重したといふ非難は的を外れて居る。學校の教育は智識を主とすることを否定してはならぬ。臣道は、講壇から口角や圖解の教育に依つて可能であると考へるならば、之は根本的な認識不足である。學校は倫理の自覺は與へ得る。自覺には意識の反映があり、此の意識は對象意識であり、科學に連るのである。而して自覺さるべき實體たる倫理感情そのもの即ち臣道や孝道となつて流出する精神の實體は、家庭に於て社會生活に於て、形成されるものである。我が國に於ては各人の教育は、之を教育家に委せ、自分は自己の利益――金儲け榮達――の爲の行動に專心した。各自が臣民として、後進を指導するといふ翼賛の道を忘れて、長いこと、個人的利益の追究に進んだ。學校に於て、いくら口角を以つて、道を說

き倫理を教へられても、自覺さるべき本體たる民族的な感情が生活自體の中から與へられて居らない學生生徒にとつては、自覺すらも成立しない。單に知識としてのみ與へられるに過ぎない。かくて世の人々があまりに利己的になり來つたことを、教育家の責任とし之を批難したが、之は自らの教育的使命（臣道）を果さずしてなす批難である。特に世情かくの如く導いた政治家自らが、政治の小屋に於て教育家の批難をわめき出すに至つては全く沙汰の限りである。先づ自ら臣道の實踐を指導するといふ正しい政治を實踐せよ、自らの翼賛の使命を果さずして、教育家の努力を攻撃する彼等の勝手に至つては、筆者は義憤をさへ禁じ得ないものがある。政治家は政治社會教育家でなければならぬ。臣道の確立は此の政治的に自覺せる社會教育家に依りて始めて正しく可能である。國防國家に於ては、軍人兵士のみが戰爭するのではない。銃後人は總て戰士でなければならぬ。之と全く同じく國防國家に於ては、教育家のみが教育を擔當するのではない。教育は全國民の自覺者總てが擔當するものである。そして學校の教育は科學の教育を重要視しなければならぬ。社會教育の全面的刷新と再編成に依りて道の教育が、家庭に於て、隣組に於て、街頭に於て、職場に於てなされなければならぬ。

總ての父兄や、あらゆる政治家や、あらゆる職場の指導者や、街頭に於ける自覺者や、そして、新聞、評論、文藝——文化一般は、教育的機能を自覺的に擔當しなければならぬ。大政翼賛は、此の全國民の教育的機能——使命の自覺に依りてのみ達成せらるるものである。

政治文化一般を教育とせよ、而して教育を文化一般の最高使命とし且つ之を政治的ならしめよ、之が國防國家に於ける要請である」（同書二二八頁—二三一頁）

教育と政治、社會教育の再編成についての論者の認識と見解は正しい。

しかして、現下における國內啓蒙宣傳の役割は、家庭に對し、隣組に對し、街頭に對し、職場に對して行はれる社會教育であり、また同時に「總ての父兄や、あらゆる政治家や、あらゆる職場の指導者や、街頭に於ける自覺者や、そして、新聞、評論、文藝——文化一般」に對して、その教育的機能を自覺せしむることにあらねばならぬ。

民主主義的自由主義的精神の變革は、社會的變革に先行する。革命とは精神的作用である。革命はいつも先づ人間自身のうちに行はれ、それから初めて政治經濟の現象形式をとるものである。新しい人間が新しき存在內容を決定するものである。

かくて、文化一般における再編成、新しく且つ不動の信念による啓蒙宣傳は、國防國家體制建設にあたつての最も基本的な問題であらねばならぬ。

小松清氏は「フランスより還る」と題する著書において、日本における最も眞摯なる文化批評家としての反省的態度を以つて、次のごとく書いてゐる。

「フランスの内部的解體の奥地に崩れゆくブルジョア文化の姿をみ、それにとつて代るべき新文化の兆しすら不在してゐるのを慨嘆せざるを得なかつたのである。文化國フランスは、文化の源あせたとき遂に敗れた。文化精神の豐饒のために倒れたのでなく、文化の衰退のために破れたのだ。と僕はしみじみ思はざるを得なかつた。軍事的な角度からみても、ドイツがそんなに强かつたのでなく、フランスにあまりに戰意がなかつたとみるのが當然であらう。」（同書四頁）

「歐洲戰爭の目前の成行だけをみ、ドイツによるフランス敗戰の結果だけをみて、文化は國民を脆弱にし敗戰に導くと云つた風の淺薄、皮相な物の云ひ方をする知識人たちは、文化の世界を亂す第五部隊である。」（同書五頁）

國防國家體制の基底たる文化一般――思想戰線の統一といふ問題に對する認識不足のなんと多く

文化の世界における第五部隊のなんぞ限りなく存在することか。

われわれは「文化の世界を亂し」その統一を破壞する國內の第五列的存在と鬪ふと共に、文化のそして啓蒙宣傳の正當なる認識の上に立つて、しかもあらゆる文化技術を動員して、この戰ひにおいても最後の勝利を占めねばならない。

しからば、われわれはいかなる世界觀に立脚し、いかなる勝利の理念に確信を抱いて、この戰ひを戰ひ拔かねばならぬであらうか？

この問題は、必ずしも簡單ではないが、われわれにはすでに明白であり、わが總力戰の輝やける戰士達は、この困難な道を早くも開拓しつゝある。

第五節　世界革命戰と日本

今次の世界大戰における最も大いなる特色を擧ぐるならば、それは今次大戰が大規模な武力戰として行はれてゐるといふ點にあるのではなくして、世界革命戰としての性格を帶びてゐるところにある。

そして世界革命戰的性格は、單なる武力戰にあらずして、武器をとつて戰ふ思想戰であり、新秩序建設の對立する二つの世界觀の爭覇戰として行はれてゐるところにある。

ヒットラー總統は、「二つの世界が對立してゐる。その何れが勝利者となるか？　今日ではそれは絕對に明白である」といひ、この二つの世界の對立を、彼は「金に對する血の鬪ひ」であるといつたが、所謂、廣域經濟を主張し、資源の再編成に物質的基礎をもつ新世界觀に出發する今次大戰は、たしかに世界革命を約束する武力を伴ふ一種の思想戰でもあつた。

だから、その世界觀の優劣に關する信念を鬪ひ取ることが、戰爭勝利の先決條件であり、忘れ得ざる秘訣でもあつた。

また、その反對に、敵國に對して、あらゆる部門——政治、經濟、文化、武力——からこの信念を喪失せしめ、戰意を奪ふことが、戰爭を勝利にみちびく最善の捷徑でもあつた。故に、ヒットラーにとり、ナチス・ドイツにとつて、宣傳戰と第五列を先驅となす謀略戰に、そして又同時に、一國一黨一總統を基本とする國內の思想的統一戰線の完成に、主力と重點を置かざるを得なかつたのである。

一九四〇年十月ナチス黨から出版された「西部戰線に於けるドイツの勝利」と題する公式の文書は、この點について實に豐富なる教訓を與へてゐる。

「今次會戰において敗北したものは、單に英佛の聯合軍とベルギーおよびオランダの援軍のみではない。數世紀に亙つてこのヨーロッパの重壓となり、ヨーロッパの自然的發展を阻止し遲滯せしめ來つたかの古臭い諸々の政治的教說と原理もまた崩壞し去つた。諸國民の均衡に關するイギリスのテーゼたる「バランス・オブ・パワー」は破れ、ルイ十四世とリシユリユーの政策たるラインに達しラインを越えんとするフランスの久しき熱望は潰え、ヨーロッパに覇權を唱へんとする努力もともぐ潰滅した。

かくして最後にデモクラシーなる政治的教說もまた完全に敗れ去つたのである。そしてこのデモクラシー的イデオロギーと共に、自由主義と高度資本主義の時代、金權主義的列强の支配は沒落した。ヨーロッパは今や自由となつた。

金權政治がかく沒落するに到つたのは、數々の度し難い錯誤のためであつた。我々の見るところその最も重大なる誤謬は、金權政治的列强が一つの力を誤認したこと、即ち自らの組織を基礎とし

て、その上に作り上げ、且維持し來つた機構の力を、過大に信じてゐたところにあると思ふ。その結果同樣に致命的な錯誤が生じた。即ち、國民社會主義およびこれと同盟せるフアッシズムの力と機構に對する過少評價といふ誤謬である。ドイツがこの七年間に體驗し、努力し、成就したものは英佛の眼から見れば、單なるこけ嚇し以外の何物でもなかつた。彼等はドイツたるものを以て、宣戰布告といふ最初の一擊で國內的に崩壞するに相違ない國家と思ひ込んでゐたのである。ポーランド戰役の敎訓を汲みとつたならば、英佛はこの迷蒙から醒まされたにちがひなかつた。だがその時においてすらなほ現實を認識しなかつたといふのは、彼等の組織の完全な不安定と老衰とを證明するものである。

軍事的にもまた「民主主義」は完全に動搖してゐた。一方では戰略的防禦なる原理が强調され、マジノ・ラインの防壁と堅穴に隱れて、三年でも四年でも五年でも長期抵抗を遂行せんとした。しかし他面において戰爭の擴大、遠隔戰を圖り、戰場を北部、西部、東部および南部に探し求めたのである。この消耗＝疲弊戰略は純政治的理由から出發したものであつた。即ちドイツを飢餓封鎖によつて絞殺せんとし、これが方法としてドイツの側面と背面を戰場に化さんとしたのである。しか

し他面において、ドイツに對してかゝる遠隔戰と長期戰とを遂行し得る能力は、如何なる點からみても全然これを有してゐなかつたのである。

世界大戰の終結後、英佛は軍事的に停滯したまゝであつた。舊式の武器、舊式の戰術および就中腐敗せる士氣が英佛聯合軍の裝備であり、魂であつたのだ。これに反してドイツ側においては清新な戰爭觀、一九一四――一八年の陣地戰を疾風の如き機動戰に轉ぜしめたところの確固たる且つ奔放なる意志、更に世界で最良最新の武器を以てせる武裝があつたのである。

ドイツの敵國側では、ドイツ國防軍の「秘密の武器」について大いに喋り散らした。だがドイツ軍の秘密武器なるものは、實は最高の確信といふ不動の精神以外の何物でもなく、しかもこの確信たるやヒットラー總統の人格と業績から流れ出るものである。といふ聲は實に國外の諸所からも聞えたのである。まことにこの勝利は總統の出現によつて贏ち得られたものであり、總統の光は全世紀を被ふものである。

今次戰爭の西部戰局において古きものと新らしきものが對立した。即ち狐疑に對して大膽が、打算に對して理想が、逡巡に對して確信が、防禦と女々しさに對し攻擊精神が、小心翼々たる動搖に對

して熟慮斷行が、山師根性に對して將帥的精神が、凡俗精神に對して天才が、洞穴と壘壁に對して生ける人間が闘つたのである。

一九一八年に對して一九四〇年が闘つたのである。この戰爭の終結は炳として一つの事實を示した。即ち總統のあらゆる豫見は百パーセント遂行され、我々の敵の全計畫は同じく百パーセント失敗したといふこと、これである。」

今次西部戰線についてのナチスの公表せるこの批判と解剖は、今次大戰が金權政治、民主主義列强の打倒を意味する世界革命戰的性格を有してゐることを描き出してゐるばかりでなく、ドイツの勝利が「秘密の武器」にあらずして、ナチスの不動の精神、勇敢なる攻擊精神にあつたことを强調してゐることは最も注目する必要がある。

この容易ならぬ、民主主義國家群に對する不倶戴天の世界革命戰的性格について、とくに主として經濟的見地から觀察して、殆んど同樣なる結論を與へる西谷彌兵衞氏の快著「戰ふ日本經濟」にこれを語らしめよう。

「一九一四年ドイツ資本主義は十九世紀的な植民地領有に向つて戰ひを宣言した。だが同じ資本

主義の地盤の上に立つて、より大なるものに對する挑戰がなされた場合、敗北は必然の歸結であつた。強力な軍事的能力にも拘らず、資本主義的諸要因はドイツ經濟の瓦解を齎したのである。戰ひの結果はより困難な、飢餓的な國民經濟の殘骸がドイツに殘つた。ドイツ資本主義はこの窮乏のなかに自己を鍛へあげ、つひにナチス的な計畫經濟に轉形することによつて資本主義的な諸矛盾から自己を救ひあげる途を發見したのである。

殘る問題はドイツをとりまいてゐるヨーロッパ的な桎梏の撤廢であつた。愼重なそして果敢な外交的進出がはじまつた。しかし前大戰によつて自らも創痍を蒙り、戰爭の打擊に對する恐怖を骨髓に刻み込んでゐた資本主義國家群は、漸く餘り有效でない外交的示威によつてこれを牽制しようと試みたのみであつた。

然るに事態の進展と共に、ドイツも、そして民主主義國家群も、いまや起りつゝある事態が豫想外に深刻な問題を含んでゐることを悟りはじめた。地球上に唯ひとつでも強力な民主主義國家が存在する限り、ドイツ經濟は常にその攻擊に曝らされねばならない。その場合、ドイツ經濟を不動の安固さに置くものは、ナチス的經濟そのものの擴大強化と、最後の民主主義國家が沒落するまで戰

ひを續けることである。

「もうこれでいいんだ」といふときに、ファウストがメフィストに敗北するごとく「これで戰ひは終つたのだ」といふ時に、ドイツは再び民主主義の爪牙に引裂かれる。ヨーロッパ經濟の枠は、さらに大洋の彼岸に續いてゐる。植民地の返還、ヴェルサイユ體制の打倒を叫んだナチスは、ヴェルサイユ體制の眞實の演出者たる民主主義そのものとの戰ひを續けることにおいてのみ、ほかならぬそのヴェルサイユ體制を眞實に打破することが出來るのである。

事實は民主主義國の側にとつても同樣である。たとひそれが「元も子もなくしてしまふ」戰爭であらうがなからうが、民主主義そのものに對する敵對者をそのまゝにして置くことこそ「元も子もなくなつてしまふ」所以であることだけは明瞭である。戰ひは宣言されねばならぬ。最後の一兵まで戰はれねばならないのである。」

まことに、今次の世界大戰は、世界新秩序の建設といふ革命戰的性格をおびるべく運命づけられており、永遠の勝利を確保するまで、最後の一兵も惜まず、戰はれねばならぬ有史以來かつてなき乾坤一擲の大爭覇戰である。

この避くるを得ぬ曠古の一大決戰に、最大の戰果と勝利とを確保するために高度國防國家——總力戰體制——の建設の必要なるは、最早論議の餘地ないところであるが、この國防國家建設の基礎たるものは、第一に先づ思想國防の完成でなければならない。

橋田文相は、昭和十六年四月十四日の地方長官會議における訓示において

「銃後における國民思想の動向は、高度國防國家體制の基底をなすものであつて、最近における内外の情勢は、いよいよこれが重大性を加へるにいたつた。

この際、思想國防に關する施設を擴充强化して國體の本義に基づく、國民思想の啓培に力をいたし、國民生活の全部面に透徹具現せしめて、時難の克服に邁進いたすことは、正に當面の急務なりと考へる」と。

思想國防が高度國防國家體制の基底をなす重大なる課題たることは、既に十分認識されてゐるのであるが、問題は、國民思想の强化をいかにしてなしとげ、また、思想國防をもつて、いかにして高度國防國家體制の基底として役立てしめるか、といふ點にある。

これと同じ深刻なる疑問に觸れてゐるフランス將校の「敗戰日記」に書かれた生々しい告白にし

ばらく耳を傾けよう。因に、この日記は、パリの辯護士出身の一將校が、一九四〇年五月五日から同二十二日に至る間、書きつゞけた戰爭日記の一節で、ドイツ軍隊に捕へられると同時に押收されたものである。

「彼等は殆ど年が若く、背高が、すらりと均整のとれた身體をしてゐる。いづれもこの邊りに達するまでには、仰天するほどの壯烈な大行進をやつた連中ばかり、中に二、三の落伍者もゐた。その連中は行進部隊のうしろからよろめきながらついて來る。非常な疲勞ぶりで、やつとのこと身體を眞直に保つてゐるといふ程度だ。

それでゐながら彼等は戰ひを前にしたとき實に狂信者のやうな歡喜の眸を示すのである。その上かうして强行前進をつゞける部隊の中には、輕傷者たちも交つてゐた。手に眞白に繃帶した兵、あるひは腕に吊帶をかけてゐる兵など。

中に一人、それはたしかに學生と思はれたが、流暢なフランス語を繰つる兵がゐた。自分はこの男に訊いてみた。「君はどうして後送をねがひ出て、適當な治療をうけないのか。」と、すると彼は不可解な笑ひをうかべながらいつた。

「君は、僕が最前線で行はれることに參加したがらないとでも考へるのですか？」

この若者にこれほど超人的な指導を行ひ、これほど超人的な教養をうゑつけたものは、そもそも何であらう？　かつて、われ〳〵は、ヒットラーのために奴隷化された民衆のことをアレコレと喋つて來たものである。しかし自分はこゝに、自分の眼の前に、國家存亡の關頭に立つてゐるわがフランスでは絕對に見られぬやうな歡喜の發露を目擊した。あるひは思ふ、この戰爭はフランスにとつて不必要なことではないか？　そして、これまでのわれ〳〵のすべての立論は單なる饒舌にすぎなかつたのではあるまいか？」

支那大陸やノロ高地に「天皇陛下、萬歲」を叫んで、莞爾として戰死するわが皇軍將兵の「歡喜の發露」や「超人的な教養」を目擊してゐるわれわれは、不必要な戰爭に參加したこのフランス將校のやうにナチス・ドイツの「歡喜の發露」になにも驚きはしない。

しかし、ナチス・ドイツとわが國のそれと相違するところは、超人間的な教養と信念とを抱く軍人の優劣さではない。否、皇軍將兵の盡忠報國の精神は、彼に優るともいさゝかも劣るものでは決してない。

しかし、ヒツトラー總統の爲政者としての偉大さは、ドイツ國防軍の强化とその「超人的教養と信念」にあるのではなくして、一般國民の一人一人にいたるまで國防軍と同様な「超人的教養」と「歡喜の發露」を植ゑつけたことにあるのだ。

われわれはすでに「國防軍」ならざる第五部隊のあの勇敢なる活躍、武裝せざる「第五部隊」の思想的武器の强さに、これを見てきたのである。一絲亂れぬ物心兩方面の國内統一の美事さにこれを見て來たのである。

しかも、これこそが「高度國防國家體制の基底」たるべき「思想國防」の根本問題なのである。

第六節　勝利の後の戰爭

ナチスの批判によれば「一九一八年、戰爭は完全な混亂を以て終末を告げた。聯合國側が勝利を收めたのでもなく、同盟國が敗北を喫したのでもなかつた。」のである。

そして「コンピエーニユとヴエルサイユとは、なんら勝利を意味するものではなかつた。戰爭は勝敗を決せずに、終つてしまつたのである。しかも、政治は秩序をもたらさず、武力の活動を無秩

序の狀態に放置したのであつた。政治はむしろ、事態の混亂を永久化し、決戰は未解決のまゝ殘された。從つて一九一八年十一月以來、今世紀初頭に紛爭の始まつた處に、再び抗爭が繰り返へされたことは、一つの政治的必然にすぎなかつたのである。」と。

何故に、一九一八年の戰爭は、英佛聯合側の勝利を以て終結せず、完全な混亂を殘したに過ぎなかつたであらうか！

イギリスの軍事評論家リデル・ハアトは賢明にも、この點に言及して「第一次大戰の最惡の缺點は獨逸の攻擊力が無力となり、經濟的逼迫により消耗し切つた時に、その實狀に滿足せず、獨逸の屈辱的降伏に依る勝利の外觀を得るまで、我々が戰ひ續けた事であつた。」

しかり、英佛聯合軍の勝利は、たゞ「勝利の外觀」を得たに過ぎず、新しい政治秩序がヨーロッパに建設されなかつたために、戰爭は依然「進行中」であつたのである。

その最大の源因は「戰爭が國家の興廢といふ點から云つて一介の戰略家だけに依つて勝手に行はれるのには、餘りにも嚴肅な大業である。そこで、戰爭後の平和狀態をも含む大戰略に依る廣い視界が必要となつて來る」のにも拘らず、戰爭後の平和狀態における新しい秩序の建設といふ重大な

る題目が、その戰略の中に含まれてゐなかつたことは實に致命的な過失であつたのである。

アメリカ海軍の名戰略家であつたG・J・マイヤース氏は「和戰を決する權能は爲政者の手中にある。一度かれらが、戰爭を決しても、その責任を陸海軍首腦部に負はせることは出來ない。國家の安危を託された陸海軍は、依然として、爲政者から支持を受けなければならぬ。戰爭は誰もこれを愛好するものはなく、また戰爭は殘酷で破壞的であるが、これを理由として、戰爭に導いた爲政者の責任は解除されぬ。云々」と、あくまで戰爭の責任を爲政者に追究してゐるが、戰爭を誰れが始めたかを問題にする必要はないとしても、すくなくとも爲政者が戰後の經營をいかにすべきかはリデル・ハアトのいふごとく「大戰略」のうちに當然設計され構想されて置かねばならないことである。

一九一八年の戰爭が、武力戰の停止の後においても「戰爭は進行中」であり、勝敗すらも決せられざる狀態にあつたのは、先づ第一に、建設的な政治の新秩序が何等工夫されてゐず、武力の活動も無秩序の儘放任され、しかも、武力は勝利の外觀を維持したに止まり、その上精神及文化において充分なる措置が講ぜられなかつたためである。

英佛聯合國が、もしもその文化戰、精神戰において勝利を確保し、彼等の文化と精神がナチスの擡頭の餘地なかしめるほどに浸潤してゐたとしたら、即ち、文化戰と精神戰における內面的なる勝利を戰ひ取つてゐたとしたら、（眞の勝敗は決せられぬとしても）恐らく、こんなに早く抗爭——第二次大戰——が再び繰返されることはなかつたであらうと思はれる。

これが總力戰的體制を以ての鬪爭が展開される現代の戰爭においてはなほ更に、勝利の後の戰爭——武力戰の停止の後の經濟戰、思想戰、文化戰、精神戰は、一層はなはだしく行はれるであらう。

ベルリンの獨逸最近世史硏究所々長ワルテル・フランク教授は「戰時に於ける獨逸の精神科學」なる講演において、次のごとく述べてゐる。

「ドイツと西歐民主主義國家との現今の鬪爭は、たゞ單に武器の爭ひではない。それは同時に二つのイデオロギーの爭ひであり、そのイデオロギーの中の一つは民族的で若々しく、他の一つは古くて最早確固たる根底を有さぬものである。それ故、今次大戰に於てドイツの武器が勝利を得る瞬間に於て、ドイツの世界觀と科學とは西歐のイデオロギーを驅逐して、歐洲に確乎たる地盤を占め

ることゝならう。政治上の權力鬪爭は、ある土地を征服せんとする新しい力の突擊部隊である。教育は、軍隊に後續し、土地を秩序づけ建設する總督府であるが、ドイツの科學は今次の戰爭に於てこの總督府的役割を果すべきものである。科學の危機は一度天才アドルフ・ヒットラーに依つて超克された。彼こそは百千の專門分科をば、再び一つの大きな理念の下に結合した。或意味に於て政治的及び精神的變革は大學及び學術の埒外で行はれたので、精神諸科學及び大學は、その存在の意味をさへ問はれる樣になつたのである。と云ふのは、ビスマルクの時代以後に於ける「大學の教養」は、たゞ所謂「物知り」を目標としてゐるのであつて、最早言葉の眞の意味に於ける教養といふものを創造することはできなかつた。大學教育は本能と行動の本質的な力をば無力にしてしまつた。しかるに、今や必要缺くべからざる專門的、技術的教養をば新しき政治的思想世界の綜合との有機的結合にもち來すのが國民社會主義的教育の目的となつた。武器の戰爭の勝利の後に於て、ドイツ國民の魂の戰爭がおこるであらう。この第二の戰爭に於ては精神科學が最前線に出でねばならぬであらう。武器の戰爭に於て技術的諸科學が勝利の道具を鋭くする樣に、民族の魂に關する戰爭に於ては、精神科學は精神的諸價値の秩序變改の手段として重要なる役割を演ずるであらう。國民

的存在の一切の分野に於て同じ戰ひが戰はれ、これらの一切の分野の上に同じ旗がなびいてゐることは、我等は今又知つてゐる。今日では戰線はどこにでもある。」（傍點は著者）

武器の戰爭の勝利の後に、魂の戰爭があり、民族の魂の戰爭に、精神科學が重要なる役割を演ずることを喝破せるフランク教授のこの講演は、實に傾聽に値する多くの教訓を含んでゐる。

ゲッベルス宣傳相は、一九四〇年七月バイロイトに於て行はれたワーグナー祭における演說の中で「吾々國民社會主義者たちは、常に藝術を民族に奉仕せしめて來た。藝術は吾々にとつて、斷じて暇潰しではなく、かけ代へない生活必要品である。勝利に次ぐに勝利を以てしてゐる吾が國の兵士たちは、ドイツの都市や工場や、農民や國民を保護してゐるばかりでなく、實にヨーロッパ第一の文化の國、ベートーヴエンとワグナー、シラーとゲーテ、デュラーとグリユーネワルトの國を保護してゐるのである。吾々は好き勝手に、そして御時勢次第で、藝術に力を入れて見たり、又中止したりするわけには行かない。藝術は吾が民族が現存してゐることの表現であり、經濟や政治と同じく、吾が國民生活の樞要な部分である。」と叫び、また文化院賞授與式（一九三九年五月一日）に際して『「武器が語るときはミューズは默す」と。然しながら、これは一部の眞理に過ぎない。政

治的及び軍事的な隆盛は疑ひもなく、同時に文化的隆昌を件ふものである。武力は一國民の力と榮譽との、單なる機械的な表現ではない。ある國民の文化は、武力の中にも表現される。何となれば武力は眞實、且つ恒常的な平和の前提條件だからである。然し國民をして文化を保存し、創造せしめる力強き確信は、平和によつて與へられる。」と、述べ、戰爭中にも、戰爭後にも、文化や藝術に如何に多大なる關心を抱いてゐるかを示してゐるが、武力戰における勝利——勝利の外觀を得たることに依つて、いつの場合も、われわれは絕對に安心してはならない。

民族の魂の鬪爭に、精神科學の戰爭に、文化、藝術、精神力の爭覇戰においてもまた、武力や經濟や政治におけると同樣に、わはわれは最後の勝利を確保すべく永久に鬪はねばならない。實に戰爭は今日ではどこにもあるのであり、また、戰爭はいつまでも〳〵進行を續けるのである。

第七節　思想戰の基準と皇道宣布戰

われわれは總力戰戰略の觀點から、思想戰鬪がいかに重要なる役割を占めつゝあるかを、既に檢討し、思想戰鬪が單なる補助手段たる以上に重要であり、その攻擊と防衛は獨自の立場から行はれ

なければならぬことを認識したのであるが、この思想戰の基準をいかなる觀點に置くべきかは、頗る重大なる問題であり、しかも、是非とも一應解決されなければならぬ重大な問題を含んでゐる。私は本書の卷頭に、多田督知氏の見解に從ひ、世界に對立する三つの思想の潮流を述べたのである。

しかし、かつては世界の思想陣營に對立する三つの潮流ありと見てゐたかのナチスにおいても、この點に關する見解において、すでに多少の修正と轉換がなされつゝあるやうに見られる。

一九四〇年十二月十日ベルリンの軍事工場勞働者集會の席上で行はれたヒツトラー總統の演說はこの點に關し頗る重大な暗示を與へてゐる一節がある。

「吾々は個々の英國人や個々の佛蘭西人と鬪つてはゐない、大富豪が大衆を支配し、大衆を欺瞞する手段となつてゐる金、彼等が自分達の最大の幸福を實現し、權力慾を滿足させるために求めてゐる利潤と鬪爭してゐるのである。」（中略）

「二つの世界が對立してゐる。その何れが勝利者となるか？　今日ではそれは絕對に明白である。」

右の演說によつて解るやうにヒツトラーは「二つの世界の對立」をいひ「三つの世界」とは言つてゐなかつたのである。ソ聯側がドイツ側（樞軸陣營）に屬するか、英米側に屬するか、この點に闘してはナチスの理論家も今までは明言を避けてゐたが、今やそれは對ソ戰によつて明白となつた今われわれは「我が闘爭」を鮮かに思ひ起すのである。

この問題について淡德三郎氏の「戰爭と人民」の一文は、評論家の混迷と、遂に政治家にあらざる悲哀を表白するものとして、甚だ興味あるものがある。

「人も知る如く、ソ聯はマルクス主義を標榜してをり、マルクス主義は猶太人の運動だといふことになると、一見全く相容れないかに見える英米資本主義とソ聯社會主義とが、何れも猶太人に操られてゐるといふ點で、同一陣營に屬することになる。又實際ナチの理論家は過去に於いてさういふ立場をとつてきた。そしてナチの第一の使命は、人類文明の公敵であるボルシエヴイズムの撲滅にありとされてゐたのである。然し今日でもさういふ立場が獨逸に於いて取られてゐるか否かは、明かでない。少くとも最近のナチ指導者の述べてゐる所から見ると、人類文明の公敵は、英米に地盤をもつてゐる國際資本であり、それのみであるかの如き印象を受ける。然らばソ聯は、同じ

く世界の社會主義化、國際資本の打倒を志す點に於いてやがて、獨逸と協力せねばならぬ地位に置かれてゐるとも解される。

今日、理論的に見て、なほ獨逸社會主義とソ聯社會主義との相違を求めれば、後者に於いては前者に見られる如き猶太人排斥と人種思想とが全然存しないことである。ソ聯を構成する六十有餘の民族に對し、少くとも理論上では、完全なる平等待遇が與へられてゐる。實際は大ロシア民族が優勢であり、指導的地位に立つてゐるとしても、それは其の數的勢力からくる必然の結果であつて、人種的理想に依つてそれが强制されたわけではない。所で此の點でも獨逸の人種思想は、數年前に比し、餘程其の色彩が弱まつてきてゐる樣に感じられる。

獨逸民族のみが優等人種であつて、伊太利民族や佛蘭西民族やその他大小樣々の民族は其の支配下におかるべきであるといふ思想は、少くとも表面上影を消し、諸民族が平等の立場に立つて協力し、以て新秩序を建設しようとする考へが段々强くなつてきた。尤も最初に國際資本の桎梏から脫した獨逸民族が、遲れてその桎梏から脫した他の諸民族を嚮導せねばならぬといふ考へはあるにしても、それは飽くまで友誼的援助であつて、支配者と服從者、征服者と被征服者との關係であつて

はならぬといふ見解が、力說される樣になつてきた。此の點では、ソ聯社會主義と獨逸社會主義との理論的對立は益々緩和されつゝありといへる。同樣の精神に於ける協力が、獨逸とソ聯との間に成立することがあるにしても、今でも少しも不思議に感じられない程である」（改造十六年四月特大號一一九頁）

しかしながら、去る六月二十二日早朝火蓋を切つた對ソ戰は、所詮は獨ソは水と油で、リッペントロップ外相の開戰理由書にのべたとほり、ナチズムとボルシエヴイズムとの根本的對立は、いかなる經濟協定と不侵略條約を以てしても、結局とき難きものであつた。歐洲に於ては、最早中立といふものはあり得ず、獨伊の歐洲新秩序建設に協力するか、舊秩序側につくか、二者選一より途はない。單に經濟的事情のみに於ても然り。更に思想的にこれを見るに、「我が闘爭」に於けるボルシエヴイズム打倒の項を思ひ出すだけで充分であらう。

「總力戰敎書」の著者寺田彌吉氏は、世界における思想潮流を、自由主義、共產主義、全體主義皇道主義の四つの要素に分けて、次の如く述べてゐる。

「日支事變と云つても、恐らく今日では誰の眼にも歷然としてゐるやうに、支那との戰ひと云ふ

よりも寧ろ舊秩序若しくは過渡期に立つてゐる歐米の國々との戰である。而もその實際は、要するに赤化及び自由主義化に對する皇道顯現の精神戰が大きく展開されてゐるのだと見ることが出來るその底に存するものは世界經倫の根本思想が戰つてゐると云ふことである。

勿論第二歐洲大戰にしても、自由主義と共産主義とそして全體主義間の戰ひであると見ることが出來る。之等の三つは相納れないものであつて、一時的の妥協は兎も角も、根本的には歸一するところがなく、必ず最後には勝敗を決する筈である。既にして自由主義は沒落過程を辿る一途であるが、共産主義と全體主義も相容れるところはない。

このやうに世界は今四つの思想要素を以て戰ひつゝあると見ることが出來る。それは思想戰と云ふにしては最も基本的なものであり、或はイデオロギーの戰と呼んだが妥當であるかも知れない。」（同書一七四頁）

スターリンがヒツトラーに引摺られ、マルクス主義がナチスに歩み寄つたとしても、また、獨・伊・ソ聯・日本の共同陣營が政治的政策的立場から一時的に成立し、舊秩序を敲きつぶすこと、英米の國際資本打倒に一致したとしても、獨・伊にしても、天地の公道に基くところの、各々その處

を得せしめる「八紘一宇」の精神――共存共榮の實を擧ぐる新秩序の建設に邁進するといふ點に根本的一致をみ得るや否や必ずしも豫斷を許さぬのである。たしかに萬邦に各々その處を得せしめんとするわが皇道精神と偏狹なる民族主義とはむしろ劃然たる一線が引かれるものあるを感ずるのである。

又『協同觀への志向』の著者神谷茂氏はこの問題に就て次の如く述べてゐる。

「ナチズムの限界はその非科學的なる世界觀の中にも明瞭に現はれてゐる。それは東洋に對する正しい理解を有せず、且つ西洋に於ける眞の反省を缺いてゐる點に於て、眞に二十世紀的なる新しき世界觀たる資格を缺いてゐる。それは歷史、特に現代に於ける世界史的――東洋的なるものゝ眞の意義を知らず、從つてその世界觀は依然としてヨーロツパ的に歪曲された獨斷的優越意識の顯現となつてゐる」と、「ナチズムと東洋的なるもの」の論說に於いて述べてゐるのは、たしかに一考に値するものがあらう。

又森戶辰男氏は思想戰におけるこの問題を捉へて、次の如く論破されてゐる。

「思想戰なるものは、色々な意味に解されてゐるが、人々は非合理的なるもののためにする合理

的なるものに對する鬪爭をもそのうちに含ませてゐるやうだ。しかし、かやうな反知的鬪爭に知性を動員しようとすることの自家撞着は誰人にも明かであらう。次に來るものは思想戰を專ら外來思想排擊鬪爭と同一視する考方である。ひとはデモクラシーはアングロ・サキソン思想、マルクス主義はユダヤ思想、佛教は印度思想、儒教は支那思想といふやうに、あらゆるイデオロギーにその民族性を檢出し、現實の民族鬪爭に表裏して、思想の世界においてこれら一切の外國思想を優秀なる日本思想を以て擊破すべきことを揚言する。だが、かやうな考方は、思想の評價と取捨が民族的好惡や政治的離合によつてでなく、その眞理性によつて決定さるべきである、となす常識に反する。すなはち、マルクス主義が排擊さるべきは、それがユダヤ的であるからではなくて、具體的眞理性を缺くからであり、これにたいして日本思想の優秀はその具體的眞理性に求めらるべきであらう。さらに、かやうな偏狹な排佛毀釋的な外來思想退治は二つのハイ外主義、すなはち拜外主義と排外主義との克服の上に、その民族的發展を遂げて來た我國の文化的傳統にも背戾する。吾々は今日もはや劣者として外國思想に拜跪し、又徒らにその威力に恐れて耳を蔽ひ目を塞ぐ段階を通り越して優者としてこれを批判し、採用捨短の操作を行ひうる地位に立つてゐるのではあるまいか。したが

つてこの點における吾々の地位は大化の新政及明治維新におけるよりも少からず、有利であるやうに思はれる。それに照應して、吾々はより大きな國民的確信を以て廣く世界に知識を求めねばならぬのである。なほ、實踐においてもかやうな思想的排外主義は獨逸思想にほかならぬナチズムや伊太利思想にほかならぬフアシズムの廣汎なる攝取とも矛盾し、また識者が再三指摘してゐるやうにわが日本が東亞の諸民族を率ゐて彼らと共に建設せんとする謂ゆる東亞協同體の指導精神ともなりえないものである。

要するに、國家・民族間における宣傳戰程度の意義しか認められない卑俗の意味の思想戰には、たとひそれが實際上必要であつたにしても、多くの有爲なる知識階級を動員する必要もないし、また、彼らを動員しうると考へるのは餘程の樂觀であらう。これら二種類の思想戰に對比して第三の思想戰は、その最も根本的な形態であつて、自然の秘密と社會の秘密に對する人類知性の闘爭を意味する。さうしてこの思想戰における勝利こそ汎く人類が、特に現時局下におけるわが國民と國家が、何よりも必要とする自然征服の技術と社會調整の技術とを吾々に確保して呉れるものなのだ。思想戰の必要を高唱する者が、もしも第一第二の思想戰のことばかりを頭に置いて、この第三の思

想戰の至重性を閑却するやうなことがあれば、それは知的動員の根本義を忘れたものであつて、宗派的偏執の最も悲しむべき結果といはねばならぬ。

何となれば、知的動員の要諦は、あらゆる不必要な摩擦をさけて知識階級の精神的創造力をこの最後の思想戰に集中することに存じ、この鬪爭に勝利をえた國家・民族が戰爭において武力の勝利者となると同じく、平和における文化の勝利者ともなりうるからである。」（森戸氏著「戰爭と文化」十六頁—十九頁）

いさゝか長きに失する引用であるが、森戸氏が「第三の思想戰の至重性」と稱せられるところのものは、「マルクス主義が排撃さるべきは、それがユダヤ的であるからではなく、それが具體的眞理性を缺くからであり、これにたいして日本思想の優秀はその具體的眞理性に求めるべきである」といふ具體的眞理性の追究にあり、傳播にありと見られ、思想戰を專ら外來思想排撃鬪爭にありといふのは、森戸氏の所謂「卑俗なる思想戰」として輕侮の眼を投げてゐられるのであるが、われわれは「あらゆるイデオロギーにその民族性を檢出し、現實の民族鬪爭に表裏して、思想の世界においてこれら一切の外國思想を優秀なる日本思想を以て撃破すべきことを揚言する」ことは、むしろ

必要大いにありと考へるのである。

何故ならばマルクス主義が具體的眞理性を缺きたるために排撃されたといふ批判は正しい。しかし、マルクス主義が何故具體的眞理性を缺いてゐたのであらうか、それはマルクス主義がユダヤ的であつたところに限界があるのである。ゲルマン民族主義に根ざすナチスの世界觀が、その優秀性にも拘らず、最近多少の修正と轉向を迫られつゝありといふのは、八紘を以て一宇となすといふわが肇國の大精神――日本民族の歴史的使命とは根本的に隔絶するところの限界點がゲルマン民族自身の裡に存するからである。

森戸氏のいふごとく「廣く世界に智識を求める」ことは防げるものでなく、進んで大いに攝取すべきではあるが、それは海外思想の攝取によつて正から反に進み、それが合成されて新なる正を形成するといふ唯物辯證法的な方法に立脚してその「眞理性」を追究するためではない。日本精神の中核たる感情――皇道――は、この感情と合せざるものは、總てこれ敵性とする。しかも、この感情に合する文化は、わが民族が歴史的に構築した倫理の道に合し、この道を共に歩むものでなければならぬ。この道はわが　皇室に連り、　天皇に結ぶものでなければならぬ。これを

中外に施して悖らざるものでなければならない。

皇道の世界宣布は、臣道の世界的規定でなければならぬ。この道を一すぢに歩む日本人及日本文化の體系が海外文化と結合して、いかなる新なる倫理精神を形成するといふのか。海外において日本精神の道と同じきものは、これを振興せしめ、然らざるものはこれを清算せしめ、日本人と等しく、陛下の赤子として聖恩に浴せしめ、以て東亞の萬民、否、八紘を一宇として、萬邦をその處に安んぜしめんとするのが日本精神であり、皇道の世界宣布でなければならぬ。

それは優秀なる日本思想を以て外國思想を擊破することである。擊破といふ言葉が妥當でなくば少くとも慴伏せしめることである。

わが國としては、本來立派に皇道イデオロギーを所有しながらも、思想が戰の有力なる攻擊武器であるとの自覺や研究に缺けてゐたため、日本思想の優秀性に對する自信をも喪失して、充分なる對抗が出來ず、歐米から引摺り廻され、徒らにその後塵を拜してゐたに過ぎない。

森戶氏は、民族的支配が思想・政治・文化の支配を決定することを理解されないのであらうか。自由主義の世界的支配は、同時にアングロ・サクソン民族の世界的支配でもあつたのである。

「近代ヨーロッパが東漸し、東洋植民地化が決定的な勢で終止符を打たうとしはじめた時、猛然として日本は反撥した。抑止されてゐた剛毅な建國精神は、火柱のごとく天を焦して東洋の一角に燃えあがつたのである。

だが意外な反撃の手強さに狼狽したイギリスは、新しい思想的謀略を以て日本の倭小化と發展の阻止に努力しはじめた。日本の勢力さへ封じて置けば、支那大陸は自分達の思ふまゝになるだらうこの思想的謀略の一翼を持つたものが、非科學的科學の對日輸入である。

日本人の前には、夥しい數式や、難解な論理の堆積が「學問」そのものとして與へられた。

この複雑煩瑣な論理的概念的城砦を陷れねば、科學の精髓は摑めない。

世界にも珍しい一大教育組織と長期間の教育、而も一分をも爭つて注ぎ込まれる「知識」の洪水。

蒼ざめた日本インテリゲンチヤは、概念の過剩に喘ぎつゝ、知識階級たることの特權的意識に瘠せた胸を昂然と張つた。

だがそこに何があつたか。せゝこましい論理主義、實際主義そして知性主義!」(「戰ふ日本經濟」

八三頁—八四頁）

「ヨーロツパ的社會の否定は、ヨーロツパ的科學の否定につながらねばならぬ。」（同書九〇頁）

われわれが今ナチスと共鳴し握手するところの思想的根據は、ナチス科學が、近代的ヨーロツパ社會の否定によつて、新しい科學の創始を念願し、自由主義的思辯方法を否定せんがために、自由主義個人主義の原理を奉ずる英米——アングロサクソン民族への鬪爭をなしつゝあるからである。

思想の支配は民族の支配につながり、民族的支配はその思想的支配につながるのは、丁度經濟の支配が政治の支配につながり、政治の支配はさらにまた經濟の支配を深化すると同樣である。さらばわれわれは「あらゆるイデオロギーにその民族性を檢出」せんと欲するのである。

「世界は個人主義原理を奉ずる英米——アングロサクソン民族の指導する國家を成さんとしつゝあつたが、今や全體主義原理を以つて進む日・獨・伊の民族國家に依りて、再組織されようとして居る。個人主義原理が正しいか、全體主義原理が正しいかは此の鬪爭の結果が證明するであらう。此の鬪ひ、此の證明が、神の裁判として、宇宙理念の聲として、宣言せらるるであらう。天に聲なく、鬪爭を以て語るであらう。勝ち誇る民族精神こそが、眞に宇宙理念を現象するものであると、

勝たんが爲には眞の民族精神に徹しなければならぬ。
民族國家として純粋なる精神と構造を有する皇國が當然個人主義制度を一擲し、世界の指導國家たるべき使命を有することは充分に信念し得る根據を有するのである。その精神が倫理精神であり統治者の皇道が人民の臣道を規定し、行動組織がそのまゝ臣道實踐組織となり、一億が一心となり一行動體となる。又なり得べき我が皇國にして、眞に世界の指導國家たり得るのである。然し我が國の現狀には、未だ多くの個人主義自由主義原理の支配する個體と諸制度が存する。先づかゝる輩と、此の諸制度を清算しなければならぬ。各國は自ら再構成をしながら世界の再構成に進みつゝある。我が國が再構成を急速に完了せざるに於ては、あたら金甌無缺の國體を擁して、之を他の民族の膝下に置かしめ、やがては異國精神に依りてこの國體に瑕瑾を付せられないと誰が斷言出來ようか臣節を以て道となす我々は、今や斷乎として一刻も早く國內を再構成し、全世界の眞只中に、敢然として皇國の御旗を進めねばならぬ。」（八重樫運吉氏著「國防國家の理論と政策」二〇四頁）
敢然として皇國の御旗を進めんとする時、この御旗の前に、その進軍を阻止すべく、立ち塞がつたのが蔣政權であり、英・米兩國の自由主義的支配勢力であつた。

滿洲事變にせよ、支那事變にせよ、われわれは宣戰布告なき戰ひとして始めたのであるが、このこと自身がすでに、世界に正しき秩序を律するための戰ひであり、わが戰爭哲學による——皇道主義の戰爭目的を遺憾なく發揮しつゝある。

この點に關し「總力戰敎書」の著者寺田氏は「本來我が國是としては、肇國の精神に現はれてゐるやうに八紘一宇であり、四海同胞たることを以て眞の秩序とする。從つて元々良民を敵としたり捧りあげたりすることは毫もなく、唯四海同胞として生きんとすることに對すると云ふのである。だから、宣戰布告と云ふ如きものは在り得ない。このことは日支事變と云ひ、或はその後に來るべき如何なる事變と雖も、例外はない筈である。ルーデンドルフが「國家總力戰」に於いて述べたりソ聯の「戰爭敎書」が述べてゐるやうな宣戰布告なき戰爭の意味とは、凡そ根本的に戰の精神を異にしてゐる。之等は要するに戰略上の手段から來てゐるのみである」（同書五〇頁）と、いつてゐるが、けだし適切なる言といはざるを得ない。

わが皇道主義に發足する戰爭哲學への認識と、自覺の缺如は、思想戰の基準を見誤ると同時に、わが總力戰の根本精神から逸脫せしめることゝなる。われわれの戰ひが、たゞ單に戰略的目的から出

發せるものにあらずして、皇道そのものの宣布にある一種の廣汎なる思想戰的色彩を豐富に有するのは、實に日本精神による戰爭觀が西歐戰爭觀と根本的に相違する點にこれを見なければならない。

「日本戰爭學」の著者多田督知氏は、次のごとく、明白に答へてゐる。

「要するに日本は和の國である。小和を排して大和を貴び、大和を貴ぶが故に聖なる爭、聖なる戰爭を重んじて邪なる爭、邪なる戰爭を克服する。之こそ日本精神の人生哲學であり、戰爭哲學、平和哲學であると共に我が國史の踐み來りたる跡、實現し來りたる精華でもある。

以上によつても瞭らかなるが如く、我が國の戰爭目的は正しき平和の實現にある。妥協苟合の現狀維持的釘づけ平和ではなく、彌榮の正しき平和――聖なる皇御戰が、或は陽に或は陰に、不斷にその稜威を發揮して、彌々美しく益々住みよい恒久持續の平和を實現してゆく――こゝに我が窮極なる戰爭目的が存するのである。その中にあつて「天下億兆一人と雖、其處を得ざるなく」萬民悉くが彌榮えの實を具顯していく平和――更に換言すれば、一黨・一派・一國・一勢力の壓制搾取の桎梏から個人を救ひ各民族を解放し、憐れなる隣邦を再生せしめ、窮極に於ては全世界をも濟度す

ること――これが我が戰爭の窮極目的であり、之がために、所謂「破邪顯正」の劍の發動に俟ち、俗に謂ふ「天に代りて不義を討つ」皇軍・神武の軍隊・「アキツミカミ」「アラヒトガミ」の軍隊の出動を伴ひ、以て徹底的に邪惡を擊滅し遷善してゆくこと――これが我が陽はなる戰爭の直接的なる目的である。」

だが、窮極永遠の目的が、全人類のための望ましい平和再建にありとはいへ、皇道の御旗の進軍を阻止するものに對しては、飽くまで斷乎たる破邪顯正の劍を以て打破しなければならぬのは當然であるが、この邪破顯正の劍を揮り上げる以前において、われわれは皇道を內容とし、日本精神を彈丸とする强烈なる思想戰を何故に果敢に展開しなかつたのであるか。

すでにわれわれはドイツの第五部隊の活躍において、第五列の强みが、イギリスのそれの如く、金で買はれたスパイにあらずして、その思想的共鳴者たる事實にあることを見て來たのであるが、ナチス思想にしてすでにかくの如き共鳴者ありとするならば、世界を光被する皇道主義において、何故に挺身的なる支持者を喚び得なかつたのであるか、それはわれわれが重要にして意義深き思想戰の鬪爭戰術を知らなかつたがためであらうか。その準備に缺くるところあつたがためであらう

か。

しかり、口を開けば、直ぐに皇道宣布を言ふ日本に於て、我が思想戰の眞の意義がいさゝかも自覺されず、その準備と研究は皆無といつてもよい狀態にあつた。

この點、文武官民の如何を問はず、深刻に反省して見る必要があるであらう。それが證據には思想戰に關する日本主義的獨創に滿たされた一冊の研究書もなく、また、かゝる篤志な研究に何等の援助の手もさし延べられてはゐないではないか。だから、三千年來萬邦無比なる皇國の下にありながら、その最高學府において、最高の敎養を受けたる有爲の青年學徒が、數年前になんと叫び、如何なる實踐をなしてきたか。「我等の祖國勞農ロシヤを護れ！」驚くべし、これが彼等の心からなる叫びであつた。

われわれは日本の輝かしき皇道宣布において、ロシア人の中に、支那大陸に、自ら起たしめ「我等の祖國日本を護れ！」と絕叫するものを一人と雖ども持ち得なかつたのは、何故であらうか！

「日本戰爭學」の著者は、同書の執筆を畢るに當つてこの問題について、かくの如く實に深刻なる批判と反省を促してゐられる。そして、最後に――

曰く「日本の皇道宣布或は日本精神の宣布なるものは如何にして効果あらしめるべきでありませうか。その日本精神が日本國内に事實の中に、充ち滿ちて居る――政治經濟、法制文教に至るまで最早國體の明徵、日本精神の實現は叫ばぬでもよい狀態にまでなつてゐるでありませうか。」

「この國内改新、國體明徵の實を擧げてゐなければ、右に述べた思想攻勢はその實績を收め得べくもない。のみならず更に消極的なる思想防衞さへ出來難い。」（同書五二九頁）と。

思想戰、經濟戰、武力戰、その他總力戰における勝利への鍵は、かくて國内體制の總力戰的再編成の過程にその一切が握られてゐることを知らねばならない。

故に、われわれは何等の遲疑することなく、逡巡することなく、自らのなすべきこと――臣道實踐――を果敢に斷行せねばならぬのである。

第八節　空襲下の後方攪亂と精神力

私は最近イギリス内務省の發行せる「爆擊に對して如何に家庭を護るべきか」といふ英當局が一般市民に與へたパンフレットとエス・エベリン・トーマス氏の小冊子「戰時紀律必携讀本」（Evey

mans Guids. to the War Regulatiorn）とでも題すべきものと、更に磯部佑治氏著「倫敦防空戰線」の三書を讀了して、空襲下における後方攪亂と國民の精神力等の問題について、色々考へ研究する機會に惠まれたので、この問題を俎上にのせてみたい。

クラウゼヴイッツは、その「戰爭論」において、戰略上における軍隊の精神的要素を相當高く評價してゐるが、今日のごとき國家總力戰の戰爭形態をいまだ豫想し得なかつたクラウゼウイッツは、戰爭における精神的要素のモーメントを、將帥の才能、軍隊の武德、軍に於ける國民精神の中に見出し、大略次のごとくに述べてゐる「精神的諸力として特に顯著なる作用を呈する二性情がある。膽力と堅忍の精神である。膽力は迫り來る危險を超越し、よく獨自なる活動の原理となるもので、戰爭に於ては空間的、時間的及び物質的數量の計算より生ずる成功率以外に、膽力が齎らす成功率があるのを認めねばならない。故に膽力は將帥たる第一條件とも言ふべく、膽力なくしては卓越したる將帥は不可能事に屬する。又堅忍は戰爭に於ける無限の艱難、辛苦、窮乏を打破し、赫々たる成果を獲得する唯一の途である。肉體的精神的に虛弱なる人物が、稍々もすれば之等戰爭の困難に

壓倒されてしまふに反し、唯强烈なる意志力を有するもののみが、最後の目的を達成しうるものである。」と。

クラウゼウイッツが問題にしたるは、結局軍隊內に於ける國民精神力の問題であつて、國民一般の精神力の問題を直接その對象としてゐるのではなかつた。

しかし、空軍の急速なる進步と發達によつて、前線銃後の差別が撤回され、戰爭の方法が著るしい變化をなした今日においては、直接戰鬪に參加しない如くに見える一般國民も事實戰爭中にありては、老弱男女を問はず、常に砲煙彈雨にさらされつゝあるのである。少くとも、國內の一般住民が空襲による攻擊から直接保護されることが出來なくなつた今日の戰爭において、一般國民の武裝と訓練が必要であることは無論であるが、それと同時に、一般國民の精神力が戰爭における重要なる要素となり、從つて、勝敗を左右する有力なる動因となることは論を俟たないであらう。何故なら國內の一般住民をも總力戰は、將兵と同樣に、軍隊的組織への編入を要求しつゝあるからである。

英國空軍司令官ガロード將軍は空軍學校卒業生に對して、次のごとき興味ある訓示を與へてゐる

「海の提督、陸の司令官の心得べきことは敵の海陸軍自體の力、配置、士氣等であり、その軍略

はこれの撃滅にある。
然るに空軍司令官の目的は敵の銃後の撹亂にある。
このためには、先づあらかじめ、敵國民の政治、社會、經濟上に對する知識を有たなければならない。
さうして常に心得べきことは、局所撃滅にあらずして、全面的な組織の破壞であるといふことである。
その方が經濟的であり、且つはるかに効果的であるからである。
又、現代の戰爭に於ては、戰後平和に復した後の利益も考へて置かねばならない。即ち將來の市場を全滅せしめることは、賢いことでないからである。
この意味に於て空襲により最大の効果をあげんとせば、その前に、更に十二分に、敵の政治、社會、經濟上の知識を得て置かねばならないことになる。
即ち、先づ、國民の生活力を維持する物資の配給系統や貯藏所を知つて置く必要がある。
その調査が出來たなら、今度は敵の國民生活の心臟部たる「これをやられたなら全體の組織がこ

はれる」といふ區域を探さなければならない。

さうして最後にその國の國際的な經濟關係までを調べる。

これ等は一應戰鬪と關係がないやうに見えるが、實は最も重大な空襲上のヒントを與へるのである」云々………

ガロード將軍のこの言は、空軍の任務を述べ盡くして餘りある至言であるが、空軍の役割が壞滅にあらずして、組織の攪亂にあり、かゝる時代にあつての空軍の戰法が、先づ國民生活の破壞をその重要なる目的となつており、そのために、第一に政府機關を破壞すること、第二に市民生活の組織機關の壞滅に向けられることとは、目前の大戰において、すでにわれわれの體驗し、或は目擊しつゝある事實である。

ロンドンに繰返されるドイツの執拗なる空襲と爆擊が、敵の戰鬪力がその對象となつてゐるよりも以上に、敵の民族の組織力——一般市民の精神力の破壞に注がれてゐることは、火をみるよりもあきらかなことで、イギリス參謀の智將フラー將軍が「重爆彈は、民衆を地下に逐ひこむため、燒夷彈は民衆を屋外に逐ひ出すため、毒ガス彈は戶外で民衆を抑へるため、遲發彈は氣力の回復を妨

げるために、使用される」もので、空爆は民衆の恐怖と攪亂による精神的打擊を狙つてゐるのだ。と、いつてゐるのも興味ある解釋である。

「爆彈の偉力、人間への脅威、怒濤の如き人間社會の混亂は、爆彈の唸りを身近に聞き、深刻に體驗した人々によつてこそ、はじめて想像し得られる處である」と「倫敦防空戰線」の著者磯部氏は語つてゐるが、一日百五十トンから、多きは三百トンの强力爆彈や、燒夷彈の連日連夜の、ドイツ空軍の飽くことを知らぬ執拗なる爆擊に對して、今日なほ依然として、その組織の混亂を來たさず、精神的動搖の僅少なるイギリス國民に對しては、流石に一片の敬意を表せざるを得ないものがある。また、空爆に對する防衞の死闘をくりかへす人間の强靱なる抵抗力に、いまさら驚嘆する次第であるが、イギリス國民に、かゝる根强き底力の基礎となつてゐるものは、果してなんであらうか？

「空襲、然も爆彈が都市の頭上から降り注ぐ時こそ、日頃の忍耐、如何なる試練にも堪へ得る、然も政府と民衆の一致團結の協力が、絕對に必要なのだと、この靜かな雰圍氣に久し振りにおかれて私は考へた。勿論强力な防備は必要であり、完全な避難は要求されてゐる。だが防備に伴ふ國民

的覇氣、「これが戰爭なんだ」と謂ふ氣構へが絶對的に大切であると云ふことを、今更乍ら心から知らされた感じだつた。」（九一頁）と、「倫敦防空戰線」の著者は、その痛苦の體驗から述懐されてゐるが、ロンドン市民に、かゝる國民的な覇氣と戰鬪的精神がないならば、いかに鐵壁の防空陣も防空施設も、たしかに何等の防衛の役割を果し得ないであらう。

われわれはドイツ空軍の勇敢にして執拗なるロンドン空襲、イギリス全土爆撃に感嘆するばかりではなく、イギリス國民とその政府との堅忍不拔の精神力と用意周到なる防禦組織に對して、更に一層關心を抱くと共に、多くの教訓を學びとらなければならぬであらう。

空襲に對する防衛陣とその施設については、私よりも更に適當なる人がこれについて研究されつゝあることゝ思ふし、私には到底それを語る資格はないが、空襲による銃後の攪亂に對して、いかにイギリスにおいて準備されつゝあるか、また、空襲に耐え得る精神力は、いかにして養成され、又育成されつゝあるかの問題についてのみ、いさゝか研究してみたいと思ふ。

イギリス政府當局は、イギリス國民にいかなる呼びかけをなすことによつて、彼等國民の戰爭不安を一掃し、かつ、その戰鬪的精神を獲得したか、といへば、それは先づ第一に現實の恐るべき事

態に對する明確なる認識を國民一般に要請せる點にありと、私は考へるのである。

イギリス當局は、次のごとく國民に訴へてゐる。

「現在英帝國が如何なる立場にあるかを想起すべきである。獨軍は自國の領土、若くはノールウエイ、デンマーク、オランダ、ベルギー及びフランスの各地から、次々に又は一齊に英本土攻略の作戰に移るであらう。だが、我と彼との間には英佛海峽がある。しかも我が海軍はこの海上に君臨してゐる。從つて我が英帝國は獨軍の蹂躙に委せた諸國とは自らその事情は異り、かゝる苦慘をなめるべき地位に置かれてゐない。我が戰線は簡單に擊破されるものでない。我々には精銳なる陸軍と空軍がある。だがこれは最後の切り札である。しかも充分の先見と大膽なる計算において最も愼重にこの切札を使ふべきである。

併し乍ら記憶すべきことは、我が國防線は常に難攻不落のものと考へてはならぬことである。これこそフランス軍がマヂノ線において天下に示した失敗である。如何なる防備といへどもこれを拔き、又は包圍する方法はある。同時に又敵軍のこの攻擊を食ひ止めて、困憊に陷れ、これを擊退することも出來るのである。我が海軍は敵軍の艦船を擊沈し、その交通を遮斷することは出來るが、

何處に於ても常に直ちにその眞價を發揮するといふ譯にはゆかない、中には敗北の運命を喫するものもあるであらう。我が空軍も亦敵上陸軍の飛行機を撃墜することが出來るが、數において劣つた場合、却つて撃破さるゝ運命に直面するものもあらう。我が海軍及び空軍の使命とする處こそドイツ上陸の大軍、これに續く應援軍及びその兵站の本道を食ひ止め、大規模の英本土侵入計畫を挫折させるにある。かゝる場合敵部隊が上陸せば、これを向ふに廻して立ち向ふのが、我が國防義務兵の使命とする處である。」（前掲書P・二二三）

かくて、イギリス當局は、英本土に二百萬の正規軍のほかに、百九十五萬の地方國防義勇軍の編成に成功した。

同書は、なほ續いて、次のごとく述べてゐる。

「吾々は獨軍の大規模なる英本土上陸はあり得るとは思はない。イギリスの準備、ことに義勇軍が占めてゐる重大なる役割は、獨軍參謀本部をして相當の考慮を拂はしめてゐるものと確信する。獨軍の英本土上陸は如何にこれを過少に見積つても、敵上陸部隊にとつてピクニックではあり得ない。

若し失敗せばヒットラーの自國及び他國に對する威信は立處に失墜するであらう。從つて義勇軍の參加者は我がイギリスの國防作戰において既にその職責を盡してゐるものと、合理的に信じて可なりである。

吾々が獨軍の侵入に對して確固不拔、然も賢明なる準備を爲せば爲すだけに、その上陸作戰は機會を失ひ、たとへドイツがこれに着手してもその成功の機會は少くなるであらう。」云々……と。

（P・二二三——四）

そこで敵軍ドイツの英本土上陸作戰において海空兩道から襲ひくる侵入軍に對する豫想され得る狀態を述べ、また、それに對して、いち〳〵詳細なる擊退の戰術を傳授してゐるが、かゝる大膽率直なる訴へと徹底せる認識を國民に要請してこそ、却つてイギリス國民の精神的安定と當局への信賴は增大されたことが想像し得られるのである。

わが國朝野の名士がなされる講演や著書は、これにひきかへ餘りにも安價な樂觀主義に滿たされてはゐないか。事態はイギリスの如く急迫してゐるとは、勿論思はないが、國民の精神的な眞の協力と安定をかち得るには、國際的軍事的立場における自國の利害得失の陰蔽にあらずして、却つて

眞相の親切克明なる解說にあることを知らねばならない。勿論、それには一定の限度もあり、その表現の技術的方法も十分考慮されねばならぬが、祖國と運命を共にせんとする決意を抱くものにとつて、祖國の危急存亡の狀態が、常に明白に訴へらるべきであることは當然であるといはねばならぬ。ヒットラーもこの手段を使ひてドイツ國民の協同體觀念の形成に成功したのであるが、イギリスにおける今一つの成功は、かゝる事實の求訴によつて、ヒットラーがその國內組織においてなしたると同樣なる、全英國民の精神的武裝であり、又國防軍百九十五萬の建設による物質的組織的武裝である。ここにおいてわれわれは國民の精神安定と鬪爭心も、結局はその背後に組織的物質（武力）的保證によつて、より多く安定性が與へられるものであるといふ事實を知らねばならない。

イギリス當局は、かくの如く獨軍の對英上陸總攻擊を豫見し、獨軍がいかなる行動に出るであらうかを軍事的に推測しつゝ、義勇軍と國民防衛の任務を斷えず說きつゝあるが、敵軍による銃後の攪亂戰術に對しては、又次の如く豫想し、そして、次の如く種々對策を講じつゝある。

イギリス當局は、ポーランド、オランダ、ベルギーが一瞬にして獨軍の鐵蹄の下に蹂躙されたのは、一にその市民が驚愕措く處を知らなかつたためである、と警告を發し、獨軍の侵略に直面して

斷じてかゝる驚愕、我を忘れるが如きことがあつてはならぬ、と嚴重に戒告し、避難の命令のあるまで、かくの如き醜態を斷じて晒すべきではないと、教へてゐる。

そして銃後の攪亂をなす第五列と落下傘部隊に對しては、次の如き周到なる指令を發してゐることは、特に注目さるべきである。

「ドイツが我が銃後國民を攪亂し、恐慌を起さしめるべく、ドイツは必ずや流言を飛ばし、事實相反ずる事項を發するであらう。かゝる場合市民は以下の司令に基いて行動すべきである。

流言を信じ、これを更に流布する勿れ、若し危機に際し何等かの司令を受けた場合には、この司令の眞僞を充分確かめよ。市民はその警官と警防團監視係は見て知ることが出來るであらう。沈着であればかゝる司令を發する陸軍将校が、イギリス人なりや僞將校なりや立ち所に判るであらう。若し自信なき場合には警官若しくは監視係に尋ねよ。市民はその常識を働かすべし。(中略)

若し敵軍の落下傘部隊が極めて近くに着陸した場合、敵落下傘隊員は直ちに勇猛果敢な攻撃に移るものと思つてはならない。彼等は土地に全然不案内であり、何等の食糧もなく、同僚の安否さへ知らぬ。從つて彼等は食糧を求め、交通機關の提供を要求するかも知れぬ。彼等はその着陸地、同

條の安否、及び我軍駐屯地の模様について報告を受けることを强要するかも知れぬ。
かゝる場合獨軍に對して何物も與へてはならぬ。何事の情報も與へること勿れ。その食糧と自轉車と地圖とは直ちに隱せよ。敵がガソリンを所有してゐるかどうかを確かめよ。市民にして若し自轉車、オートバイ等を所有してゐたら、これを使用しない時には、他人の使用不可能の狀態として置くこと。
若し自動車倉庫の所有者である場合には、ガソリンのストック及び他人の自動車を保護することに專念せよ。敵侵入軍の最も困難とする處は交通機關とガソリンの入手であることを常に念頭に置くべきである。」云々……（P・二三五――七）
と、詳細かつ具體的なる指示をなし、最後に、敵落下傘隊員又は第五部隊は、組織ある抵抗に對しては斷じて無力であり、彼等はこの組織を破壞し去つた時にのみ始めて成功するものである、と結んでゐるが、イギリス市民の精神的安定と國民的覇氣とは、必ずしも懸聲のみによる激勵や口頭禪式な信念によつて生れるものでないといふことを、われわれは學ばねばならない。
われわれ人間が自殺する時、或は失望する場合は、生きる方法を見失つた時である。戰爭におい

て、その戰鬪的氣力を失ふ時も亦、戰鬪の方法（戰術）を發見できない場合、適當にその方法が指示されない時に多いといはねばならない。

國民的覇氣と戰鬪的精神の育成は、かくて、全國民に自國の運命と客觀的情勢に對する理解の徹底であり、同時に、その最後の一人に至るまで戰鬪の方法を指示し、且つ訓練し、指導する組織を持つことにあるといふことを知るべきである。

なほ、長期戰であればあるほど、爆撃がひどければひどいほど、精神的緊張が必要であり、それに比例して、娯樂と慰安による精神的遲緩が必要であることは、ロンドンの長期に亘る空襲と爆撃によつて如實に敎へてゐるところである。ロンドンではこの猛烈なる空襲下にあつて平常通り、盛り場の玉ころがしも、空氣銃遊びも、映畫館も、劇場も開かれており、音樂會も催され、ダンス・パーテイも開かれ、スポーツも男女共に樂しんでゐるし、ゴルフも森の彼方からドイツ機の爆音が迫るまで續けられ、獨機が來ると、森の繁みに隱れ、去れば又ノコノコと出て來てクラブを揮つてゐる、と傳へられてゐるが、娯樂に對する短見淺薄なるわが國一般の見解と、わが當局の娯樂政策に對する戰時再編成が、今少し眞劍に、かつ切實なる問題として考慮されねばならない。

ドイツのＫ・Ｄ・Ｆ（歡喜力行團）の信條には「吾人が肉體的にも、精神的にも健全なことは、國家に對する各自の神聖な義務である。」と說かれてゐるが、戰時下の國民の戰鬪的精神の育成に對して、政府當局にその義務があると同樣に、適當なる娛樂と慰安を與へることに依つて、國民を精神的にも肉體的にも健全ならしめ、かつ永續性ある抵抗力を養成することにも、わが當局は多大なる關心と共に、進んで多大なる物質的犧牲をも拂ふべきである。

空軍の偉力を新に附け加へた現在の戰爭の新樣式が、敵の一般國民の神經と精神に對する直接攻擊によつて、勝利の手段を發見しようとしてゐることは、最早何等の疑ひも抱き得ない。從つて、その戰術の狙ひどころは、あらゆる形式、あらゆる手段を以て、敵軍並に敵國民の恐怖を確實に起すことにあり、敵國を一時的にも動搖と狂亂に陷らしめんとする戰法は益々過酷を極めるであらう。

されば、國防の安全性は、その國民の精神的安全性に依つて決定され、國民の精神的安全性は、國民的覇氣と攻擊的精神の旺盛さの中にあり、しかも、最も大切なることは、國民的覇氣と攻擊的精神の育成は、結局爲政者の掌中にその死活の鍵が握ぎられてゐること、解り易くいへば、政府當

局の政策の優劣によつて「どうでもなる」といふことを知るならば、今更ながらその責任の重大さを痛感しなければならない。イギリスのあの極惡なる外部的條件と困難の中にあつて、あれほど强靱にして覇氣ある戰鬪的精神を依然として確保しつゝあることを思へば、このことを飽くまで斷言するを憚らぬであらう。

第九節　國內宣傳活動の再編成

一、國民の精神的協力と情報局の任務

客年の十一月、極めて未熟なる拙著「ドイツ的戰略とは」――戰爭と謀略・宣傳――の硏究に關する一書を公にした頃、丁度わが情報局は、新しい官制を得て漸く生誕せんとしつゝあつたので、私はその貧しい著書の扉に「この書をあらたに生まれんとする情報局に捧ぐ」と書いたほどであつた。それから旣に半歲が、私自身にとつてばかりでなく、實にわが情報局にとつて空しく過ぎ去つたのである。

戰時における貴重な半ケ年が、情報局のために空しく過ぎ去つた、といふのは、內閣情報部から

情報局へと、官制とその機構の上に大なる推移と變革があつたにも拘らず、また、新に生れた情報局は、直ちに新鮮なる精力を以つて强力な宣傳活動を展開し得る内外の客觀的情勢に惠まれてゐたにも拘らず、すくなくとも私の眼には、絕好の條件を空しく逸し去り拱手傍觀の態度を以て、この半ケ年を無爲に過したとしか思へないのである。

現在情報局が宣傳分野において内外に打つべき手は澤山あるが、對外宣傳と軍事宣傳は暫く別として、私の見解に誤りなくば、今日最も緊急缺くべからざる仕事は、總力戰態勢整備のための國内宣傳であり、聖戰完遂と東亞共榮圈確立のためのわが國民の覺悟と戰鬪的精神の昻揚及び團結のための心理的協力とでなければならない筈である。

近來稀なる快著といふべき「戰ふ日本經濟」の著者西谷彌兵衞氏は「ドイツ經濟の成功は、その統制が資本家の自由的活動に俟つ自主的統制にあつたがためではなくて、戰爭經濟における主體としての戰爭目標が明確に而して嚴格に指示されてゐることが注目されねばならぬ」といみじくも警告をされてゐるが、ドイツ統制經濟の成功は、たしかにナチス・ドイツの戰爭目的が國民の最後の一人に至るまで徹底的に理解され、また嚴格に明示されてゐたためであるが、他の一つは、ドイツ

においても筋肉勞働者も普通人も劃一的な食糧の配給が當初行はれたために、筋肉勞働者から不平が起つた。その時直ちに内相をしてラヂオ放送をなさしめ「筋肉勞働者が普通人と同じ配給量では困ると云ふ聲がある由であるが、成るほどこれは道理である。政府も目下非常に多忙であるので、そこまで手が屆かなかつたのであるが來週から早速改める事とした。」と、勞働者の云ひ分を間髮を入れず採用し且つこれを是正したのである。

また、天候の急變によつて外氣溫度が下降すれば、早速バターの配給量を一週間一人八〇瓦を百瓦に增し、これを放送宣傳する。かくてドイツ國民は外氣溫度の變化につけても政府は國民の健康をこの戰時の物資不足の折にも心配してくれる、これなら大丈夫だと云ふ信賴を更に增すのでありまた誤れる配給量是正によつて、却つてその信賴を增し、國民の不平を鬱積せしめないようしたのである。政府は戰時下における各國民の忍苦報國の精神を濫用してはならない。

ドイツ國民の政府當局に對するかゝる信賴と感謝と感激の念を抱かせること、經濟統制における國民の心理的協力をいみじくも獲得する術――即ち、宣傳を心得てゐたからこそ、嚴格なる經濟統制、食糧統制に成功し得たのである。

從來までの日本の統制が成功しなかつたのは、單に官僚的統制の不手際のみにあるのでなく、戰爭目的の重大なる意義の不徹底と、かゝる心理的協力を機敏に把握し得なかつたことにあると、私は思つてゐる。しかも、この仕事を成功的になし遂げ得るのは、商工省や内務省ではなくして、實は宣傳省であり、わが國に於ては情報局でなければならない。

國民の精神的安定と政府への信頼なくして、また戰爭目的の偉大なる使命についての感激と昂奮なくして、果して戰鬪的精神の昂揚があり得るであらうか？　しかも、かゝる精神的安定と信頼と感激を得る根據なるものは、けだし國民戰時經濟の確保であり、物動計畫への信頼、經濟統制への信頼と心理的協力によつて始めて發生するのである。

わが情報局はかゝる重大なる仕事の遂行について果していかなる役割をなしたであらうか！商工省や内務省のこの仕事に對して、いかなる協力と援護をなしたであらうか！國民の戰時下における微妙複雜なる動向を察知し、また把握するのは、またそれが出來る人物を用意しなければならぬのは、どこよりも先づ情報局でなければならぬ。

二、宣傳手段を再檢討せよ！

私はいま情報局の過誤と怠慢と無能の實例を、いち〳〵ここに列擧することを好まぬし、また、紙上に公表すべからざるものも多いので、その罪過をここにこれ以上追究しようとは思はぬが、貴重な半ヶ年を空しく逸し去つたといつた私の批判があながち暴言でないことがわかつてくれたであらう。

ゲッベルスの毒舌を借用するならば、彼等（情報局）はこの意味からいへば、何も考へてゐないのであり、また、その程度では、物を考へてゐたなどといふことは困難である、といふべきかも知れない。

情報局の宣傳活動のかゝる不敏と無能は、しからばいかなる缺陥によつて起るのであらうか？その組織の不備か！　人材の貧困か！　私をして卒直に云はしむるなら、そのいづれにもあるのである。

例へば、情報局は今日なほナチスが持つてゐる「黨の耳」であり「國內見張所」であり、また國內密偵（Übe.wachungsstelle）とも云ふべき國民の眞の聲、その不平不滿を正確卒直に聞くべき機關を持つてはゐない。もし、すでにあるとしたらその活用があまりにもだらしないといひ得るであ

らう。——例へば「下意上達」の機關たる隣組常會の活用も「政府の耳」として役立てしめねばならぬ。——戰時にあつて必要なる政府の態度は、その毅然たる嚴格さであると同時に國民に接する彈力性であり、柔か味である。そして、また、正直な國民を保護し、その希望も當然なる場合は間髪を入れず實現せしむることによつて、その政治を謳歌せしめ、積極的に協力せしめることにあることは多く說明の要もないであらう。

だが、國民の心理的動向を早くも察知するといふことは、今日もなほ情報局に行はれてゐる「新聞の切拔」をもつてこれを輿論と考へ、或ひは地方官廳の形式的報告によつて出來るものではなくそれを成功的になし遂げるために、ナチスの如き前記の組織と共に、この特殊の仕事に適應する人材の養成訓練でなければならぬ。

しからば、この訓練と養成が現在の情報局においてなし得るであらうか！　お氣の毒ながら、スイもアマイも解ることに遲鈍なる官僚諸君にはかうした下世話の仕事は、至極不向きのやうに思はれてならない。

ゲッベルスもいふやうに、宣傳の仕事は必ずしも正確なる科學の分野に屬するものではなく、む

しろ本能の問題である。また、三段論法をもつて解釋できるような形式論理ではない。この仕事には一種の天才が必要であり、超論理の論理ともいふべきものを理解する能力がなければならない。このカテゴリに屬する人物が今日の情報局に幾人おられるか疑問を抱かざるを得ないのである。

次に、私の極めて不可解に思はざるを得ないのは、わが情報局が國内宣傳の手段として、いかなる手段形式に重點を置かれて、その活動をなされてゐるかといふ問題である。

ナチスの宣傳方法にこれを學ぶならば、宣傳手段として、先づ第一に、ラヂオを、第二に演說を第三に新聞を、第四に街頭を、第五にスローガンをあげねばならない。

三、戰時宣傳の最善の武器としてのラヂオ

ゲツベルスは、ラヂオをナポレオンの比喩に眞似て「ラヂオは第八の威力なり」といひ、十九世紀における新聞の威力は、二十世紀に至り、その威力と王位をラヂオに讓らねばならない、と考へたほどに、ラヂオの宣傳力を重大視したが、わが情報局は宣傳におけるこの革命的武器（ラヂオ）の活用に對して餘りに冷淡であり、無關心である。ラヂオの所管が今日なほ遞信省にゆだねられてゐることに依つても、その無關心さの程度が十分推察し得るのである。偉大なる國民的意識と戰時

における責任感とを全國民に公平に分擔せしめ、その政策に精神的に參入せしめ得る最上の手段はラヂオであり、政府とその勞苦を共にせしめ、政治と國民との間にあつてその仲介者たるものは現代にあつてはラヂオ以上に有効なるものは殆んどないといつてよい。

最近放送プロ中政府の時間なるものが僅に數十分編入されるに至つたが、政府の時間即ち、情報局の時間として既に餘り短く、しかもその放送たるや無味乾燥にして、もとよりホーホー鄕のあの辛棘なる皮肉や諧謔もなければユーモアもなく、伊藤總裁始めその他まことに興味索然たるお說教に始まり、お說教に終つてゐる。今次大戰におけるドイツやイギリスのラヂオ宣傳戰を少しでも研究され、これを參考にされるならば、今少し智慧と妙案が浮ばないのが不思議であり、「政府の時間」における放送形式を始め、放送全プロの編成に對して、全面的な再檢討、再編成の必要を直ちに考慮すべきではなからうか！　ラヂオの戰時宣傳の武器としての、その評價と活用に對して、わが情報局の再認識こそ、むしろ必要缺くべからざるものではなからうか。

第二は演說であるが、ナチスは書物や新聞よりも演說を宣傳における重要なる中心としたが、たしかに大衆に直接訴へる演說の方が遙にその把握力と感銘は大である。

なるほど、大衆の數から考れば書物や新聞よりも一時に獲得する數は少く、新聞や書物が一時に何萬、何十萬といふ相手を持つに反して、聽衆は屋外においてもせいぜい數千數萬に過ぎない。しかし理論が直接訴へて、その効果と反響を生ずる點にいたれば演説は新聞書物にまさること數段である。しかもその感銘と反響は直ちに、人の口から口へと擴まりその傳播力も確實にして速力も速いことは説明するまでもないが、この演説についてわが情報局の認識、さらにその技術的考慮についても再考を促すべきもの丶多いのは極めて遺憾なことである。とくに、後者のその技術と演説會場（野外、屋内たるを問はず）の構成における工夫の足らないのは、演説が戲曲における演出と同樣に一種の演出が必要であり、從つて、舞臺効果に深甚な注意を拂はねばならぬといふ極めて常識的なることの一事をすら知らないからである。

だから、戲曲家や舞臺監督のごとき文化技術家が、情報局にとつてなによりもまさりて必要なる存在であるのに、わが國の情報局にその人あるを知らないのは、果して私の寡聞なるせいであらうか！

ヒットラーが、かのミュンヘン會談よりベルリンに歸りし際、ドイツ民衆の歡迎に笑顏をもつて

接すべきか、苦澁の顏で應ずべきかをドイツ宣傳省は研究し、結局苦澁の顏をもつて迎ふることによつてミュンヘン會議の成果に總統は不滿足であり、將來樂觀を許さゞる決意を示すべきであると決定し、ヒットラーはその如く民衆に應對したいといふエピソートが傳えられてゐるが、この一挿話は眞僞のほどは別としても、一國の首領の表情や態度がいかなる心理的影響を與ふるかといふ微妙なる點に至るまでドイツ當局が苦心しつゝあるかを窺ふに足るものである。

わが國の新聞紙上や雜誌に掲載されたる政府大官のあまり好ましからざる寫眞がしばしば掲載されてゐるのを見うけるが、演說において政府大官が國民に直接接觸する際においてその一擧手一投足が、またその氣魄と熱情が、國民の琴線に觸れて共鳴共感の感情をかもしだすことの絕大なる影響を思へば、演說を始め、宣傳に於ける演技演出の成果に膏血をしぼる苦心を拂ふべきは、むしろ當然ではなからうか！

わが情報局に、はたしてこの用意と研究ありや？　反問したいものである。

四、新聞統制の前提條件とは何か？

第三の「新聞」については、筆者の專問的領域に屬し、とくに多くを言ひたいのであるが、ここ

には私見の一端を要約して述べるに止める。
戰時における國內宣傳、即ち、國論統一の重大なる役割を占めるものは、いふまでもなく新聞である。
私は本書の第三章――「ナチスの外交宣傳戰」において、ドイツの新聞が、作戰と對外對敵宣傳との緊密なる協力によつて、ある時は敵國を牽制し、ある時は自國の作戰目的を陰蔽し祕匿する役割を忠實に果しつゝあることを解明し、わが國の新聞が、意識すると、せざるとは別として、わが情報局の新聞政策の無能と新聞自體の無自覺のために、かへつて敵國諜報の役割をすら果す結果を招きつゝあるは、實に心外に堪えない次第であるが、そして、これこそわが國の宣傳政策とその機關の貧困と無能とを暴露する以外のなにものでもないのである。しかし、新聞の對外對敵宣傳についての方策に關して述べることは、他の機會に讓り、國內宣傳の一機關、一手段として新聞の役割を、本論における主なる對照として進めよう。
ゲツベルスは「デル・アングリッフ」の社告において「我々の目的は通信にあらずして、刺戟、鼓舞、激勵にあつた。我々が設立した機關（新聞）は、ある程度怠慢なる睡眠者をその微睡からよ

び醒し、たゆみなき活動へと驅り立てる一種の鞭の働きをなすべきであつた。「デル・アングリッフ」はその名の如く、新聞のモットーも亦攻擊がその綱領であつた。」と喝破してゐるが、この一語こそ、戰時宣傳における新聞の役割を、最も明快に、最も端的に解決を與へてゐるではないか！

戰時における新聞が單なる「報道」を以て滿足すべきではなく、國民の指導機關であり、刺激と鼓舞と激勵を與える最大なる鞭の役割を果すべき重大なる使命あるにも拘らず、わが國の新聞が――すでに多少ともこの役割を自覺しつゝあるも――何故に、今日いまだそれが行はれないのであらうか！　政府當局（情報局）の新聞政策の缺如か、新聞自體の翼賛運動ならびに國家使命についての時局認識の不足のためか？そのいづれにあるのか？と問ふならば、私は敢て答えるであらう。新聞の戰時態勢への即應がなされないのは、そのいづれにも――即ち、政府の新聞統制に關する明確毅然たる方針の不鮮明と新聞社自體の國家宣傳手段としての新聞の使命についての認識不足に――あるのであるが、それ以上に根本的なる問題は、むしろ新聞自體の資本主義的構成と機構そのものにあるのである。

だから、もし政府がいかに統制の强化と巧妙なる運營によつて、新聞を操縱せんと欲しても、新

聞機構における資本主義的（自由主義的）根據に一擊を與へる決意がないならば、新聞統制の實效も擧がらなければ、又同時に、國家宣傳機關としてのその使命を成功的に遂行せしむることは出來ない。新聞機構における資本主義的自由主義的夾雜物の芟除こそ、新聞改新の根本的な、そして前提的條件でなければならない。

しからば、新聞機構における夾雜物――自由主義的資本主義的經濟的地盤とは何か、といへば、いふまでもなく新聞における營業的な面であり、それは新聞における「販賣」と「廣告」である。新聞の讀者獲得の販賣政策と廣告爭奪のための他紙排擊の自由競爭は、新聞の歷史的使命を喪失させ痲痺せしめるばかりでなく、また、社會の公器としてのその權威を失墮せしめ、遂に新聞を一箇の賣笑婦的存在たらしめるのである。故に、新聞をして「販賣」と「廣告」の商業性を離脫せしめ、何等かの形式においてその經營に經濟的な保證をすることが新聞統制と改革の急務である。

自由主義的資本主義的新聞の擴張競爭は、常に他紙排擊の形態をとりて進むであらう。だからもしもその機構の上に根本的な是正がなされなければ、この醜惡なる爭覇戰は、その形式と程度の差こそあれ恐らく無限に續けられるであらう。新聞業界に於ては、いづれの新聞も自己の美點と有利

を主張し宣傳――他紙の排擊を――しつゝ讀者と廣告主の獲得競爭に狂奔することによつてのみ自己の存在を漸くにして主張し維持せんとする。私をして率直に云はしめるならば、排擊を必要とする新聞は國家の手によつて、それをなすべきであり、また、かゝる新聞を存續せしめる軟弱なる態度と政策を當局に對して抗議すべきであらう。

「新聞といふものは、元來性格のないものではない。それが性格のない人間の所有にある場合にさうなるのだ。彼等は新聞を國民に反する目的のために惡用し、それを資本主義的な遊戲にしてしまふのだ」と、ゲッベルスもいつてゐるが、新聞の無性格は新聞の資本主義的所有――營利の目的――のために發足しており、又それ故に國家宣傳機關としての、その使命に忠實たらうとはしないのである。

ドイツのニコライ著「世界戰爭に於ける情報勤務と新聞の輿論」中に次のやうな一節がある。

「國民の戰意が既に衰え、新聞紙が公然媾和を筆にするようになつては、軍隊の士氣沮喪は止る處を知らないであらう。

國內の事情は一つとして敵に知られないものはない。ドイツの輿論が媾和に傾くと知つたら、敵は

勝利への希望を抱き益々戰意を强くするであらう。然るに、政黨の首領が公然非戰論を唱へ一人もこれを反駁するものもなく、フランク・フルター・ツアイツング並に社會民主黨の新聞が媾和論が掲げて何等の處分を受けない如き狀態では如何にして、旺盛な士氣を維接することが出來よう。たゞさへ歸心矢の如き兵士がこれに動かされるのは當然である。眞の政治的指導なく、我々の力は內外から分裂されるのは當然である。勝利を得ることは不可能である。」

たしかに、國內の事情は何ひとつとして敵に知られないものはなく、戰時下の新聞が敵と前線に活躍する自國の將兵に向つて編輯する嚴肅なる氣持と心懸けとを怠るならば、實に重大なる惡影響と事態とを惹き起すことになるであらう。

新聞の取扱ひ方いかんによつては、一國の衰亡にも起因することがあり、第一次歐洲大戰で、ドイツがあのやうに敗北せねばならなかつたのは、ニコライの著書の指摘するが如き新聞の無統制なる態度にあつた。

現在、わが國に意識的に國を賣る新聞や雜誌はないにしても、自由主義と報導主義のカラから脫却できず、結果において大なる過誤を犯してゐるもの必ずしも僅少ならず、また、イギリスのシー

クレット・サービスの暗躍のわが國においてもやうやく猛烈ならんとしつゝある時――最近英軍の優勢を詳報する英文、邦文の宣傳パンフレットが公然と全國にバラ撒かれた事實もある――この點とくに嚴重なる警戒を必要とする。

新聞は客觀的眞理を確認することよりも、先づ第一に戰爭の目的を助けることであり、次に大切なことは、この目的達成のための啓蒙であり教育であり鼓舞である。しかも、一切の革命は、先づ人間自身のうちに行はれ、それから初めて政治經濟の現象形式をとるものであり、わが國の一大變革期に當つて――教育の再編成をなす國民學校以外に――この仕事をなすは新聞であり、その責任や實に重大なるものがある。

客觀的眞理の發見は學者に、歴史的眞理の發見は歴史家にまかせ、新聞は歴史的現實――東亞共榮圈――を共同で作り出す力を國民の中に創造することにある。

戰時宣傳機關としての新聞についてのかゝる重大なる使命が認識され、また私の指摘する新聞の機構における根本的缺陷を芟除すべく、一日も早く賢明にして、しかも斷乎たる政策を樹立されんことを私はわが情報局に向つて切に希望するものであるが、そのためにわが情報局は、今少し新聞

の實際と表裏に通ずる努力をされるか、またはそのエキスパートを採用すべきであることを警告しておきたい。

五、宣傳は街頭を占領せよ

人も知るごとくナチスの成功は、突撃隊員による街頭への進出であり、街頭占領にあつた。しかして、突撃隊の街頭の占領は、同時にナチス宣傳の街頭占領であつた。

在來のブルジョア社會における政治運動は、イギリス式お上品さをもつてなされたために、ナチスのやうに街頭運動は、あまり好まぬところであつた。

しかし、街頭の意義は、近代においてその政治闘争にとつて極めて重大なる意義があり、また眞に價値あるものであつた。まさに、街頭は近代的政治の特徴であり、ナチス政治の一つの特色であると考へられる。

街頭を乘りとり、街頭を制覇することの出來るものは、大衆を乘りとり得るものであり、更に大衆を乘りとり得るものは、同時に權力をも手中に收め得るものである。

故に、ナチス突撃隊員による街頭占領とナチス宣傳による街頭の占領が、ナチス政權奪取の成功

をなさしめたのである。

街頭における宣傳を奪取し、無用な宣傳を追ひ拂ふこと、あるひは敵性宣傳と對立物を街頭において攻撃粉砕することは、宣傳勝利の秘決でなければならない。

ナチスはビラ、掲示(ポスター)によつて街頭を占領すると共に、屋外における大衆的集合、街頭示威を行つて街頭への進出をめざしたが、この大衆的集合と街頭示威を、その宣傳功果の威大なる點から我々はこれを見直さねばならぬ。

大衆的集合と街頭示威による宣傳は、その參加者をその目的に全く歸一せしめ、同じ感情、同じ感激、同じ戰鬪的意識に燃え立たせるばかりでなく、これに反對する陣營に大なる精神的衝撃を與えるものである。ある場合はその敵陣營（反對者）をその示威と壓力によつて慴伏せしめるであらう。

最近わが國に行はれてゐる「闇取引防止」の運動にしても、これが街頭示威として行はれるならば、闇取引反對の街頭示威の壓力は、その犯罪者を戰慄せしめるのみならず、その參加者に國策協力に對する一層の決意を促さしめるであらう。戰時下の國民は、戰爭による强烈な刺激に痲痺せし

められてゐるのが普通であつて、多少粗暴に見える宣傳形式を撰ぶところなければ、その求訴力と効果は至つて少くない。

また、ビラやポスター掲出の宣傳形式は、商業主義資本主義的形式の遺物であつて、この舊式な宣傳形式に捉はれ、あるひは殆んどこの形式のみに依存することは、宣傳を棄權し斷念することゝ同樣である。

わが情報局が出來てから、嶄新な宣傳形式の案出に對して、一體どれだけの努力を拂つたといふのであらうか！ ラヂオ放送による對外宣傳においても、街頭宣傳においても、殆んど見るべきものを持たない。

宣傳はそのアイデアの新鮮さと、その形式の嶄新奇拔さによつてのみ成功するもので、從つて、宣傳の工夫は、なによりもその形式、手段の創意にあり、ゲツベルスは政治を藝術なり、と喝破して藝術家陣營よりの物議をかもしたが、政治は藝術なり、とは、宣傳は藝術なり、との異語同意であり、たしかに宣傳は一種の創作である。

故に、われわれは「宣傳」の仕事は、官僚的事務と事務官から解放することが、わが國の宣傳を

救ひ、その成功への第一步なりと信じてゐる。

宣傳は（とくにその形式の案出は）全く個人的活動による天才的な創作に屬するものである。故に、この仕事は新鮮潑剌たる若々しい生命にゆだねられねばならない。青春の生命の枯渇した一介の官僚的事務官の手によつて行はれるならば、花も咲かなければ、實もみのらぬ種子をまくにひとしく、折角の宣傳活動も徒勞に終る以外にないであらう。

六、スローガンの重要性とその意義

一切の宣傳活動において最も大切なことは、その目的を最も端的に表すところのスローガンである。實にスローガンは、宣傳の核心であり、その理念を象徴する美しき花である。忘れやすい大衆は、最も強く、最も適切に人の心を捉えるやうにつくられた「スローガン」といふ花にだけに魅惑を覺え、心を奪はれるのである。

宣傳が大衆を捉える手段であり、その目標が大衆獲得にあるならば、大衆の理解する言葉が必要であり、スローガンが大切である。しかも、それ――言葉とスローガン――は、大衆の生活と共にある言葉であり、大衆の同情を惹き起し、理解しやすい言葉が、行動によつて語られねばならな

い。

いかに美しく飾られた宣傳でも、宣傳者（政府當局）の行動により、信念によつて語られない宣傳は、針のない釣絲のやうに、何等の組織力も伴はないであらう。宣傳が大衆組織の手段であるならば、大衆が宣傳によつて一歩踏み出した時、即ち、大衆の組織と行動化によつて始めて宣傳は成功の域に達したのである。だから、宣傳におけるスローガンも、決して單なる言葉の原理でなくして、行動の原理が表現され、かつ語られねばならない。

ナチ・ドイツのスローガンには、實に適切にして民衆の心を打つスローガンが多く、その苦心の跡がうかゞはれるが、それは先づ第一にヒットラー總統が、宣傳活動におけるスローガンに對して重大なる關心を拂つてゐたためである。「宣傳はやはりスローガンによつて行はれなければならない。宣傳はあくまで、堅實に不斷に――それ以外に途はない。」と、ヒットラーは「わが闘爭」の中で、スローガンの重要性について述べてゐるが、健忘症で消極的な大衆をその心底からゆり動かし、自己の意圖に沿はせるためには、適切なスローガンを繰返し反覆することによつて、大衆は己の理念、己の欲求を、民族の聲を具象化されたそのスローガンの中に見出すのである。そこで、大

衆は「私が長年探してゐたことを、彼は言葉で把握した。私の願望してゐたことを表現した人が初めて出現した。」と、欣喜雀躍するのである。かくて、空中に浮遊にする大衆の理念は、宣傳（スローガン）によつて把握され、この理念は地上に根を下すのである。

わが政府當局の作製するスローガン――臣道實踐や職域奉公等――があまりにも抽象的であり、大衆の言葉を以て語られないのは、これを提出する當時者自身がこのスローガンに盛られたところの意味を行動的に把握せず、また、大衆の言葉を知らないからである。

ゲッベルスは、理念とは民族の意識の深奥に存する意欲なりといつたが、あらゆる政治運動の最初には理念がある。しかし、この理念が、單なる思索の上の理念としてではなく、行動の原理として把握する者があつて――即ち、偉大なるプロパガンデイストがあつて、始めて誰にも理解の容易な「スローガン」を以て、その眞髓を要約し、その標語の傘下に大衆を統一し組織することが出來るのである。

この理念は必しも尨大な著書を必要としない。簡潔なスローガンに要約し、民衆の言葉で、誰にも解る行動の原理として、繰返し、くりかへし、手を替へ品を替へて宣傳されてこそ、自己の主張

を了解させ、又自己に有利な心理的作用を現出し、遂には黨派を統率し、世界をも征服するのである。

わが國のスローガンが國民に對する要求のみが語られて、國民自身の希望の達成を何等暗示するところないのは、例へば、職域奉公によつて何が達成されるかをいさゝかも表示しないのは、大衆を捉える魅惑に缺けてゐるといはねばならない。

フランス滯在中の淡德三郎氏が「戰爭と人民」（改造四月特大號）において「人民を抽象的な概念だけで踊らせることは出來ない。人民は哲學者ではない。人民は具體的なものを欲する。パンを、肉を、衣服を、住宅を、病院を欲する。之を與へ得ない者、與ふべしとの約束さへなし得ない者、況んや與へると稱しながら却つて之を奪つてしまつた樣な爲政者を人民は信賴することは出來ぬ。

人民戰線がその最大の敵と看做してゐた獨逸に於いてはどうであらうか？ ここでも決して人民は豐富に與へられてはゐない。とはいへ指導者は、戰後に於ける大衆生活の向上を約束し、資本からの勞働の解放を約束し、諸國民の平和協力を約束してゐる。人民が此の約束に對し信賴をもつてゐる限りに於いて、人民は欣然として一切の困苦缺乏にたへるであらう。

人民の信頼なくして、戰爭を開始した佛蘭西は負けた。大膽にパンと自由に平和を約束するヒットラーをめぐつて人民の信頼は益々高まらうとしてゐる。ヒットラーが此の約束を反古にしない限りに於いて彼が言明した様な勞働者と農民を基礎とした「人民國家」が實現されゆく限りに於いて獨逸の終局的勝利は保證されるであらう。「と、いつてゐるのは正しい。

東亞共榮圈の確立といふ日本の戰爭目的も、臣道實踐、職域奉公といふスローガンも、かゝる具體的內容との連關において把握され、單に「東亞の解放」といふ抽象的な題目、概念的なスローガンとしてではなく、國民の希望や願望と具體的に結びつけられ、あるひはその希望達成の暗示が投げられる時に、始めて國民はあらゆる犧牲と困苦を惜しまぬ決意を一層明白にするであらう。かゝるスローガンの重要性とその盛られる理念については、わが國のそれは今一度愼重に檢討する必要があるであらう。

宣傳は目的への手段であるが、宣傳活動は同時に組織の過程である。宣傳が組織であり、國民の再編成にあるならば、その理念と構想は常に具體的でなければならず、實狀の國家組織の上から考へれば、情報局は企劃院と緊密一體の連關の上に、仕事が進められねばならない。

卑近な例を擧げれば、「代用食として甘藷を食べよ」とのポスター宣傳が行はれてゐる時、市場に甘藷の姿が見えられない。それでは國民は當局の今後の宣傳を信用しなければ、又協力しなくもなるであらう。また、宣傳それ自身の權威を失墜せしめるであらう。

そして、かゝる些細な錯誤や失策でも、それが積み重ねられるに至らば、大衆はその卑近な、また端的な實例によつて、政府の食糧政策や物動計畫のやうな重大政策にも次第に不信を投げかけるやうになるであらう。これは重大なる問題であり、かゝる小さな宣傳技術の失策が、戰爭で必要以上に神經過敏になつてゐる國民に無用な不安を與え、從つて、國民の心理的協力を減殺するのである。

だから、ノースクリフ卿は、前大戰において英國の宣傳活動を引き受けた時、彼は直ちに英國の戰時政策そのものが、確實であるか否か、また、その政策が矛盾してゐるやうことはないか、そしてその政策が實際に强行されてゐるかを調査することを怠らなかつたではないか。

宣傳實行者に對しては、その實際活動の舞臺においてばかりでなく、國家機構の中にもその地位が與へられることが必要である。

政策といふものは、その政策が成功するかしないかは輿論に依つて決定される。その輿論に關する專門家（或は輿論調査機關・ドイツにあつては黨の耳、ナチス見張所といはるべきもの）の報道なしには完全に實施されない。

宣傳に從事する人々は、この輿論の動き、人心の微妙なる動向を刻々と調節打診することも、その職責の一つである。そのためには宣傳に從事する人々に、國家の重大なる政策を動かし得る人々と同等の威信と權限が與へられてゐないならば、輿論を支配することは愚ろか、輿論を打診し觀測することにも支障を來すことが多いであらう。

しかし、宣傳事務に携はる幹部達が、形式的に、行政上の、あるひは閣内のどんな位置を占めるかといふことが問題ではなく、實際に於て、行政内の、或ひは閣内への影響を與へ得る多分の指導力と權限を保有することが問題なのである。

七、總力戰の戰士たれ

現代におけるイギリス最大の軍事評論家といはれるリデル・ハアトは「戰爭は國家の興廢といふ點から云つて一介の戰略家だけに依つて勝手に行はれるのには、餘りにも嚴肅な大業である。そこ

で、戰爭後の平和狀態をも含む大戰略に依る廣い視界が必要となつて來る」と、いひ戰後における國民生活の設計と世界新秩序の構想が、その戰略中に織り込まれねばならぬと述べてゐるが、この仕事に參與し擔當し得るものは、われわれ文化技術者であり、精神と技術の兩科學者でなければならぬ。

私の「わが情報局に捧ぐるこの一文」は、あまりにも非禮に過ぎ、わかり切つたことを尤もらしく云ひ、從つて、暴慢に見えるかも知れない。しかし、これらのわかり切つたことが、實際に行はれてゐないとしてみれば、また、その反應が實際に現はれないとするならば、その組織か運營か技術か宣傳に對する考へ方そのものにか、いづれにか缺陷があるとしなければならない。

アメリカ海軍の名戰略家G・J・マイヤース氏は「和戰を決する權能は爲政者の手中にある。一度彼等が、戰爭をやることを決定しても、その責任を陸海軍首腦部に負はせることは出來ない。國家の安危を托された陸海軍は、依然として、爲政者から支持をうけなければならぬ。戰爭は誰もこれを愛好するものはなく、また戰爭は殘酷で破壞的であるが、これを理由として、戰爭に導いた爲政者の責任は解除されぬ。」と、いつてゐるが、國家總力戰のたてまへから云つても、また、かゝ

る道德的な責任感からいつても、爲政者はもとより、われわれも戰爭目的完遂のために、文化的頭惱の膏血をしぼつて、この總力戰に協力し、その勇敢な、かつ光榮ある戰士の一人とならなければならない。

本論を脫稿せんとせし際、私ははからずも改造時局版誌上に里見岸雄氏の「政治に於ける名分とウィット」と題する所說を讀んだのであるが、同氏は同論において「思ふに、政治標語は實踐を誘起するに足る感銘を與へ得なければ、標語としての政治的價値はない。而して政治標語が國民に與へ得る感銘、誘起力といふものは、その標語を生み出した政治理念の適切性、並びに政治力に比例するであらうが、それと共に、標語そのものが、その目的としてゐる內容に應しい正當なる名分を帶びてゐる事も、效果の上から見て、確に一つの重要なる要件であると思はれる。」と、いひ、また、他の箇所において「政治がいかに正しくも、その正しさにウィットが件はなければ、人は徒らに緊張の連續のみを餘儀なくされるから、短期間ならば兎に角、少しく長期に亘る場合には、事實に於て弛緩倦怠の狀を呈する、これは一般に人間の弱點である。此の弱點を補ひ得るものがウィッ

トである。……中略……人情の機微を察する時、よろしく政府は紋切型の節米號令を掛けたり、榮養學の學說を高調したりするばかりではなく、いはゆる政治のウイットを示すべきだ、と思ふ。「國民に鱈腹米を喰つて貰へない事は、まことに相濟まぬ。然し、かくかく斯樣な事情であるからしばらく我慢して頂きたい。」かういふ人間味のあふれた政府の一聲こそ、實に百千の號令に勝る感激を與へるのである。云々……」と、殆んど私の見解と變らぬ所見を發表され、私をして益々意を强くせしめてゐるが、政治家爲政者は、宣傳と國民の心理的協力を强化するために、かゝる點を大いに學び反省しなければならぬ。と同時に、新聞及び雜誌ジャーナリズムは、從來の報道主義、批判主義を更に一層かなぐり棄てゝ「宣傳・謀略」については國民學校一年生の氣持になつて、入學しなければならない。そして、綜合雜誌や新聞紙が「宣傳・謀略」に關する研究・批判・提言・創案等についての所說をどしどし揭載し、おくれたる斯學の發展、鞭撻のために寄與するところなければならないと願つてゐる。

總力戰研究所の研究生をジャーナリズム方面から入所せしめるところ少かつたが、總力戰研究所は、「宣傳」における總力戰的認識と研究を新聞雜誌に深めさせるために、ジャーナリストに對し

今少し門戶を解放すべきであると信ずる。

忌憚なきこの一文が、わが情報局並びにこれに關心を抱く――新に生れんとする日本宣傳文化協會の――人々に、何等かの參考になるところあるならば、筆者の最も幸甚とするところである。

附錄

「宣傳研究」參考書

（左記參考書は小西鐵男氏調査のものに本著者の増補せるものである）

一般的プロパガンダの研究書

Adler, G.: Die Bedeutnng der Illusionen für Politik und snziales Leben, 1904.

Bauer, W.: Die öffentliche Meinung und ihre geschichtlichen Grunplagen, 1914.

Birn baum, A.: Das Wesen der Propaganda, 1920.

Eltzbacher,: Die Presse als Werkzeug der auswartigen Politik, 1918.

Gersdorf, K.: Ueber den Begriff und das Wesen der öffentichen Meinung, 1846.

Hendrich, F. J.: Ueber den Geist des Zeitalters und die Gewalt der öffentlichen Meinung, 1797.

Holtzendorff, F.: Wesen und Wert der öffentlichen Meinung, 1880.

Kulke, E.: Zur Entwicklungsgeschichichte der Meinungen, 1891.

Park, R. E.: Masse nnd Publikum, 1904.

Pieper, K.: Die Propaganda, 1922.

Plenge, J.: Deutsche Propaganda, Die Lehre von d. Propagauda als prakt, 1922.

Schultze-Pfaelzen, G.: Propaganda, Agitation, Reklame, 1923,

Sighele, S.: Psrychologie des Auflaufs und der Massenverbrechen, 1897.

Stern-Rubarth, E.: Die Propaganda als poritisches Instrument, 1921.

Szirtes, A.: Zur Psychologie der öffentlichen Meinung, 1921.

Tonnies, F.: Kritik der öffentlichen Minung, 1922.

Chassieriaud, R.: La formation de Popinion publique. 1914.

Deheame, G.: Les forces a'rágler, 1919.

Moysset, H.: L'opinion publique, 1910.

Papon, J. P.: De paction de Popinion sur le gouvernement, 1788.

Rossi, P.: Le suggesteur et la foule, psychologie du meneur, 1904.

Tarde, G.: L'opinion et la faule, 1901.

Augell, N.: The Public Mind, 1927.

Bernays, E. L.: Crystallizing Public Opinion, 1923.

Christenien, A.: Politics and Crowd-Morality, 1915.

Conway, M.: The Crowd in Peace and War, 1915.

Higham, C. F.: Looking Forward, 1920.

Kydd, S.: A Sketch of the Gronth of Public Opinion, 1888.

Le Bon: The Crowd, 1920.

Lee, I. L.: Publicity, 1925.

Lippman, W.: Public Opinion, 1922.

Lipsky, A.: Man tre Puppet, 1925.

Long, J, C: Public Relation, 1924.

Lowell, A. L.: Public Opinion in War and Peace, 1923.

Mc Dougall, W.: The Group Mind, 1920.

Mc Dougsll, W.: An Introduchion to Social Psychology, 1908.

Mackinnon, W. A.: History of Civilization and Public Opinion, 1849.

Martin, E. D.: The Behavior of Crowds, 1920.

Quiett, G. C. and Casey. R.: Principles of Publicity, 1926.

Riis, R, W. and Bonner, C. W.: Pnblicicity, 1926.

Ross, E. A.: Social Control, 1901.

Salmon, L. M.: The Newspaper and Authority, 1923.

Wallas, G.: Human Nature and Politics, 1908.

Weeks, A. D.: Control of the Social Mind, 1923.

Wilder, R, H. and Buell, K. L: Publicity, 1923.

Harwood Lawrence Childs. Propaganda And Dictatorship,,

Fritz Morstein Marx. Stat Propaganda in Germany,

Arnold F. Zurcher. Stat Propagandain Italy.

Bertram W. Maxwell. Stat Paopaganda in Soviet Russia,

Goebbels: Signale der neven Zeit (München)

Nordicus: Hitersm, the Fist in Germuny

Heiden: History of NationalSos'alism (Methuen)

Handbuch für das Deutsche Reich: 1936—1939

Kluge-kruger: Verfassuug Verwaltvng in Drltten Reich.

The Spirit. and strocture German Fascism (Brady)

Joachim Roichenau: This man Goebbels.

Bernays, Edward L. Propagaanda.

Biddle, William W. Propaganda and education.

Dodge, Raymnmd. The psychology of propaganda.

Dood, Leonard W. Propaganda.

Grabowsky, Adnlf. Bolchewismus.

Hadamovsky, Eugen. Propaganda und Nationale Macht.

Lambert, R. S. Propaganda

Lasswell, Harold D. Propaganda technique in the world war.

Lumley, Frederick E. The Propaganda menace.

Lumley, Frederjck E. Means of social control.

Nikolai, W. Nachrichtendienst, Presse und Volksstimmung im Weltkrieg.

Plenge, Johann. Deutsche Propaganda.

Rogerson, S. Propaganda in the next war.

Stern, Robert, Edgar. Die Propaganda als politisches Instrument.

Stuart, Campbell. Secrets of Crewe House.

Hannes schneider: Secre tservice

Hams Gracht: Die Fűnste Kolonne

大戰のプロバガンダ研究書

Baudrillart, M. A.: Notre. Propaganda, 1916.

Baschwitz, K.: Der Mssenwhn, 1924.

Haas, A.: Die Propaganda im Ausland, 1916.

Hartmann, P.: Franzosische Kulturarbeit am Rhein, 1921.

Kerkhof, K.: Der Krieg gegen die deutsche Wisenschaft, 1922.

Ludendorff: Meine Erinnerungen, 1919.

Mühsam, K.: Wie wir belogen, wurden, 1920.

Ruhlmann, P. M.: Kultnrprodagaupa, 1919.

Schöuemann, F.: Die Kunst der Massoubenbeeinflussung in den Vereiuigten Staaten von America,

1924.

Stuelpnagal, O.: Die Nachkriegs-Propaganda der Alliierten gegeu Deutschland, 1922.

Wiehler.: Deutsche Wirtsch aftspropaganda im Weltkrieg, 1922.

Raudrillart, M. A.: Une campagne fancaise, 1917.

Drouilly, J.: Les chefs-d'oeuvre de lapropagauda allemande, 1919.

Granx, L.: Les fausses nouvelles de la grande guerre, 1919.

Hallays, A.: L'opinion allemande pendeut la guerre, 1914-18, 1919,

Hansi et E, Tonnelet.: A travers les lignes ennemies, 1922.

Prezzolini, G.: Dopo caporetto, 1919.

Bernstorff, C.: My Three Years in America, 1920.

Blankenhern, H.: Adventures in Propaganda, 1919.

Brownrigg, D.: Indiscretion of the Naval Cancor, 1920.

Busch, M.: Bismark, 1898.

Cook, E. T.: The Press in War-time, with some accunt of the Official Press Bureau, 1920.

Creel, G.: How We Advertised America, 1920.

Creel, G.: The War, the World and Wilson, 1920.

Lasswell. H. D.: The Status of Reseaːch on International Propagauda and Opinion, 1926.

Lasswell, H. D.: Propaganda Technipue in the World War, 1927.

Steed, H. W.: Through Thirty Years, 1924.

Stuart, C.: Secrets of Crewe House, 1920.

Whitehouae, V. B.: A Year as a Government Agent, 1920.

H. C. Peterson.: Propaganda For war.

道德統制プロパガンダ研究書其他

Ziehen. A.: Die Psychologie grosser Heerührer, 1916.

Campeano, M.: Essai de psychloogie militaire individuelle et collective, 1902.

Gavet, A.: L'Art de commander, 1921.

Goddard, H. C.: Morale, 1918.

Hall, G. S.: Morale, 1920.

Mayer, L.: La psychologie du commaudement, 1923.

Rohau, H.: Le parfait capitaine, 1744.

Andrews, L. C.: Leadership, Military Training, 1918.

Audrews, L. C.: Military Manpower, 1920.

Gallishaw, J. and Lynch, W.: The Man in the Rsnks, 1917.

Guliek, L. H.: Morals and Morale, 1919.

Hocking, W. E.: Morale and its Enemies, 1918.

House, F. N.: Industisal Morale, 1924.

Maxwell, W. N.: A Psychological Retrospect of the Great War, 1923.

Miller, A, H.: Leadership, 1920.

Munson, E, L.: The Management of Men, 1921.

Peterson. J.: Psychology of Handling Men in the Army, 1919.

プロパガンダの歴史的研究書

Ebbinghaus, T.: Napoleon, England und die Presse, 1800-1803, 1914.

Pèrivier, A.: NapoleonJournaliste, 1918.

Angell, N,: Patriolism under Three Flags, 1903.

Martin, B, K.: The Trinmph of Lord Palmerston, 1924.

Price, M. T.: Christian Missions and Oriental Civiligation, 1924.

我國の宣傳並に總力戰研究參考書

▲宣傳理論參考書

谷　孫六氏著「宣傳時代相」（春秋社）
新田宇一郎氏著「新聞の現在及び將來」（第一書房）
新田宇一郎氏著「新聞廣告の研究」（六合社）
小野秀雄氏著「日本新聞發達史」（大毎・東日版）
小松孝彰氏著「戰爭と思想宣傳戰」（春秋社）
小山榮三氏著「宣傳技術論」（高陽書院）
外務省論査部編「獨の宣傳組織と其の實際」（日本國際協會）
粟屋義純氏著「戰爭と宣傳」（時代社）

水野正次著「ドイツ的戰略とは」―戰爭と謀略宣傳（名古屋新聞社出版部）
高梨菊次郎氏著「國家宣傳とジャーナリズム統制」（野田書房）
小山榮三氏著「新聞學」（三省堂）
板倉卓造氏著「國際紛爭史考」（中央公論社）
朝日新聞者編「日本外交秘錄」（朝日新聞社）
ドクター・W・ファオン・クリーク著 東城忠男氏譯「英國の宣傳戰略と戰術」（刀江書院）
刀禰館正雄著「新聞經營研究」（三省堂）
光行壽氏著「獨逸青年運動研究」（日英社）
松本潁樹編「防諜科學」（モダン日本社）
同盟通信社調查部編「國際宣傳戰」（高山書院）
小西鐵男氏著「プロパガンダ」（平凡社）
ジョージ・アストン著 隅井幸次譯「英國の機密室」（誠文堂）

ハンネスト・シユナイダー
木暮浪夫氏譯　「シークレツト・サービス」（三都書房）
ラムリー著
大江專一氏譯（世界プロパカンダ戰」（實業の日本社）
光行壽氏著（新體制下の新聞構想」（第一公論）
小松清氏著「フランスより還る」（育生社）
同　氏著「沈默の戰士」（改造社）
アンドレ・モーロア著
高野野一郎譯「フラン敗れたり」（大觀堂）
アンドレ・シモース著
羽田三吉譯「余は糾彈す」（三省堂）
ジユール・ローマン著
清水俊二氏譯（歐羅巴の七ツの謎」（六興出版部）
佐々木能理男氏著「ナチスの文化體制」（矢貴書店）
JH・ラーヴイシ
J・ヴエクスラ著小松孝彰氏譯「アメリカと參戰」（高山書院）
ハロルド・ラスウエル著
小松孝彰譯「宣傳技術と歐洲大戰」（高山書院）

伊藤鉄太郎氏編著「ナチス電撃の恐怖」（日本公論社）
G・ブリット著 小松孝彰譯「米國に於る第五列の暗躍」（第一公論）
ゲッペルス著 高野劉譯編「宣傳の偉力」（青滋社）
森崎善一氏著「宣傳廣告の計畫論」（丸善書店）
J・テイビイス著 花井芙美男氏譯「秘密戰の實體を衝く」（東亞書局）
齋藤秀夫氏著「ナチス・ドイツの文化統制」（日本評論社）
水野正次著「戰火の背景」（新民書房）

▲總力戰と世界大戰爭に關する參考書

成田賴武氏著「クラゼウイッツ戰爭論要綱」（同文館）
多田督知氏著「日本戰爭學」（高陽書院）
寺田彌吉氏著「總力戰教書」（霞ケ關書房）
塚田正助之氏著「總力戰の性格」（十字屋）

鈴木庫三氏著「世界再建と國防國家」（朝日新聞社）

八重樫運吉氏著「國防國家の理論と政策」（日本評論社）

高嶋辰彦氏著「皇　戰」（戰爭文化研究所）

ルーデンドル・フ
間野俊夫譯「國家總力戰」

舟橋　茂氏著「獨逸電擊戰の展望」（成武堂）

坂井鎬次氏著「戰爭指導の實際」（改造社）

石川榮耀氏著「防空日本の構成」（天元社）

磯部侑治氏著「倫敦防空戰線」（羽田書店）

近藤春雄氏著「國防國家と文化」（教材社）

森戸辰男氏著「戰爭と文化」（中央公論社）

近藤春雄氏著「文化政策論」（三笠書房）

リデル・ハアート著
江木・星野兩氏譯「英帝國崩壞の眞因」（實業の日本社）

石丸藤太氏著「大戰と日本の進路」（高山書院）
森川覺三氏著「ナチス獨逸の解剖」（コロナ社）
ナチス黨編 同盟通信譯「獨逸西部作戰」（同盟發行）
西谷彌兵衞氏著「戰ふ日本經濟」（新紀元社）
金生喜造氏著「歐洲の現勢」―戰局の展開と地政學（古今書院）
日本評論社版「新獨逸國家大系」
フランケ・グローゼ著「ヨーロッパの悲劇」（日獨出版協會）
日本電報通信社版「獨逸大觀」
戰爭科學研究所譯編「獨逸の戰爭論」（大日本雄辯講談社）
清澤洌氏著「第二次世界大戰の研究」（東洋經濟社）

（以上の參考書は著者の藏書に依る。なほ右ば本書に直接間接に影響し、或は引用せるものに限る）

昭和十六年七月廿五日印刷
昭和十六年七月三十日發行



(停) 定價 壹圓七拾錢 送料十二錢
外地 定價 壹圓八拾七錢

著者 水野正次

發行人 白石榮藏
東京市神田區錦町一ノ七

印刷人 市岡岱
名古屋市中區南久屋町三

發行所 新民書房
東京市神田區錦町一ノ七
電話神田(25)四五三七番
振替東京一五六、一七〇番

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

(日本出版文化協會會員番號一一二、二〇九號)